續國譯漢文大成

文學部　十六

309
65
快入

始

續國譯漢文大成

文學部 第十六册（第四帙の四）

杜少陵詩集 上の四

吉田精一氏 寄贈本

昭和六年 三月 日

309
65

杜少陵詩集　卷六

宣政殿退朝晚出左掖

宣政殿より退朝して、晩に左掖より出づ

天門日射黄金牓。
春殿晴嘯赤羽旗。
宮草霏霏承委珮。
鑪煙細細駐游絲。
雲近蓬萊常五色。
雪殘鳷鵲亦多時。
侍臣緩步歸青瑣。
退食從容出每遲。

宣政殿退朝晚出左掖

【字解】【一】天門　宮殿の門。【二】日射　日は夕日のひかりをいふ。【三】黄金牓　こがねを以て飾りし扁額。【四】春殿　春のなりのごてん、宣政殿をさす。【五】晴嘯　はれてはゐるがすこしくらくなりかけてゐる、題の「晩」の字をあらはす。【六】赤羽旗　赤羽鳥（朱雀）をゑがきたる旗。【七】宮草　宮殿にはえてゐる草。【八】霏霏　こまかき水蒸氣のとぶ貌、元來煙霧を形容する辭なり、ここは露氣のさまをいへるか。一に微微に作る、それは幽靜なる貌、草色をいふ。【九】承　草がそれを受ける。【一〇】委珮

塊はおびもの、委は地につくこと。【二】 鑪煙　香爐のけむり、これ恐らくは殿庭にあるものならん。【三】 細細　ほそぼそ。【四】 駐游絲　駐はとどむ、游絲は「いとゆふ」、「かげろふ」なり、駐の字「游絲ニ駐マル」と自動にみれば煙がそこにとどまるなり、「游絲ヲ駐ム」と他動にみれば煙が游絲をおさへつけておくなり。兩義竝に通ずるも余は後解をとれり。舊說は駐ニ游絲ニとし「游絲のごとく駐まる」又は「游絲の駐まるごとし」として之を煙の形容とみたり、是は蓋し香爐を殿中にあるものとみなしたるに由る、余は香爐を殿庭にありとみる、故に游絲は實物とみなす。【五】 蓬萊　殿の名。【六】 翔鶴　漢の時の觀の名、今借用す。【七】 侍臣　天子のおそばに仕ふる臣、作者左拾遺なれば自らをいふ。【八】 緩步　ゆるゆるとあるく。【九】 青瑣　鎖形に雕刻をほどこし青色にぬりたる門、門下省の門をさす。【一〇】 退食　「羔羊」詩にみゆ、公の門より退きて食事するをいふ。【一一】 出　退出する。【一二】 每　每時、いつも。

【題義】 宣政殿は東内に屬し、含元殿の後（北）に在り。左掖とは左（東）側の小垣門をいふ、作者時に左拾遺の官にあり、門下省に屬す、門下省は東内の東に在るを以て左垣門よりいづるなり。宣政殿の參朝から退きて、夕方に左垣門を出で門下省の方へかへらうとしたときの作。

【詩意】 宮殿の門では夕日のひかりが黃金の額を射、春のごてんの庭では朱雀をゑがいた旗が晴れてはゐるが夕ぐれの色をにほはせつつある。このとき自分が玉珮をひきずつて來ると庭の草は露氣を含みながらそれをうけ、香爐の煙はいとゆふのうへを重く壓してほそぼそとのぼつてゐる。このあたりに浮んでゐる雲は蓬萊宮に近いからいつも五色のいろをしてゐるし、鵷鶴觀かとおぼゆる建物にはずゐぶんながく雪が殘つてゐる。かくして自分はゆつくりとあるいて青瑣門の方へ歸るのだが、自分の詰め所へまかりさがるには、今日にはじめていつもゆつたりとして時刻おくれて退出するのである。

【餘論】 舊解に此篇の前の四句外部より內部に、また早朝以來のさまをのぶとなすものあり。余はすべて退出時のさまとみること上述の如し。

紫宸殿退朝口號

戶外昭容紫袖垂。
雙瞻御座引朝儀。
香飄合殿春風轉。
花覆千官淑景移。
晝漏稀聞高閣報。
天顏有喜近臣知。
宮中每出歸東省。
會送夔龍集鳳池。

戶外昭容紫袖垂、
雙瞻御座を引朝儀を引く。
香飄りて合殿春風轉じ、
花千官を覆ひて淑景移る。
晝漏聞ゆる稀にして高閣報じ、
天顏喜び有つて近臣知る。
宮中より每に出でて東省に歸る、
會送す夔龍の鳳池に集まるを。

【字解】 【一】 戶外　殿の戶のそと。【二】 昭容　女官の階級の名、正二品の位なり。【三】 紫袖垂　むらさきの袖をながくたれる。【四】 雙瞻　ならびみる、左右の各列から昭容が御座へ目をつけること、昭容は左右各一人、文武の兩班の羣臣を前導して殿內に入る。【五】 御座　天子の座。【六】 引朝儀　引はみちびくこと、朝儀は參朝の儀列をいふ。昭容が前導するときは羣臣に面してあとしさりしつつ御座の方へと進むといへり。然らば御座への注目には少しく上體を斜にし半ばうしろむきの姿勢をとる。【七】 香飄　香は花香。【八】 合殿　閣殿なり、殿內全體をいふ。【九】 轉　吹き轉ずること。【一〇】 花覆　花は殿

庭の花、覆はおほふ、實際おほふにはあらず、附近に多く咲く故かくいふ。【一一】 淑景移　淑景はよき日かげ、春日の光をいふ、移とは時刻のかはること、殿中奏對のため時間のたつをいふ。【一二】 雲漏　ひるの漏刻（みづどけい）。【一三】 高閣報　高閣より報知し來る、外庭の高閣に於て宮女之を掌りて刻を報ずといへり。【一四】 天顔　天子のおかほ。【一五】 近臣　近侍の臣、ひろくいふ、但し作者左拾遺にてその一人なり。【一六】 宮中每出　每出宮中としてみるべし、この每の字、歸の字までへかかる。出は退出。【一七】 東省　門下省をさす。【一八】 會送　同僚相會して送る。【一九】 夔龍　舜の時の臣、夔は音樂を典り、龍は民言を君に納るることを掌る、ここは唐の大臣宰相をさす。【二〇】 集　舊說に作者等が集まるととく、今從はず、これは夔龍等が集まるをいふ。【二一】 鳳池　中書省にある池をいふ、晉の荀勗が故事にて、勗、中書令を兼ねしとき奪ふ我鳳凰池といひしによる。このとき唐の政事堂は中書省にあり、故に宰相等そこに集まるなり、而して作者等自己の本省にかへらんとしてその人人を會送するなり。

【題義】 紫宸殿も東内に屬す。南より北へ順次に含元殿・宣政殿・紫宸殿あり。宣政は前殿にして紫宸は便殿なり。口號とは口づから吟ずること。此詩は紫宸殿へ朝して、それより退出するとき口すさめる作なり。乾元元年、左拾遺たりしときの作。

【詩意】 戸の外では女官の昭容が紫色の袖を垂れて、左右にわかれて各〻殿内の御座の方へ目をくれつつ班列をみちびき入れる。殿内には春風に吹きまはされてくまなく香氣がひるがへり、むらがる羣臣のうへに花影を被らしめつつ春の日あしはうつる。殿内おくふかく漏刻の音も聞えぬため外庭の高き閣から時間を知らせてくる。この日は君の御顔もにこやかに御機嫌うるはしきこと近侍の臣の知るとほりである。自分はいつもこのごとくんから退出して東の方、門下省の方へかへるので、そのときはついでに大臣がたが中書省の方へお集まりになるのをうちそろうてお見送りするのである。

春宿左省

花隱掖垣暮。啾啾棲鳥過。
星臨萬戸動。月傍九霄多。
不寢聽金鑰。因風想玉珂。
明朝有封事。數問夜如何。

春左省に宿す

花に隱れて掖垣暮る、啾啾として棲鳥過ぐ。
星は萬戸に臨みて動き、月は九霄に傍ひて多し。
寢ねずして金鑰を聽き、風に因りて玉珂を想ふ。
明朝封事有り、數〻問ふ夜如何と。

【字解】 【一】 花隱　隱はその形のみえなくなること。【二】 掖垣　宮側のかき。【三】 啾啾　鳥のなくさま。【四】 棲鳥　ねぐらにとまらんとする鳥。【五】 星　星光をいふ。【六】 萬戸　宮殿の多くの戸。【七】 月　月光をいふ。【八】 傍　そふ、近づく意。【九】 九霄　ここのへのそら、宮中の天をいふ。【一〇】 金鑰　鑰は鎖前のさしこみのかぎ、之をさしいれてあける。【一一】 因風　風が珂聲をつたへ來らんことを想ふ。【一二】 玉珂　珂は貝の類もてつくれる馬の飾、その數は官位によりて等數あり、これは玉珂とあれば玉にてつくれるならん、他の臣僚についていふ。【一三】 封事　蓋に敬めた密封の上書なり、作者左拾遺にて大事は廷にて諫諍し、小事には封事をたてまつる。【一四】 數　しばしば。【一五】 夜如何　夜の時刻いかに、天明くるや否やをきづかふなり。

【題義】 左省は東省、卽ち門下省なり。春、門下省にとまりばんをした時作る、前詩同年の作。

【詩意】 宮殿のそばのかきが花にかくれて暮れてしまひ、ねぐらにすむ鳥がちやくやとないてすぎゆ

く。それから星の光は宮殿の多くの戸ごとに向つててりだし、月の光は九重のそらちかければことさら多きここちす。寢ねもやらずしてかぎにて門をあけるおとをきき、風のふくままに早朝の人人が玉珂を鳴らしてきはせぬかと想像す。自分にはあすのあさともならば君にたてまつるべき封事があるのである、だから夜あけを待ちかねてたびたび夜のさまいかにと他の人にとうてみる。

晩出左掖

晩に左掖より出づ

晝刻傳呼淺。春旗簇仗齊。
退朝花底散。歸院柳邊迷。
樓雪融城濕。宮雲去殿低。
避人焚諫草。騎馬欲雞棲。

晝刻傳呼淺く、春旗簇仗齊し。
退朝花底に散じ、歸院柳邊に迷ふ。
樓雪融けて城濕ひ、宮雲去りて殿低し。
人を避けて諫草を焚く、馬に騎れば雞棲ならむと欲す。

【字解】【一】晝刻　ひるの水どけいの時間。【二】傳呼　宮廷のものどもの火の用心とよばはるこゑ。【三】淺　聲の小なること、深しといはば大聲あげて奥深くまできこゆる樣にするなり、淺はその反對に近くだけきこゆるほどによばはる。【四】春旗　春は時を記す、旗は近衛の兵の持する儀仗の旗をいふ、簇仗の仗と同一物なり。【五】簇仗　むらがるさしもの。【六】齊　列のそろふこと、舊說に一、二句は朝參のときのことをいふとなす。【七】歸院　院は門下省の左拾遺の詰め所をいふ。【八】樓雪　宮樓の雪。【九】城濕　城は城壁、その樓の基礎の方をいふ。【一〇】殿低　雲近きとき殿高くみえしも、雲去りたるのちはひくきがごとくみゆるなり、此の第五第六の二句は上三字下二字にて文を成す、變體の句なり。【一一】避人　人のみぬ樣に之をさける。【一二】諫草　天子をおいさめ申す文章の草稿、詰め所に草稿をのこし置きて他人が君の過失を知らんことを恐るるなり。【一三】騎馬　舍の方へかへらんとするなり。【一四】雞棲　にはとりがねぐらにすまんとする、夕方をいふ。

【題意】左掖は東內の東側垣門なり、前に見ゆ。此詩は蓋し或日の夕がたこの門より出でて自己の廨舍に歸らんとせしことをいへり。

【詩意】ひるの時刻には宮衛のよばはる聲もはしちかにて儀仗の羽族そろひてならびたるうちにごてんに參朝す。事畢りて朝より退出して花樹の下にて解散し、省中の院に歸らんとして柳樹のあたりにさまよふ。みれば宮樓の雪はとけて樓礎の城壁うるほひ、いままでありし雲が消え去りてのちはありしごてんひくくなりしかとおもはる。人のみぬ場所にて諫疏の草稿をやきすて、詰め所のあとかたづけをして、いざとばかり馬に騎りておのが舍に向はうとすればはや雞がねぐらにつかうとする頃である。

題省中院壁

省中の院壁に題す

掖垣竹埤梧十尋。
洞門對霤常陰陰。

掖垣の竹埤梧十尋、
洞門對霤常に陰陰。

【字解】【一】掖垣　宮側のかき。【二】竹埤　竹にて編みたるひくきかきね。【三】梧　あをぎり。【四】尋　八尺。【五】洞門　門と門と

落花遊絲白日靜。
鳴鳩乳燕青春深。
腐儒衰晩謬通籍。
退食遲廻違寸心。
衰職曾無一字補。
許身愧比雙南金。

落花遊絲白日靜かに、
鳴鳩乳燕青春深し。
腐儒衰晩謬つて籍を通ず、
退食遲廻寸心違ふ。
衰職曾て一字の補無し、
身を許す愧づらくは雙南金に比せしことを。

向ひあひて淵の如くなるをいふ、諸院多く相連ればなり。【八】對置　對とは向ふ側とむきあふをいふ。【九】陰陰　くらつぽいさま。【八】遊絲　いとゆふ。【九】乳燕　子をうみしつばめ。【一〇】青春　五行の思想にて春の色を青とす。【一一】腐儒　自己をさす。【一二】衰晩　老衰、晩暮。【一三】通籍　禁中へわが名ふだを通じおくこと、仕官の義なり。籍とは二尺の竹ふだに年がら姓名その他の様子をかきつけ入門のとき守人と照らしあはす用に供するものなり。【一四】退食　已に見ゆ。【一五】遲廻　定刻よりおくるるをいふ。【一六】違寸心　他詩に「心事違」の語あり、同義なり、おもふことかなはぬをいふ。【一七】衰職　衰とは卷き龍のついた衣、天子の禮服、衰職とは天子の職をいふ。「燕民」の詩に、衰職有し岡、維仲山甫補之とみゆ。【一八】許身　我と我身にかくかくの資格ありとしてゆるす。【一九】愧　作者がはづるなり。【二〇】雙南金　南金は南方荆州揚州の地に產する金銀の類をさす、雙は一對をいふ、何を單位としていへるか明かならず、或は兩鎰（鎰は二十四兩）をいふか。

【題義】門下省のなかにある左拾遺の官の役所の壁にかきつけたる詩。前詩同期の作。

【詩意】宮側の垣壁の編竹のかきねに十尋の高い梧桐がはえてをり、院院相連つて洞門をなし、雨おちのむきあうてゐる處、いつもくらつぽい。さすがにいま花がはらはらとおちちり、かげろふもえてまひるの日のひかり靜かに、鳩が鳴き、燕が子をかへすなど春もいたけなはである。このとき腐儒たる自分は晩年衰へかけてゐるのに、まちがつて仕官をしたのであり、役所のひけ時にもためらうて他人よりおそくまかりさがるが爲さんとしたことはできず本志はくひちがうてゐる。左拾遺といふ天子をお諫め申す役でありながらまだ一字でも君の御職務の闕けた點を補ひたてまつつたこともない、これでは以前我と我が身に許して自己を南金の如き貴重なものに比べたことをはづかしくおもふ。

【餘論】此詩變體とて律詩の變格なり。

送賈閣老出汝州

賈閣老が汝州に出づるを送る

西掖梧桐樹。空留一院陰。
艱難歸故里。去住損春心。
宮殿青門隔。雲山紫邏深。
人生五馬貴。莫受二毛侵。

西掖の梧桐樹、空しく留む一院の陰。
艱難故里に歸る、去住春心損ず。
宮殿青門隔たる、雲山紫邏深し。
人生五馬貴し、二毛の侵すを受くる莫れ。

【字解】【一】西掖　中書舍人は中書省に屬し、中書省は東内の西にあり、東内より中書省へ出入する西側の垣を西掖といふ、書

人の院はそこにあるなり。【七】空　其人在らざるゆゑ「空しく」といふ。【八】一院　院全體、院は舍人の詰め所。【九】陰　樹蔭。【一〇】艱難　世事のなんぎ。【一一】故里　故郷、至の故郷は洛陽なり、そこを經て汝州へ赴く、故に「歸る」といふ、かへりきりにかへるには非ず。【一二】去住　去ると、とどまると、去は賈至についていひ、住は自己につきていふ。【一三】損　損傷の意。【一四】青門　長安城の東、霸城門のこと、此句は至よりいふ。【一五】雲山　雲のゐる山。【一六】紫邏　山の名、汝州梁縣にあり、これは作者よりいふ。【一七】五馬貴　五馬は太守の美稱なり。之を五馬といふは郡の太守（長官）は駟馬（四匹の馬）を用ふるも部内をめぐるときは更に一馬を加ふる故なりともいひ、また太守、秩中二千石を加へらるるとき（祿だか正味二千石を受く）五馬を用ふる故ともいひ、また北齊の柳元伯なる者五人の子、同時に郡を領せしによるともいふ。【一八】受侵　をかされる。【一九】二毛　黑白二種の毛髮、白髮のふえることをいふ。

【題義】賈は賈至、時に中書舍人たり、閣老とは舍人の年深きものをいふ尊稱とし、或は兩省相呼びていふ稱とす、至をさしていふ。汝州は河南省南陽府に屬す。至は河南洛陽の人なり。此の詩は中書舍人たる賈至が長安から河南の汝州へ刺史として出かけるのを送るために作る。乾元元年春の作。

【詩意】中書省の垣門のそばの梧桐の樹。あの樹は君が居なくなつてはいたづらに院内にわたるこかげをとどめてをるばかりである。君はこの世路のなんぎなときに故郷の方へとかへり、いつてしまふ君もとどまつてをる自分もともに春の心をいたむるのである。君からみればこの都の宮殿の方ははるかに青門がへだたつてをり、自分からみれば君の居る紫邏の雲山はおくふかく遠い。人生に於て五馬を用ふるほどの官となれば貴い位置である。どうぞ年よらずにゐて白髮なんぞに侵されぬ樣にせられたい。

送翰林張司馬南海勅碑〔原注〕相國製文

冠冕通南極。文章落上台。
詔從三殿去。碑到百蠻開。
野館穠花發。春帆細雨來。
不知滄海使。天遣幾時廻。

冠冕南極に通ず、文章上台より落つ。
詔して三殿從り去らしむ、碑は百蠻に到りて開く。
野館穠花發き、春帆細雨來らむ。
知らず滄海の使、天幾時か廻らしめむ。

【字解】【一】冠冕　唐の文官のかぶる禮冠をいふ。【二】通　交通すること。【三】南極　南のはて、南海をさす。【四】文章　碑文。【五】台　上國より下國へもちゆくこと。【六】上台　天に上台・中台・下台の六星あり、上台の二星は文昌星に近し、これは宰相の位をいふ、文が宰相の手より成れるを以ていふ。【七】三殿　嶋穂殿（大明宮中にあり）に三面あるゆゑ之を三殿といふとぞ。【八】百蠻　多種の野蠻人の居る地。【九】開　刻石があらはさるるをいふ。【一〇】野館　原野の旅宿。【一一】穠花　うつくしき花。【一二】春帆　はるの舟。【一三】細雨　こまかなあめ。【一四】滄海使　ひろき海をこえゆく使者、張司馬をさす。【一五】天　海路は風波多きゆゑ、かへれると否とは天意による。【一六】遣　して、せしむる。【一七】幾時　いつ。【一八】廻　こちらへもどりくる。

【題義】翰林は翰林院、翰林には司馬の官なし、張司馬は其人詳かならず、南海は廣東地方、勅碑

は石碑に文字をほりつけること。碑文は時の宰相某のつくれるものなり。此詩は翰林の張司馬が南海の地へ碑文をほりてたつるために往くを送るものなり。

【詩意】堂堂と衣冠をつけた我が唐の文官が南方のはての地と交通して上台の高所からあまくだつた機な碑文をもつてゆく。これは天子の詔によりて殿上からゆかしめられるのであり、君が百蠻の地に著くのを待つてこの石碑がそこにあらはさるるであらう。君が陸路を過ぐるときは野館にうつくしい花などさいてゐるであらうし、また海路をわたるときは、春の帆に向つて細細とした雨がふりそそぐことであらう。ただ天は果していつ海上の使者たる君を安穩にかへらせてくれるのであらうか、それは自分のよくわからぬ所である。どうか無事でもどつてくれたまへ。

曲江陪鄭八丈南史飲

曲江にて鄭八丈南史に陪して飲む

雀啄江頭黄柳花。
鵁鶄鸂鶒滿晴沙。
自知白髮非春事。
且盡芳樽戀物華。
近侍卽今難浪跡。
此身那得更無家。
丈人才力猶强健。
豈傍青門學種瓜。

雀は啄む江頭黄柳の花、
鵁鶄鸂鶒晴沙に滿つ。
自ら知る白髮春事に非るを、
且つ芳樽を盡くして物華を戀ふ。
近侍卽今跡を浪にし難し、
此の身那ぞ更に家無きを得む。
丈人の才力猶强健なり、
豈青門に傍うて瓜を種うるを學ばむや。

【字解】【一】啄　ついばむ。【二】江頭　曲江のほとり。【三】黄柳花　黄はわか葉の色をいふ、花は卽ち柳絮なり。【四】鵁鶄　五位鷺の類。【五】鸂鶒　をしどり。【六】晴沙　はれたるすなはら。【七】非春事　「春事に適するものに非る」をいふ。【八】盡　のみつくす。【九】芳樽　花時のさかだる。【一〇】物華　景物のはなやかさ。春事といひ物華といふは、上二句の花鳥についての事狀をさしていふ。【一一】近侍　天子のおそばちかき地位、左拾遺の職位をさす。【一二】浪跡　仕事をまじめに爲さずぶらついてゐること。謹慎していふ。官の職責を十分に盡くさずして俳諧を受くるは浪跡なり、此語によれば作者已に辭官の意あり。【一三】卽今　ただいま。【一四】無家　家とは妻子をさす、家無しとは實に之なきに非ず、妻子を安養し得ずして離散にいたるをいふ。【一五】丈人　長者をいふ、鄭をさす。【一六】傍　附近によるをいふ。【一七】青門種瓜　秦の東平侯邵平といふもの亂にあひ青門の側に隱居し五色の瓜を種う。青門は前にみえたり。

【題義】曲江は長安の南にあり、丈は年長者の尊稱、南史は名なるべし、此の詩は曲江にて鄭南史にしたがつて酒をのみて感をのぶ。

【詩意】雀は江のほとりの柳の花をくちばしでつついて餌をあさり、ごゐさぎだの、をしどりだのがたくさんはれた沙はらにゐる。自分は白髮のおぢいさんで春げしきにふさはしからぬことは知つてはをるが、まあまあ花鳥のさまをこひしたうて酒だるのさけをのみほしてゐる。天子のおそばちかく仕

へる地位ではただいまはさうさうぶらぶらしてゐるわけにはゆかぬし、さりとてまたこの身にとつてはどうして妻子なしでゐることができやう、妻子もやしなはねばならぬ。(實はこまつたものだ。)之に反してあなた(鄭をさす)なんぞはまだ才も力もつよくすこやかである、どうしてあの隱遁者の邵平のやうに、青門ちかくで五色の瓜をうゑるまねをすることがいりませうぞ。

曲江　二首

一片花飛減卻春。
風飄萬點正愁人。
且看欲盡花經眼。
莫厭傷多酒入脣。
江上小堂巢翡翠。
苑邊高塚臥麒麟。
細推物理須行樂。
何用浮名絆此身。

曲江　二首

一片花飛びて春を減卻す、
風萬點を飄へして正に人を愁へしむ。
且つ看る盡きむと欲するの花眼を經るを、
厭ふ莫れ多に傷はるるの酒脣に入るを。
江上の小堂に翡翠集くひ、
苑邊の高塚に麒麟臥す。
細に物理を推すに須く行樂すべし、
何ぞ用ひむ浮名此の身を絆すことを。

【字解】【一】春　春光をいふ。【二】萬點　萬片の花。【三】人　春景に對する人人。【四】且看　ゆく春は仕方なしとしてまあまあとながめること。【五】欲盡花　散り散りてなくならうとする花。【六】經眼　吾が眼前を經過する。【七】厭　いとふ、きらふ。【八】傷多酒　傷は害なり、飲む者の身體をそこなふこと、傷多酒とは多く飲めば吾が

からだを傷害する所の酒。【九】入脣　脣は「くちびる」、入脣は飲むこと。【一〇】江上　江は曲江。【一一】小堂　ちひさなざしき。【一二】翡翠　「かはせみ」、鳥が巣くふとは住む人なきさまなり。【一三】苑邊　苑は曲江のほとりなる芙蓉苑。【一四】高塚　貴人のつか。【一五】臥　たふれふす。【一六】麒麟　墓道にある石造の置きものなり。【一七】推物理　事物の道理を推しはかつてみる。【一八】行樂　ぶらぶら閒行しつつたのしむ。【一九】何用　無用。【二〇】浮名　虛名空名の意、官にありてその職を盡くさずただ官名をになふ、これ實なき名なり。【二一】絆　ほだす、つなぐ。【二二】此身　自己のからだ。

【題義】曲江にて春のおもひをのぶ。

【詩意】ひとひらの花が飛びちつてもそれだけ春の光をへらすのだ、まして風が萬片を吹きただよはすに於ては正に之を見る人をして愁へさせるのである。さりながら花の散るのをせきとめておくわけにもゆかず、無くならうとしてゐる花が眼の前をすぎるのをまあまあとながめる、また多くのめばからだをそこなふ酒ではあるがそれを口中へつぎこんでもかまひはせぬ。見よ、江上の人住まぬ家の小さなざしきには「かはせみ」が巣くひ、御苑ちかくの貴人のたかい塚には石の「きりん」がねてゐるではないか。物の道理をこまかにおしはかつてみると人生すべからく行樂すべきものである、このからだを虛名につながれてゐることは無用のことである。

〔一一〕

朝回日日典春衣。

〔一一〕

朝より回りて日日春衣を典す、

【字解】【一】朝回　朝廷よりかへる。【二】典　質におく。【三】江頭　江は曲江。【四】盡醉　十分

毎日江頭盡醉歸。
酒債尋常行處有。
人生七十古來稀。
穿花蛺蝶深深見。
點水蜻蜓款款飛。
傳語風光共流轉。
暫時相賞莫相違。

毎日江頭に醉を盡くして歸る。
酒債は尋常行處に有り、
人生七十古來稀なり。
花を穿つの蛺蝶深深として見え、
水に點するの蜻蜓款款として飛ぶ。
語を傳ふ風光「共に流轉して、
暫時相賞せむ相違ふこと莫れ」と。

【詩意】自分は朝廷からもどると日日に春のきものを質において錢にかへ、曲江のほとりでいつも十分の醉をきはめて歸るのである、酒の借金はめづらしいことではなくどこでもゆく先先にあるし、古來七十までいきる人はまれである。(借金があるからきものを質におくのであり、長生きが少いから醉をきはめるのだ。)花の木のまをくぐつてゆくてふてふは奥深く見えるし、水面にお尻をたたくとんぼは緩やかに飛びつつある。いかにも春だ。自分は因つてこの風光にことづてをする、我は汝風光と共にここに徘徊して、しばしその眺めをめでるから、汝は自分にそむかぬ樣にしてもらひたい、と。

【餘論】此詩の尾二句諸解あり、

傳語、豈言二同舍郎一乎。(分門集註、草堂詩箋)

右は同僚に傳語すととく、

傳語風光共流轉、傳二語時人一、使レ知ニ人生與二風光一、共爲二流轉一、難レ得而易レ過者也。(邵寶、分類集註)

右は傳二語(時人)一、(人生)風光共流轉ととく、

共流轉、共字對二花蝶等一言。(仇氏詳註)

右は風光が花蝶とともに流轉すととく、

傳語二句、作ニ寄二語風光一解一、言、爾只管共二物情一流轉、豈知人生相賞、乃暫時事、爾莫二便相違一。(浦氏心解)

右は傳二語風光一、(爾風光)共二(物情)一流轉、暫時相賞、(爾)莫二(便)相違一ととく。

曲江對レ酒

苑外江頭坐不レ歸。

曲江にて酒に對す

苑外江頭に坐して歸らず、

【字解】【一】苑　芙蓉苑。【二】江　曲江。【三】水精宮殿　水精は水晶なり、水精宮殿とは畫舫に或は

によふ。【四】酒債　飲酒料金の負債。【五】尋常　あたりまへ、めづらしくもなく。【六】行處　でかけてゆく先き先き。【七】人生(一句)蓋し古詩なり。【八】穿花　穿とは花のしげみを奥ふかくいりこむこと。【九】蛺蝶　てふてふ。【一〇】深深　おくふかき貌。【一一】點水　點はぽちぽちと尻にてたたくさま。【一二】蜻蜓　とんぼ。【一三】款款　緩緩と同じ、ゆるやか。【一四】傳　移轉、漂泊、徘徊。【一五】共　我、汝(風光)とともに。【一六】流轉　移轉、漂泊、徘徊。【一七】相賞　風光を賞する。【一八】莫相違　汝、我と違背することなかれ。「共流轉、暫時相賞莫相違」は傳語の内容なり。我將欲二與レ汝共流轉、而暫時相賞一、汝莫二相違一」の義なり。

傳語　ことづてする、風光に向つていふ。【一九】風光　はるげしき。【二〇】相賞　風光を賞する。【二一】莫相違　汝、我と違背することなかれ。「共流轉、暫時相賞莫相違」は傳語の内容

(一)水精宮殿轉霏微。
桃花細逐(八)(七)梨花落。
黃鳥時兼(九)白鳥飛。
(一〇)縱飲久判(一一)(一二)人共棄。
(一三)懶朝眞與世相違。
(一四)吏情更覺(一七)滄洲遠(一八)。
(一九)老大徒傷未(二一)拂衣。

水精の宮殿轉た霏微たり。
桃花細かに梨花を逐うて落ち、
黃鳥時に白鳥と兼に飛ぶ。
飲を縱にし久しく判して人共に棄つ。
朝するに懶く眞に世と相違ふ。
吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを、
老大徒に傷む未だ衣を拂はざるを。

宮殿の水に近きをいふとし、或は大藥園に水精を以て柱となせる宮あるをひきてとく。余は水晶を用ひて飾りし宮殿かとおもふ。【四】韓　うたた、いよいよ、看る看るうちにいよいよなり。【五】霏微　仇氏は春光掩映の貌とせり、蓋し霏微は水氣のこまかにとぶさまをいひ、ここは水晶の光のちらつくさまをいへるならん。【六】細　花なる微小物が微小物を逐ふ故に「こまか」といふ。

【字解】【一】水精　水晶。【二】宮殿轉霏微　宮殿の水に近きをいふ。【三】桃花細逐梨花落　桃花は梨花に同じ、楊花は柳絮なり。【四】黃鳥時兼白鳥飛　「楊花」に從ふべし、梨は梨に同じ、楊花は柳絮なり。【五】縱飲　かつてに酒をのむ。【六】判　已に卷三重過何氏詩の第五首に見ゆ。判、拚、拚、拚、みな同義、物を擲ひ棄つることなり、ここは自棄の義にて、すて身、くそやけ、の意。【七】人共棄　世間の人みなともに我をすつ、あひてにせぬをいふ。【八】懶朝　朝廷へ參向するにものうし、病氣缺勤をすること。【九】與世相違　世人とあひそむいてをること、ひとまじらひをせぬ。【一〇】吏情　官吏としてのこころ、作者は現に左拾遺の官たり。【一一】更覺　更とは未仕以前に對していふ、これまでよりもつとの義。【一二】滄洲　仙境をいふ。【一三】遠　こちらとへだたりがある。【一四】老大　自己のとしよりの身なるをいふ。【一五】徒傷　むだにかなしみいたむ。【一六】拂衣　衣のちりをはらうてここを去り滄洲に向ふをいふ。

【題義】曲江のほとりで酒にむかひて作れる詩。前詩同年の作。

【詩意】自分はこの芙蓉苑の外、曲江の頭で舍にもどらずぢつとすわりこんでながめると、水晶で飾つた宮殿はみればみるほどその光りをちらつかせてゐる。それから落ちちる桃の花は微細にもやなぎの花のちるあとをおひかけて落ちちるし、黃色の鳥たちは時として白色の鳥たちといつしよに飛んでゐる。自分はきままに酒をのんでながいあひだくそやけ氣分になつてをり、世間の人みなからみはなされてをるし、參朝することがおつくうで實際自分も世の人とは違背してをるのである。官吏としての今のこころもちでは、これまでよりももつと滄洲の仙境とへだたりができた樣な氣がするのであつて、老大の身にとつてはいまだに衣を拂うて仙境に向つて去らぬことをいたづらにいたみかなしむのである。

曲江對雨

(一)城上春雲覆苑牆。
(二)江亭晚色靜年芳。

曲江にて雨に對す

城上の春雲苑牆を覆ふ、
江亭晚色年芳靜かなり。

【字解】【一】城上　苑中離宮の城樓のうへ。【二】覆　おほふ。【三】苑牆　芙蓉苑のかき、土塀。【四】江亭　曲江のほとりの亭、作者の宅

林花著雨燕支濕。　林花雨を著けて燕支濕ひ、
水荇牽風翠帶長。　水荇風に牽かれて翠帶長し。
龍武新軍深駐輦。　龍武の新軍に深く輦を駐め、
芙蓉別殿漫焚香。　芙蓉の別殿に漫に香を焚く。
何時詔此金錢會。　何の時か詔して此の金錢の會あつて、
暫醉佳人錦瑟傍。　暫く醉はむ佳人錦瑟の傍。

慶宮）に在り出遊せず、故に、深く輦をとどむといふ。南内より曲江まで夾城を築きて往來に便にせしこと已に前に見ゆ。【一二】芙蓉別殿　芙蓉苑にある離宮。【一三】漫焚香　留守居の宮女などが香を焚く、漫とは玄宗の出遊もなきにいたづらにといふこと。【一四】詔　肅宗の御命令をいふ。【一五】金錢會　上巳節には曲江の山亭にて臣僚に宴を賜はることあり、又、承天門に宴して、餘興として樓下に金錢を撒きて臣下をして之を拾はしむることあれば、この金錢會もかかる例ありしことをいふに似たり。【一六】佳人　美人、敎坊の伎女をいふ。【一七】錦瑟　錦の模樣ある瑟。

する地。【五】晚色　くれがたのやうす。【六】靜　閑靜。【七】年芳　一年のうちのかんばしきもの、花草の類をさす。【八】燕支　胭脂（紅藍）なり。【九】水荇　「あさざ」。【一〇】翠帶　みどり色のおび。【一一】龍武新軍　新におかれし龍武軍、龍武はその軍隊の名、禁中護衛の兵なり。【一二】深駐輦　輦は手にてひく車、玄宗時に上皇として南内（興

【題義】曲江にて雨に對して作る。蓋し乾元元年三月上巳節の作。

【詩意】城樓のうへの春の雲が芙蓉苑の土塀におほひかぶさり、自分のやすんでゐる江邊の亭ではあたりが暮れかかつて花や草がしづかによこたはつてゐる。すなはち林の花は雨をつけて「えんじ」色がうるほひ、水のなかの「あさざ」は風にひかれて翠色の帶が長くひきはへられてゐる。このとき上皇（玄宗）は新に置かれた龍武軍に衛られて興慶宮の奥にふかく輦をとどめられてをり、この芙蓉苑の別殿では上皇の出遊もないのにただみだりに香を焚いてお待ちしてゐる。上巳といへば前代（玄宗の代）にはさかんなものであつたが、いつ今の天子（肅宗）から仰せごとがでて、金錢を拾はせる樣の御會を催され、自分も敎坊の美人のかなでる錦瑟のかたはらで、しばし醉ふことができることであらうか。

奉答岑參補闕見贈

窈窕清禁闥。罷朝歸不同。　窈窕清禁の闥、朝罷みて歸ること同じからず。
君隨丞相後。我往日華東。　君は丞相の後に隨ひ、我は日華の東に往く。
冉冉柳枝碧。娟娟花蕊紅。　冉冉として柳枝碧に、娟娟として花蕊紅なり。
故人得佳句。獨贈白頭翁。　故人佳句を得、獨り白頭翁に贈る。

岑參補闕が贈らるるに答へ奉る

【字解】【一】窈窕　おくふかくしづかな貌。【二】清禁闥　ちり氣なき禁中の小門。【三】罷朝　參朝のこと了るをいふ。【四】同　めいめいの院へかへる。【五】丞相　宰相。【六】日華東　日華は門の名、宣政殿の前面に東西兩廊（廊は廊下なり）ありて、各〻門あり、東なるを日華門といふ、その東は門下省なり、之を左省といふ、卽ち作者の屬する所なり。西なるを月華門といふ、そ

の西は中書省なり、卽ち岑參の屬する所なり。【七】 舟丹　しだいにのびる貌。【八】 娟娟　美くしき貌。【九】 故人　ふるなじみ、岑參をさす。【一〇】 佳句　よき詩句、卽ち參の原作をさす。【一一】 白頭翁　作者自己をいふ。

【題義】 岑參補闕は右補闕岑參をいふ。參は作者の推薦によりて此の官に任せらる。右補闕は中書省に屬す、此詩、參が任官の後、

聯ㇾ步趨二丹陛一。　分ㇾ曹限二紫微一。　曉隨二天仗一入。　暮惹二御香一歸。　白髮悲二花落一。　青雲羨二鳥飛一。
聖朝無二闕事一。　自覺二諫書稀一。

【詩意】 塵埃の氣なく清らかな御所内の宮門は奥深い。參朝了つてそこよりめいめいの院へかへるとき我我は所屬がちがふので東西別別にかへる。すなはち君は宰相のあとについて西なる中書省へとゆき、自分は日華門の東へでて門下省の方へとかへるのである。今しも柳枝の葉がのびて碧であり、桃杏などの花蕊がくれなゐにうつくしくさいてゐる。かかるをりに舊友である君はよい句を得て、特別にこの老人に贈つてくだされた。(まことにかたじけないことである。)

奉ㇾ贈二王中允維一

王中允維に贈り奉る

中允聲名久。如今契闊深。
中允聲名久し、如今契闊深し。
共傳收二庾信一。不ㇾ比得二陳琳一。
共に傳ふ庾信を收むと、比せず陳琳を得るに。
一病緣二明主一。三年獨此心。
一病明主に緣る、三年獨り此の心。
窮愁應ㇾ有ㇾ作。試誦白頭吟。
窮愁應に作有るなるべし、試みに誦す白頭吟。

【字解】 【一】 中允　維をさす。【二】 如今　いま。【三】 契闊　勤苦なる貌。【四】 共傳　世間の人がともにいひつたへる。【五】 收庾信　梁の侯景の亂の時、簡文帝は庾信をして朱雀航に警せしむ、景至る、信、衆を以て江陵に奔る。元帝、信を以て御史中丞となす。收とは收錄し、採用すること。【六】 不比　くらべられぬ。【七】 得陳琳　魏の曹操、袁紹と相爭ふ、初め陳琳は紹がために檄を討つ檄文を草す、後ち操に事ふ。得とは操が之を得て用ふるをいふ。【八】 一病　癖といつぱりしこと。【九】 明主　天子(玄宗)をさす。【一〇】 三年　天寶末より乾元初年までの間。【一一】 此心　節を守る心。【一二】 窮愁　戰國趙の虞卿が故事、窮して愁ふる、維の困窮をいふ。【一三】 作　詩をつくること。【一四】 試誦　作者が誦する。【一五】 白頭吟　舊解、漢の司馬相如が妻卓文君、夫の妾を買はんとするをききて賦せる「白頭吟」を引き、維が詩、君に對して二心なきをいふことと之と似たりととく。又、鮑照が「白頭吟」の直如二朱絲一、清如二玉壺氷一を引き維が心事潔白なるをいふとなす。これは玆に白頭吟を以て維が作にたとふとみるなり。余は之に從はず、白頭吟とは作者が自己の詩卽ち此の詩篇をさしていふものとみる。作者の寄二楊五桂州譚一詩に、江邊怒二孤鶩一、遠附二白頭吟一といひ、示二兩兒一に、關關思二弟妹一、行坐白頭吟といひ、舍弟觀赴二藍田一、取二妻子一云云に、歡創提攜如宦遊、寡多行坐白頭吟といへる、みな自己の作をさして白頭吟といへり。此詩の場合も同じ。

【題義】 太子中允たる王維に贈れる詩。乾元元年の作なるべし。王維は天寶の末年に給事中の官なりしが玄宗蜀に奔りしとき從ふに及ばず、賊軍に得らる、維、藥をのみて痢を取り詐りて瘖の病なりと稱す。安祿山もとより之を憐みしが、人を遣はして洛陽に迎へ來らしめ普施寺(或は曰く菩提寺)に拘

す、維、詩を賦して曰く、

萬戸傷心生二野煙一。百寮何日更朝レ天。秋槐葉落空宮裡。凝碧池頭奏二管絃一。

と。賊迫りて僞官に署す。賊平ぎて賊に陷りし官は罪せらるべかりしとき前詩を奏す、肅宗之を宥して太子中允を授く。此詩は作者が其の頃維に贈れるもの。

【詩意】あなたの名聲あることは久しいものであるが、ただ今では非常に深い勤苦をしてをられる。世人のいひつたへる所ではあなたは庾信が元帝に採用せられたやうに採用されたといふことだが、曹操が陳琳を得たことなどとはくらべものにならぬのである。あなたはただ明天子を忘れず思はるるがために病氣となられたのであり、三年のあひだただただ守節の心を持してをられたのである。あなたは窮愁の境遇に居られてはさだめしお作があることであらう、それをきかんと欲して、自分は先づ試みにこの抽吟をくちずさんでみるのである。

送許八拾遺歸二江寧一覲省。甫昔時嘗客遊此縣。

於許生處乞二瓦棺寺維摩圖樣一。志二諸篇末一

許八拾遺が江寧に歸り覲省するを送る、甫昔時、嘗て此縣に客遊し、許生の處に於て、瓦棺寺の維摩の圖樣を乞ひ、諸篇末に志す

詔許辭二中禁一。慈顏赴二北堂一。

聖朝新孝理。祖席倍輝光。

內帛擎偏重。宮衣著更香。

淮陰清夜驛。京口渡江航。

竹引趨庭曙。山添扇枕涼。

十年過父老。幾日賽城隍。

看畫曾飢渴。追蹤恨森茫。

虎頭金粟影。神妙獨難忘。

【字解】【一】許八拾遺　許は姓、其名は詳ならず、拾遺とあれば作者の同僚なり。【二】江寧　今の江蘇省江寧府。【三】覲省　詩によれば身にお目みえをなし安否を省するなり。【四】客遊　旅客としてあそぶ。【五】此縣　江寧。【六】許生　許八。【七】瓦棺寺　棺の字は官に作るを正とす、晉の武帝の時建つともいひ、又、東晉哀帝の興寧二年（三六三）に、詔して陶官を淮水の地に移し、南岸の窓地を僧慧力に施して瓦官寺を造らしむともいふ。建康（卽ち江寧）の城の西南隅にありし寺なり。【八】乞維摩圖樣　乞とは作者が之を得んことをこひしなり、圖樣とは模寫の圖ないふならん、維摩圖とは顧愷之の畫きたる維摩詰の像ないふ。【九】志　誌に同じ。【一〇】中禁　禁中なり。【一一】慈顏　母のかほ。【一二】北堂　母の室。【一三】孝理　孝理は孝治、以レ孝治二天下一の略語、去年（乾元二年）上皇（玄宗）が長安に迎へ、今年（乾元元年）正月上皇に尊號をたてまつる、天子詔して中禁を辭するを許さる、慈顏北堂に赴く。

聖朝孝理新に、祖席倍輝光あり。

內帛擎ぐること偏に重く、宮衣著けて更に香し。

淮陰清夜の驛、京口渡江の航。

竹は趨庭の曙を引き、山は扇枕の涼を添ふ。

十年父老に過る、幾日か城隍に賽せむ。

畫を看て曾に飢渴、追蹤森茫たるを恨む。

虎頭が金粟の影、神妙獨り忘れ難し。

がその親に事ふる範を示さるるなり、之によりて臣下にも歸省をゆるされしとみゆるなり。【一四】 祖席　送別の宴席、別にあたりて古人、道祖神をまつる、故に祖席といふ。【一六】 倍　ますます。【一七】 内帛　宮中より下賜のきぬ。【一八】 擎　ささげる。【一九】 宮衣　宮中より下賜の衣。【二〇】 淮陰　江蘇省淮安府山陽縣。【二一】 清夜　春の夜をいふ。【二二】 驛　しゅくば。【二三】 京口　江蘇鎮江府丹徒縣、對岸の揚州より江をわたりてここへつき、それから江寧へはひる。【二四】 渡江航　江は揚子江、航は舟。【二五】 竹　家にある竹林。【二六】 引　みちびく。【二七】 趨庭　孔子の子伯魚が故事、「論語」にみゆ、ここは母のおいでになる室の中庭へでむくをいふ。【二八】 扇枕　後漢の黄香が故事、香、夏のあつき夜、親の枕をあふぎにてあふぐ。【二九】 十年過父老、幾日賽城隍　（一に賜書詩「父老、酒樂城隍」に作り、或は春陽縣人妻、秋期燕子涼、に作る。）父老とは故郷の老人たちをいふ、賽はお禮まゐりすること、城隍は土地の神にして民の生活を保護してくれるものなり。清の顧炎武は北齊書の墓容儼がことを引きて、史傳に城隍神の見ゆる初なりとせり。【三〇】 曾　層に同じ。【三一】 飢渴　饑ゑて食を欲し、渴して飲を欲するごとく壹を欲求せしこと。【三二】 追隨　過去の行迹をいまから追憶するかゐ、「恨」へかかるに非ず、句法「恨」追隨之蘂花」と同じ。【三三】 蘂花　とほくはなれてはてもなき魂、この二字「追隨」へかかる。【三四】 虎頭　顧愷之、字は長康、小字は虎頭、晉陵無錫の人、愷之、瓦官寺の壁に維摩詰の像をあがき開眼の日に三日にして百萬錢を檀家より得て寺に施せしといふ。【三五】 金粟影　金粟如來の壹、維摩詰は邦提の子、廣譯「淨名」の義、過去に成佛して金粟如來と號せしといふ。【三六】 神妙　壹の絶妙なること。

【題義】 同僚許君が江寧へかへつてその母をみまふのを送る作である。自分はむかし江寧にあそんだとき許君のところで瓦官寺の顧愷之筆維摩詰圖の寫しをもらつたことがある。自分はその圖をひどく愛したもので、そのことはこの詩篇の末にかきつけてある。

【詩意】 君は詔をうけて禁中からおいとまごひして立ち去ることをゆるされ、これから母上のおかほを拜するためにその居らるる室へとゆかれるのである。このたび聖朝では新に孝治の敎をしかれるので君もその御趣旨にそふべく歸鄉するのであるから送別の席も一層ひかりがあるのである。君は御下賜のきぬをいと重さうにささげて出で、御下賜の衣裳を著けてゆくとき、それは今までよりもつと香ばしくにほふのである。』 君は淮陰あたりの春の夜の驛路を通り、渡江の舟で京口をすぎ、家へ著かれることであらう。そこではあけぼのころ母上の御機嫌うかがひにでるには庭のくれ竹のみちびくがままにでむくことであらうし、君が母上の枕を扇ぎまゐらすときには山の氣もおのづからその涼しさをたすけそへることであらう。君は十年ばかりしていま故鄉の老人たちのところをよぎられるのである、さぞめづらしからう。いくにちぐらゐしたら城隍の神へおまゐりにゆかれることであらうか。』 自分はそれにつけておもひだすが、以前瓦官寺の畫を看てしきりに饑渴の念をうごかしたものだ、あのときのことをかんがへてみると恨めしくも時のへだたりのためはつきりせぬくらゐだ。ただ君から模寫品をもらつたほどのあの顧愷之の金粟如來の像、あれだけはその神妙さがいまにも忘れることができぬ。

因許八奉寄江寧晏上人

許八に因りて江寧の晏上人に寄せ奉る

不見晏公三十年。　晏公を見ざること三十年、

【字解】 【一】 晏公　公は敬語、上人をさす。【二】 三十年　作者の吳越に遊びしは開元十九年、年二十歳の頃にして今此時たる乾元元年に

(四)封書寄與淚潺湲。
(五)舊來好事今能否。
(六)老去新詩誰與傳。
(七)棋局動隨幽澗竹。
(八)袈裟憶上泛湖船。
(九)問君話我爲官在。
(一〇)頭白昏昏只醉眠。

封書寄與して涙潺湲たり。
舊來の好事今能くするや否や、
老い去つて新詩誰か與めに傳へむ。
棋局動もすれば隨ふ幽澗の竹、
袈裟憶ふ泛湖の船に上りしことを。
君に問はば話せよ我官と爲りて在り、
頭白昏昏只だ醉眠すと。

にそれを世間へ傳播してくれやうか。」【一一】棋局　ごばん。【一二】動　ややもすれば、時として。【一三】隨　我より彼(旻公)に旻公が來りてのぼるなり。【一四】幽澗　しづかなたにま、旻公の居處。【一五】袈裟　旻公の著くる「けさ」。【一六】憶　追憶する。【一七】上泛湖船　江寧の近傍にある湖水に作者が泛ぶる船なり。【一八】問君　問の字諸本闕に作る、闕に依て義をなさず、仇氏「杜臆」に從ひて問とす、今之に從ふ、旻公が許にたづねること。【一九】話　君(許)よりはなせ、下句までかかる。【二〇】爲官在　官は健在、左拾遺の官となつて無事である。【二一】昏昏　うとうと。

【題意】許八は卽ち前詩の許拾遺なり。許が江寧へゆくにつけて江寧に居る舊知の僧なる旻上人に寄せたる詩なり。

【詩意】自分は旻上人にあはないことがざつと三十年ほどであるが、このたび手紙をやるにつけしきりに涙がながれる。上人よ、あなたはもとからの物ずきこころが今でも以前どほりにできますか。私も年よつてからは近作があつてもあなたといふ人がゐないから、だれが私のためにそれを世間へ傳へてくれるものがありませう。往年は、私はあなたのお住居の幽澗の竹のほとりでごばんのおあひてをしたこともあり、また私が湖にうかべた船に、あなたがおのりになつたこともあることをおもひだす。許君よ、旻上人が自分のことについてたづねられたならば君はお話ししてください、「私は役人をして達者でをり、あたまは白くなつてただうとうとと酒に醉うて眠つてばかりくらしてゐる」と。

題李尊師松樹障子歌

李尊師が松樹の障子に題する歌

(一)老夫清晨梳白頭。
(二)玄都道士來相訪。
(三)握髮呼兒延入戸。
(四)手提新畫青松障。

老夫清晨に白頭を梳る、
玄都の道士來りて相訪ふ。
髮を握り兒を呼び延きて戸に入らしむ、
手に提ぐ新畫の青松の障。

【字解】【一】老夫　作者自ら稱す。【二】清晨　はれたあした。【三】梳　くしでとかす。【四】玄都道士　玄都は觀(道教のてら)の名長安の朱雀街崇業坊にありしもの、道士は道教の僧なり、卽ち題の李尊師をさす、尊師は尊者といふごとく道士を敬していふ。【五】握髮　とかしつつあつたかみのけをにぎりつ

障子松林靜杳冥。
憑軒忽若無丹青。
陰崖卻承霜雪幹。
偃蓋反走虬龍形。
老夫平生好奇古。
對此興興精靈聚。
已知仙客意相親。
更覺良工心獨苦。
松下丈人巾屨同。
偶坐似是商山翁。
悵望聊歌紫芝曲。
時危慘澹來悲風。

障子の松林靜かにして杳冥、
軒に憑れば忽ち丹青無きが若し。
陰崖卻つて承く霜雪の幹、
偃蓋反つて走らす虬龍の形。
老夫平生奇古を好む、
此に對して興精靈と聚まる。
已に知る仙客の意相親しむを、
更に覺ゆ良工の心獨り苦しむを。
松下の丈人巾屨同じ、
偶坐是れ商山の翁なるに似たり。
悵望聊か歌ふ紫芝の曲、
時危くして慘澹悲風來る。

畫のすがたがかへってきやうだといふなり。【一七】虬龍形　みづち、たつのやうにうねりくねりたるかたち。【一八】奇古　かはつついそいで賓客をむかへるさま。【八】延　こちらへと招請する。【九】手提　手は李の手。【八】障　屏の障子と同じく「ついたて」のこと。【九】杳冥　はるかにくらし。【一〇】憑軒　のきばによってながめる。【一一】若無丹青　丹青とは畫の彩色をいふ、若無とは畫そのものは無いやうで、實物があるやうだといふこと。【一二】陰崖　日のあたらぬそばがけ。【一三】卻承　松幹が崖を壓するさまをいふ、崖よりいふ故に承くといふ。【一四】霜雪幹　霜雪をしのぐみき、松のみきをいふ。【一五】偃蓋　のさばつたおほひ。三蓋松の如く松の枝葉のかさなりあうたさまをいふ。【一六】反走　幹が走るならば普通であるが、これは偃

たふるめかしきもの。【一九】對此　此とは畫をさす。【二〇】興　作者の感興。【二一】精靈　畫者の精神。【二二】仙客　李尊師をさす。【二三】意相親　この畫障をわざわざもってきて見せてくれたるほこちらと親密なればなり。【二四】良工　畫のめいじん、この畫障の筆者をさす。【二五】心獨苦　ひとりで苦心する。【二六】巾屨同　丈人等のづきん・くつが互に同じ。一說に丈人等の巾屨が商山の老人たちと同樣である。【二七】松下丈人　丈人は老人、松下の老人とは畫中の人物をさす。【二八】偶坐　對坐なり、我(作者)之と對して坐するをいふ。【二九】商山翁　漢の高祖の時、秦の亂を避けて商山に隱れ居りし四人の老人をいふ。【三〇】悵望　うらめしくながめる。【三一】紫芝曲　商山の四皓(四人の老者)は東園公・綺里季・夏黃公・角里先生なり、もと秦の博士なりしが世のみだれしにより山にかくれて採芝の歌をつくる、その歌四言十句あり、終りに皤皤紫芝、可以療飢、唐虞往矣、吾當安歸、の語あり。【三二】時危　時世安泰ならぬこと、安祿山、史思明の亂未だ平がわをいふ。【三三】慘澹　ものかなしきさま。【三四】悲風　人をかなしませる樣なかぜ。

【題意】玄都觀の道士李が示したる松をゑがいたついたてに題せる歌なり。乾元元年の作とする說に從ふ。

【詩意】自分はけふのはれたあしたに、しらがあたまをとかしてゐたとき、玄都觀の道士李尊師がたづねてこられたので、大いそぎで髮をにぎりながら、こどもをよんで之を戶內へ請じいれた。みると尊師は手にかかれたばかりの松の木の畫のついたてをひつさげてゐる。」そのついたての松林はしづかにとほくくらくつらなつて居て、のきによつてながめると俄に畫が消えて實物ばかりがある樣におもはれる。くらつぽいそばがけは霜雪をしのぐ松の幹をうけてをり、のさばつた松葉の屋根がかへつて龍のやうなさまを走らせてゐる。」自分はふだん奇古なものを好むが、この畫に向ふと、自己の感興

は忽ち畫者の精神といつしよになつてしまつた。仙客といふべき李尊師のごしんせつはもとよりわかつたが、之をかく時の畫者がどんなにひとりで心を苦しめたかといふことに一層つよくこころづくのである。」　松の木の下に老人たちがかいてあるが、そのいでたちはどれも互に同じである。（或は四皓と同じ樣である。）之と對坐してゐるとどうもその老人たちは商山の老人であるかのやうである。自分も悵然として商山の方をながめてちよつと四皓等が作つたと稱する紫芝のうたをうたふといふと、時世なほ安泰ではなくしてものがなしく悲風が吹き來るのである。

得舍弟消息

風吹紫荆樹、色與春庭暮。
花落辭故枝、風迴返無處。
骨肉恩書重、漂泊難相遇。
猶有淚成河、經天復東注。

舍弟の消息を得たり

風は吹く紫荆樹、色は春庭と暮る。
花落ちて故枝を辭す、風迴りて返るに處無し。
骨肉恩書重し、漂泊相遇ひ難し。
猶淚の河を成す有り、天を經りて復た東に注ぐ。

【字解】【一】紫荆樹　「續齊諧記」に、田廣・田眞・田慶・兄弟三人財を分たんと欲す、其の夜、庭前の三荆樹すなはち枯る。兄弟嘆きてまた財を合せしに、樹またもとのごとく榮ゆとの話あり。ここは兄弟分居のことに用ひたり。【二】辭故枝　落花または落葉がもとの樹枝を離れることを子弟が父母の郷をはなれ居ることに用ふるは、六朝以來の習はしなり。【三】風迴　迴は吹きめぐる、と、花もしたがつて吹かる。【四】返　枝にかへる。【五】骨肉　兄弟のちすぢ。【六】恩書　恩愛の情こもりし手紙。【七】重　貴重なこと。【八】猶　今もなほ。【九】河　あまのかはら。【一〇】經天　經は「わたる」、ひきはへる、上句河の縁語なり。【一一】東注　東方に向つてそそぐ、河南は長安の東にあり。

【題義】舍弟は家弟に同じ、弟をいふ、名は詳ならず。時に弟は河南にあり、作者は長安に在り。長安にて河南にある弟のたよりを得て作れる詩。

【詩意】風が庭前の紫荆樹を吹いて、樹の色が庭の色とおなじく暮れてゆく。その花はもとの枝から辭し去つて、それが風に吹きつけられ、もとの枝へかへらうとしてもかへるべき處とてはない。漂泊の身の上で互にであふことはむつかしいので、この際のちすぢのものの手紙はことに重んずべきものである。自分は今もなほ涙が天の河の樣になながれ出て、それが大空をわたつておまへの居る東の方へむけてそそぎつつあるのだ。

送李校書二十六韻

代北有豪鷹、生子毛盡赤。
渥洼騏驥兒、尤異是虎脊。
李舟名父子、清峻流輩伯。

李校書を送る、二十六韻

代北に豪鷹有り、子を生めば毛盡く赤し。
渥洼の騏驥の兒、尤異なるは是れ虎脊。
李舟は名父の子、清峻流輩の伯なり。

人間好少年、不必須白皙。
十五富文史、十八足賓客。
十九授校書、二十聲輝赫。
衆中每一見、使我潛動魄。
自恐二男兒、辛勤養無益。
乾元元年春、萬姓始安宅。
舟也衣綵衣、告我欲遠適。
倚門固有望、斂衽就行役。
南登吟白華、已見楚山碧。
藹藹咸陽都、冠蓋日雲積。
何時太夫人、堂上會親戚。
汝翁草明光、天子正前席。
歸期豈爛漫、別意終感激。

人間好少年、必しも白皙なるを須ゐず。
十五文史富み、十八賓客足る。
十九校書を授けらる、二十聲輝赫たり。
衆中に每に一見す、我をして潛かに魄を動かさしむ。
自ら恐る二男兒、辛勤養ふも益無からむことを。
乾元元年の春、萬姓始めて宅に安んず。
舟也綵衣を衣て、我に告ぐ遠く適かむと欲すと。
門に倚る固より望む有り、衽を斂めて行役に就く。
南登白華を吟ず、已に見る楚山の碧なるを。
藹藹たる咸陽の都、冠蓋日に雲積す。
何の時か太夫人、堂上親戚を會せむ。
汝が翁明光に草す、天子正に席より前む。
歸期豈に爛漫たらむや、別意終に感激す。

顧我蓬屋資、謬通金閨籍。
小來習性懶、晚節慵轉劇。
每愁悔吝作、如覺天地窄。
羨君齒髮新、行己能夕惕。
臨歧意頗切、對酒不能喫。
迴身視綠野、慘澹如荒澤。
老雁春忍饑、哀號待枯麥。
時哉高飛燕、絢練新羽翮。
長雲濕褒斜、漢水饒巨石。
無令軒車遲、衰疾悲宿昔。

顧みるに我蓬屋の資、謬つて金閨の籍を通ず。
小來習性懶なり、晚節慵轉劇し。
每に愁ふ悔吝の作るを、天地の窄きを覺ゆるが如し。
羨む君が齒髮新に、己を行うて能く夕惕するを。
歧に臨みて意頗る切なり、酒に對して喫する能はず。
身を迴らして綠野を視れば、慘澹として荒澤の如し。
老雁春饑を忍び、哀號して枯麥を待つ。
時なる哉高飛の燕、絢練たり新羽翮。
長雲褒斜を濕す、漢水巨石饒し。
軒車をして遲からしむる無かれ、衰疾宿昔を悲しむ。

【字解】【一】代北　山西省代州の北。【二】豪鷹　大きい「たか」。【三】渥洼　西域にある水の名、已に「沙苑行」にみゆ。【四】馱騾　一日千里をゆく馬。【五】尤異　すぐれて他とことなるもの。【六】虎脊　虎のごときせなか、虎の字或は龍に作る。【七】名父　有名な父、卽ち岑參。【八】清峻　人品の清らかにすぐれたさま。【九】滉瀣　なかま。【一〇】伯　かしら、長。【一一】人間　人間に於ては。【一二】好　よきこと。【一三】須　もちゐる、まつ、いりようとする。【一四】白皙　皙しくつきり白き

いこ。【三】 宮文史　ふみおほえたる書物多し。【三】 足　たる、十分多きいこ。【三】 故事　故事故の位。【三】 事　名事。【三】 風雅　ひりがやく。【三】 衆中　衆人のうちにて。【三】 動静　たましひたうごかす、おどろく。【三】 二明見　作者の二子宗文、宗武。【三】 幸勤　な人やしほれたる。【三】 衆　衆所すること。【三】 貴姓　人民。【三】 安宅　宅は居なり、心に安んじて安住する、真安が鼠の手より回復されしをいふ。【三】 衣緑衣　上の衣の字は著るいこ、手著にとも、緑衣は五色のうち、老萊子といふもの老親をたのしませたる五采の衣をつけて、こどものまねせし話あり、まだ白髪なるものも十にして回に帰のいこたなせり。【三】 慈闈　慈母くゆ。【三】 母門　貴国の母、貴の王朝貴の母、その子のかくりおそまこそは門によりて之を望む、母の子を思ふ情はだれもしかり。【三】 堂　上の作門に屬す、母門之堂といふいこ。李舟の母のゐをいふ。【三】 慈母　こうもりのつまをとりつくろふ。【三】 行役　たび。【三】 南登　南のかた荆楚にのぼる。【三】 白華　詩経の小雅の中の篇しだる詩篇の名、其序に孝子之潔白也とあり、孝子の潔白を以て其の親に孝ふる意をのべたるものなり。詩篇の篇毛びたるにより音の実紅之をつくりて和ふ。【三】 麦山　麦安より南くゆ、こは荆中をこほる、荆中はむかし楚の地なり、因つてその地にある山を麦山といふ。【三】 高論　人のたかこえむらがるまこと。【三】 盛国　盛国といふも貴は真安をさしていふ。【三】 思貴　思と貴(くうまのほろ)、官員の用ふるもの。【三】 書部　書のいこ〜書む、書ををいふ。【三】 天天人　李舟の母をさす。【三】 安上　真安の家にての妻上。【三】 汝舟　李舟の父李をさす。【三】 明天　明天皇に於て田舟を起事するいこ、明天は唐の皇名なり、唐の時は中興始がいの皇を皆す、唐にては中興令人が皆す、李が中書に在るいこ唐に見えれにもいの書にもれは其書にありしこをゆ。【三】 御筆　天子の書あるをいふ、唐の文宗が貴宜の書のはなしに身がいりて唐書のまくくのりだしてきし故事。【三】 雄勢　李舟がもとる雄勢。【三】 興来　作者意し汪意を同意に用ひたり。起筆としてきまらぬいこをいふ。【三】 別意　李舟の別るるいこ。【三】 素尾食　よもやの生えだいくに居るべき食、食を食に作る、食はすがたなり。【三】 周令回雁　日に向にゆ、令者門に名を著すること、仕官するいこ。【三】 小来　幼小のこを以来。【三】 聖性　聖性、天性。【三】 無　もの、ぶしやこ。【三】 聞　聞字。【三】 書　もの、こ。【三】 書面　うだにはけ。いこいよひこ〜なる。【三】 挙若作　挙若は「鳥」の音なり、挙は「〜ゆ

こ」、若は「鳥を取る」をいふ、作は「おいこ」。【三】 呼　せまし、身の字れこいこなをいこ。【三】 鶴鳴亭　「は」「みたのけ」のこうびやかかかしをいこ。【三】 行己　自己の身をおいなふ。【三】 夕陽　「鳥」の転義九三に、李子後日記録、夕陽若鳥、元稹、夕陽とは夕にもかをれて行ひにつきかをれにましもるたいふ。【三】 岐　えだのさいたから。【三】 宜　作者の別宜。【三】 愛深　あれだ口を地、一説に人愛人深。【三】 老尾　作者自己をたとくていふ。【三】 拍掌　掌の皮剥するをいふ。【三】 時節　時節にかなくるをいふ。【三】 素　李舟をたとくていふ。【三】 海蓮　頃延年の蓮白馬賦にみゆ、注に蓮白馬とあり。【三】 雁　たちはれ。【三】 来書　ながくつらなつたこも。【三】 麦谷　麦中所にある谷の名、北口が麦谷、南口が麦谷、その間七百里。【三】 麦水　麦中所の中央部を麦流し、南して更に湖北省に入る。【三】 雖　多きいこ。【三】 好非　好は「こうまこ」。【三】 遊　かくるいこのおそきなり。【三】 衰病　作者自己のさま、老衰、病病。【三】 宿昔　まくかた。昔宿昔とはまくかたの意味をおもひて今別れにならひかとかなしむなり。裏面には「だから早くかくられよ」といふなり。

【題意】 校書郎李舟が蜀の地へ母を迎へにゆくを送る詩なり。舟、字は公度、隴西の人、虔州刺史・隴西縣男たり、父李は嘗て水部の郎中、眉州刺史となる。仇氏は、その母は恐らくは天寶の亂のとき眉州に在りしものならんといへり。

【詩意】 代州の北に大きい鷹がゐるが、その子をうむや、こだかの毛はみんな赤い。渥洼の水の千里の馬の見は虎の脊の様なせなかのかはりものである。ちやうどそのやうに、李舟は李少といふ有名な父の子であつて、その人品の清峻なことはなかまでのかしらである。人間社會でよい少年は必ずしも色白の美男子であることを要せぬ。李舟は十五歳で十分多く讀書をし、十八で多く賓客に接し、十九で校書郎の官を授かり、二十で名聲はてりかがやいた。自分は来人のなかで舟を一たび見るたびに、

ひそかに驚きてたましひをうごかすのである。舟にくらべてみると自分のうんだ二人の子（宗文、宗武）なんどはいくら骨折つて養育しても益がないときづかはれてならぬ。」　ことしの春（乾元元年）は萬民がはじめておちついて生活することができる。このとき李舟は昔の孝子がしたやうに五色のきものを身につけて、自分に遠方へ旅立ちしようとおもふことを告げた。なるほど舟のおつかさんは門によりながらその子のくるのをながめてをらるるので、舟はきもののつまをつくろひながら旅路につくのである。南の途にとのぼり親に孝養をつくす心をうたうた「白華」の詩を吟じてでかけると、はやくも楚山の碧なのが目にはひる。此の人物多くあつまつてをる咸陽（實は長安）の都では貴顯の士の冠蓋が日日雲の樣につまれてゐる。いつになつたら君の母上はここへおかへりになつて座敷に親戚を會合せられることになるのであらう。君の父上は明光殿に於て詔を起草する職に居られ、天子の寵を蒙つて天子がいつもその話の座では席をすすみでられるほどである。してみれば君はいま旅にたつとしてもその歸る時期はあてどなしといふわけではないのだが、君は自分に對して別れの意をひどくうごかしてゐる。」　他方に自分のことをみてみるに、自分は元來草むらの宿に住んでをるべき素質のものであるのに、謬つて仕官をする身となつたのだ。ちさいときからぶしやうのならはしであるのが、晩年になつてはものうさが一層はげしくなつてきた。いつも自己の行爲について悔吝の念が起るのを心配し、天地の廣きもわが身を容れるにはせまきをおぼゆるのである。羨ましいのは君は年わかで齒も髮もわかわかしく、それで身を行ふには「易」に言うてある君子の如く、夕にもおそれていましめるといふ風であることだ。かかる君に關してはわかれぢにのぞんで自分の意はすこぶる切であり、別れの酒に對してもそれをのむことができぬ。」　ふりかへつて綠色の原野をよくみるに、ものがなしい樣子であれたぬまちの樣である。老いたる雁（自分）は春にあたつて饑餓をしのんで、かなしくさけびながら夏麥の成熟する日を待つてゐる。時節にかなつて高くとぶ燕（君）はたちばねがあたらしく、その飛びかたはいとはやくある。君の行く手に於ては、長くつらなつた雲が斜谷、褒谷をうるほしてゐる、漢水には大きな石がたくさん横はつてゐる。そんな地方へゆくのだが、どうか君の歸りの車をおそくさせぬ樣にしてもらひたい。自分は老衰疾病の身で、ただ君との過去の歡情についておもひうかべて悲しんでゐるのである。

偪側行。贈畢四曜

偪側行、畢四曜に贈る

偪側何偪側。　偪側何ぞ偪側たる。
我居巷南子巷北。　我は巷南に居り子は巷北。
可憐隣里間。　憐む可し隣里の間、

【字解】【一】偪側　或は相迫而居とし、或は巷之隘陋なるをいふとす、しばらく迫近の說に從ふ、場所がくつついてゐること。【二】巷　小路。【三】子　畢をさす。【四】隣里　五家を隣とし、五隣を里とな

十日不一見顏色。
自從官馬送還官。
行路難行澀如棘。
我貧無乘非無足。
昔者相過今不得。
不是愛微軀。
非關足無力。
徒步翻愁官長怒。
此心炯炯君應識。
曉來急雨春風顚。
睡美不聞鐘鼓傳。
東家蹇驢許借我。
泥滑不敢騎朝天。

十日一たびも顏色を見ず。
官馬官に送還せしより、
行路難き、澀、棘の如し。
我貧にして乘無きも足無きに非ず。
昔者相過りしも今は得ず。
是微軀を愛するならず、
足力無きに關するにも非ず。
徒歩せば翻て愁ふ官長の怒らむことを
此心炯炯たり君應に識るなるべし。
曉來急雨春風顚す、
睡美にして聞かず鐘鼓の傳はるを。
東家蹇驢我に借すを許すも、
泥滑かにして敢て騎りて天に朝せず。

す。【六】自從　二字にて「より」。【七】官馬　政府所有の馬。【八】官　政府。【八】澀如棘　棘は「からたち」、からたちの生じたる路はゆきにくし。【九】乘　のりもの、馬をいふ。【一〇】相過　暴曦が家へ過訪せしこと。【一一】不得　過ぎるを得ざるをいふ。【一二】不是　非と同じ。【一三】愛微軀　自分のからだをかあいがる、愛は愛惜し骨をしみすること、微の字は謙遜していふ。【一四】徒步　ものにのらずにただあるく。【一五】翻　かへつて。【一六】官長　上司をいふ。【一七】此心　暴を見んと欲して見るを得ざるこころ。【一八】炯炯　かがやく貌。【一九】君　暴をさす。【二〇】顚　狂顚、あれくるふこと。【二一】睡美　美はここちよきこと。

已令請急會通籍。
男兒性命絕可憐。
焉能終日心拳拳。
憶君誦詩神凜然。
辛夷始花亦已落。
況我與子非壯年。
街頭酒價常苦貴。
方外酒徒稀醉眠。
速宜相就飲一斗。
恰有三百青銅錢。

已に急を請はしむ會ず籍に通せむ、
男兒の性命絕だ憐む可し。
焉ぞ能く終日心拳拳たらむ、
憶ふ君が詩を誦して神凜然たるを。
辛夷始めて花さくも亦已に落つ、
況や我子と壯年に非るをや。
街頭の酒價常に貴きに苦しむ、
方外酒徒醉眠する稀なり。
速に宜しく相就いて一斗を飲むべし、
恰も三百の青銅錢有り。

【二二】東家　東どなりの家。【二三】蹇驢　ちんばひきのろば。【二四】借　かすこと。【二五】朝天　宮中へ參朝すること。【二六】請急　急とは休暇のこと、請急は休暇願ひ。【二七】會通籍　會は「必ず」、通籍とは註籍こと、休暇不參のことを簿籍にかきつける。一說に會通籍とよませ、已に宮門へ通じてある名籍にてらしあはせて不參としておく義とせり。今前說をとる。【二八】男兒性命　自己のこころ。【二九】絕　はなはだ。【三〇】拳拳　奉持する貌、先方を見んことのみをおもひ居るさま。【三一】誦詩　詩を吟すること。【三二】神　精神。【三三】凜然　ひきしまる貌。【三四】辛夷　「こぶし」。【三五】子　暴をさす。【三六】貴　たかいこと。【三七】方外　道士・僧をいふ、「莊子」に彼遊二方之外一者也とみゆ。【三八】酒徒　酒のみなかま。【三九】相就　先方からこちらへ來り就く。【四〇】恰　あたかも、ちやうど。

【題義】偪側の二字は本篇の首の二字をとりて題とし用ふ。行は「うた」なり、詩友畢曜におくれる詩、雨中に來訪せんことをのぞむよしをうたへり。

【詩意】自分たちはどうしてこんなに近い處に住んでをるのか、自分は小路の南に居るし、おまへは北に居る。それに氣のどくなことに、こんな近所にゐながら十日のうちに一べんもかほを見ることができぬ。」自分は政府の馬を政府へ送りかへしてからは、路をゆかうとしてもそのゆきにくいことは、からたちの路でもゆく樣である。自分は貧しくて乘馬はないが足が無いのではない。が、昔はおまへのところをたづねたが今はたづねられぬ。是は自分のからだを愛して骨をしみをするのでもなく、足に力がないからでもない。しかるべき官位に居るものが、かちであるいては長官におこられはせぬかときづかはれるのだ。君を見たいとおもひつつある我が心のいかにありありとかがやいてゐるかは君もしつてゐることだらう。」けふはあけがたから急にふりそそぐ雨で春風も吹きくるうてゐて、自分はいいきもちにぐつすりねむつて鐘や太鼓の音の傳はつてくるのさへきこえつけぬほどであつた。東の家では自分に「ろば」をかしてくれるとのことだつたが、このどろのすべる路では、自分はそれにのつて參朝することはようせぬのだ。だからもはや缺勤とどけをして休暇をねがひださせたので、その旨帳面にかきこまれたであらう。このざまでは自分といふもののいのちもきのどくなものではないか。」自分とてどうしてけふ一日君にあひたい、あへぬ、などいふことばかり思ひつめて居られやう。さぞ君は自己の近作の詩でも吟じて、神氣凜然たるものがあるであらうなどとおもふ。こぶしの花も始めて咲いた、それももはや落ちちつた。(春光はすぎやすい。)まして自分もおまへももはや壯年のものではない。(どうしてただでゐらるるものか。)まちの賣り酒のねだんのたかいにはいつもこまる、このごろは僧、道の友、酒のみなかま、などとも醉つて眠ることがごくすくない。おまへはすこしもはやく自分のところへたづねてきて自分といつしよに一斗の酒をのむがよろしい。自分の手もとにはちやうど青銅錢が三百文あるのである。

贈畢四曜

才大今詩伯、家貧苦宦卑。
飢寒奴僕賤、顏狀老翁爲。
同調嗟誰惜、論文笑自知。
流傳江鮑體、相顧免無兒。

畢四曜に贈る

才大なり今の詩伯、家貧にして宦の卑なるに苦しむ。
飢寒奴僕のごとく賤しく、顏狀老翁の爲す。
同調嗟誰か惜まむ、論文笑うて自ら知る。
流傳せむ江鮑の體、相顧みるに兒無きを免る。

【字解】【一】才大　文章の才、偉大なり。【二】詩伯　伯は長なり、詩伯は詩壇の長。【三】宦卑　仕官の地位いやしくひくし、【四】飢寒　食なく衣なきこと。【五】奴僕賤　申涵光の說にこの語には、(イ)奴僕賤レ主。(ロ)奴僕自賤。(ハ)奴僕爲二人所レ賤。の三解をなし得べしといへり。之によれば、(イ)奴僕ニ賤マル、(ロ)奴僕賤シミ、(ハ)奴僕賤マル、と訓すべし。余は第四說。(ニ)を提

出せんと「奴僕」を「賤」の字の副詞とし、(二)奴僕ノゴトク賤シ、と訓する是なり。【六】老翁爲　老翁のさまをなす。【七】同訓　自分と調子を同じくする、同じく高い古調をなすをいふ。【八】曉　ああ。【九】論文　文章に關することをかたりあふ。【一〇】自知　自分で會得する。【一一】流傳　世上へつたはる。【一二】江鮑體　宋の鮑照、梁の江淹が詩の體、彼我二者の詩につきていふ。【一三】兒無兒　兒のないといふ境涯からまぬかれる、兒あるをいふ。畢に何等の兒ありしや明かならず。作者は宗文・宗武あり。此詩前四句は畢に就き、後四句は彼我相共に寫せり。

【題義】畢曜におくれる詩。時は前詩と同年にあるべし。

【詩意】君は文章の才、偉大であつて今の世の詩壇の長であるが、こまつたことに家は貧しく官地がひくい。それで飢寒にせまられて士人でありながら奴僕のやうに賤位にあるものがうくべき飢寒をうけ、かほの樣子はその年でもないのにおきな然たるさまをしてゐる。君は自分と調を同じくする人だが誰が君の才を惜しんでくれやう、君と文を論じあふときにはおたがひにただ各自がそのうちの眞趣を會得するだけだ。(外人のうかがひ知ることをゆるさぬ。)おたがひの身のうへをみてみるのに幸に子もたずの境涯ではないから、めいめいが作つた江、鮑の詩體は必ずこどもらが世間へつたへてくれるであらう。(これをおもへば聊か慰むるに足るものがある。)

題鄭十八著作丈故居

鄭十八著作丈が故居に題す

【字解】【一】台州　浙江省台州府、虔が流されをる地。【二】地闊　そこまでのへだたりがまどほなること。【三】冥冥　くらき貌。【四】雲水　雲の横ほれる海水。【五】長　つねに、いつまでも。【六】和　俗語、與（と）と同じ。【七】島嶼　嶼はこじま。【八】故人　先方よりみたる故人にて作者自己をさす。【九】雙別淚　雙は雙眼よりくだすをいふ。【一〇】春深　鄭虔は至德二年十二月に台州へ流さる、今「春深」といふは翌乾元元年の季春をいふなるべし。【一一】逐客　放逐されしもの、虔をさす。【一二】浮萍　うきくさ、よるべなき身をたとへていふ。【一三】懶舞　舞とは作者がまふこと、懶は「ものうし」。【一四】相拽　拽は手にてひくこと、舞態をたすくるさまならん。【一五】詩罷　罷とは改め罷むこと、卽ちいろいろとなほすべき處をなほし了ること。

【一】台州地闊海冥冥。
【二】雲水長和島嶼青。
【三】亂後故人雙別淚、
【四】春深逐客一浮萍。
【五】酒酣懶舞誰相拽。
【六】詩罷能吟不復聽。
【七】第五橋東流恨水。
【八】皇陂岸北結愁亭。
【九】賈生對鵩傷王傅。
【一〇】蘇武看羊陷賊庭。
【一一】可念此翁懷直道。
【一二】也霑新國用輕刑。
【一三】禰衡實恐遭江夏。

(三一)方朔虛傳是歲星。
(三二)窮巷悄然車馬絕。
(三三)案頭乾死讀書螢。』

方朔虛しく傳ふ是れ歲星なりと。
窮巷悄然として車馬絕え、
案頭乾死す讀書の螢。

その水をみれば我が恨を生ずる水をいふ。【二〇】皇陂　皇子陂なり、第五橋・皇子陂共に已に鄭虔と何將軍の山林に遊べる詩の中にみえたり。【二一】結愁亭　その亭をみれば我が愁を結ばしむる所の亭。【二二】賈生對鵩傷王傅　漢の文帝の時、賈誼は長沙王の大傅に貶せられ、あるとき鵩鳥（ふくろふ）が家に入るをみて不吉としてかなしみて賦を作る、賈生と王傅とは同一なり、傷＝王傅＝とはやはり賈生がいたむことなり、此の句は鄭虔かつて書八十餘篇を著はして忌諱にふれ謫せらるること十年なりしといふ過去の事をさすといふは舊解なり、しかしここに過去のことをならべる必要なきやに考ふ、故に余は現在の事についていふとみる、卽ち台州に於ける虔の感傷は賈生の長沙に於ける感傷とひとしとの義なるべし。（ただし傷の字は傷＝王傅＝と關じて作者が之をいたむともみらるべし。）【二三】蘇武看羊陷虜庭　漢の蘇武は匈奴に使してひきとめられ、匈奴は之を北海の人なき處に徙して羝（をひつじ）をかはせ、羝が子をうまば歸へらしめんといへり。看羊の看は看守すること、ひつじのばんをするなり、虔が忠心を抱きながら安祿山の賊軍に囚へられ水部郎中を授けられしを武の事を以て辯護していへるなり、賊庭は安祿山が軍中をいふ、陷はそこへおちこむこと。【二四】此翁　翁の字を公に作れるあり、公ならば尊敬の意あり、翁ならば親しむ意あり、ともに虔をさす。【二五】懷直道　正直の道を保持する。【二六】也　俗用にて「ゝまた」、雅言の「亦」の字にあたる。【二七】需　恩にうるほふ。【二八】新國用輕刑　「周禮」の大司寇の條に、刑＝新國＝用＝輕典＝とみゆ、新國とは天子から新しく官を立ててやつた國をいふ、かかる國に刑を用ふるときにはなるべく定めてある刑典のなかで輕い刑を用ふといふなり、それは新國の人民はまだその刑典に通じてゐるものがすくないからである、唐の肅宗が中興せしは他から國をたててもらひしに非れども新興の朝なるを以て古語を借用せるなり、「輕刑を用ふ」とは虔はもと死刑に

【二九】吟　吟とは作者が吟誦するなり、他詩に新詩改罷自長吟ともみゆ。【三〇】復聽　聽とは虔がきくなり。【三一】第五橋　韋曲附近の名稱。【三二】流恨水　恨を流す水、

處せらるるはすなりしを崔圓の盡力にて流罪にされしなさす。【二九】圖衡遭江夏　後漢の末に圖衡、文才あり、曹操之を江夏の太守黃祖がもとに遣りて殺させたり、江夏とは江夏の太守黃祖をさす、此句によれば虔を流さしむるやうはかりし人ありしなり。【三〇】實恐　恐るとは作者がきづかふなり。【三一】方朔、歲星　漢の東方朔は歲星の生れかはりとの傳說あり、漢の武帝はその事がらをみとめたり。【三二】虛傳　歲星だとのいひつたへだけありてそれが天子（肅宗）にはみとめられぬ、故に「虛しく」といふ。【三三】窮巷　鄭虔の住宅のある小路をいふ。【三四】悄然　しょんぼり、ひっそり。【三五】案頭　つくゑのうへ。【三六】乾死　ひからびて死す。【三七】讀書螢　讀書を照らせしほたる、晉の車胤といふもの貧しくして油なく夏には螢を囊に入れて書を照らしてよみしといふ。鄭虔の博學は當時及ぶものなし、その多く書をよみしことを知るに足れり、今、螢のことを借用す。

【題義】鄭著作とは鄭虔をいふ、虔、嘗て著作郎となる、丈とは長者を尊びていふ稱、故居とはもとの住居をいふ、長安の南郊に樊川あり、川にそひ韋曲あり、韋曲の東に韓莊あり、韓莊の東南に鄭莊あり、卽ち鄭虔の居なり、作者の杜陵の宅と遠からず。鄭虔が台州へ流されし後にその住居をすぎて題したる詩なり。

【詩意】鄭虔がながされてゐる台州はここからは遠くはなれてそこの海上はくらく、雲の横はつた海水はいつも島のむれとともに青くみえる。騷亂をへたのちの自分は兩眼からいつも別れの涙をながしてゐる、この春深き時節にあたつて逐客となつてゐる君はよるべなきことうき草のやうである。酒たけなはに興に乘ずればむかしは舞ひだしたものだが今は君がゐぬから舞ふにものうく、舞うてもだれが自分をたすけひいてくれる者があらう。詩ができあがつて吟ずることは今も吟ずるがふたたびそ

れをきいてくれるものはない。かつて君と遊びを共にした第五橋の東に流るる水、それは今では我が恨みをながしつつある水である。皇子陂の岸の北の亭、それは今は我が愁を結ぶところの亭である。』台州にゐる君はちやうどむかし賈誼が鵩鳥に對して心を傷ましめたやうなものであらう、不幸にも君は忠心を抱ける蘇武が匈奴で羊のばんをさせられた如き心をもちながら賊軍のなかへおちこんだのであつたのだ。自分はふかくおもふ、君といふ老人は正直の道をいだいてゐたのだ。(それに刑罰に處せられた。)それでも不幸中の幸は我が新興の朝廷におかれては君を死刑にせず輕い刑を用ひられたことである。自分は君が禰衡が江夏の太守にであうた樣な運命になりはせぬかときづかふ、東方朔が歳星だとのうはさだけはあるが、うはさだけで實は天子からおみとめにはなつてゐない。今自分が君の書宅へきてみると、ゆきつまつた小路はひつそりとして車や馬のおともたえ、つくゑのうへにはかつて君が讀書を照らしたはずの螢がひからびて死んでゐる。（此詩の體は七言の排律なり。）

瘦馬行

東郊瘦馬使我傷。
骨骼硉兀如堵墻。
絆之欲動轉欹側。
此豈有意仍騰驤。
細看六印帶官字。
衆道三軍遺路旁。
皮乾剝落雜泥滓。
毛暗蕭條連雪霜。
去歳奔波逐餘寇。
驊騮不慣不得將。
士卒多騎內廐馬。
惆悵恐是病乘黃。
當時歷塊誤一蹶。
委棄非汝能周防。
見人慘澹若哀訴。
失主錯莫無晶光。

瘦馬行

東郊の瘦馬我をして傷ましむ、
骨骼硉兀として堵墻の如し。
之を絆さむとすれば動かむと欲して轉欹側す。
此豈に仍騰驤せむとするに意有るか。
細かに看れば六印官字を帶ぶ、
衆は道ふ三軍路旁に遺すと。
皮乾きて剝落泥滓雜はり、
毛暗くして蕭條雪霜連る。
去歳奔波餘寇を逐ふ、
驊騮には慣れず將ゐることを得ず。
士卒多く騎る內廐の馬、
惆悵恐る是れ病める乘黃なりしならむことを。
當時歷塊誤つて一蹶す、
委棄せらるること汝が能く周防するに非ず。
人を見て慘澹哀訴するが若く、
主を失ひて錯莫晶光無し。

【字解】【一】東郊　長安の城の東の野外。【二】骨骼　ほねぐみ。【三】硉兀　骨だかき貌。【四】堵墻　ついぢ、かき、骨體が壁のごとく立つをいふ。【五】絆　ほだす、なはにてからげる。【六】欹動　馬がうごかうとする。【七】轉　うたた、いよいよ。【八】欹側　そばだち、かたむく、直立せざること。【九】此　馬のその態度をさす。【一〇】仍　なほ、いままでのやうに。【一一】騰驤　をどりてあがる、馬のいさむさま。【一二】細　看　くはしくみる。【一三】六印　六箇所の烙印なり、一に六を火に作る、火印ならばやき印をいふ。【一四】帶官字　唐の官馬は其の種類用途如何により馬の尾側、左右髀(もも)、左右髆(かた)、項(うなじ)、頰

天寒遠放雁爲伴。
日暮不收烏啄瘡。
誰家且養願終惠。
更試明年春草長。』

天寒く遠く放たれて雁を伴と爲し、
日暮れて收められず烏瘡に啄む。
誰が家にか且つ養はむ願はくは惠を終へむ」
更に試みむ明年春草の長きに。

馬は六箇處に官にて押せし印あるものならん。（上句もし「火印」とせば帯官字は「官」の字をおぶと解すべし。）【一四】 乘道　乘人いふ。【一六】 三軍　天子の軍。【一七】 遺　遺棄する。【一八】 皮乾　脂肪光澤のなくなれるさま。【一九】 剝落　はげちよろ。【二〇】泥泮　どろ、にごりかす。【二一】 毛暗　暗とは光澤を失ひしをいふ。【二二】 蕭條　さびしきさま。【二三】 連雪霜　雪霜連と同じ、雪霜とは白つぼき色をたとへていふ。馬病むときは毛のさきほこりを帯び、色つやあしし、そのさまが雪霜のつらなれるに似たるなり。【二四】 去歲　至德二載。【二五】 奔波　狂奔すること、官兵がはしりまはること。【二六】 遙餘寇　餘寇とは安祿山賊軍ののこり、遙とは官兵之をおふこと。【二七】 不慣　騎るになれぬ。（一說にのりならされてをらぬものととく。）【二八】 騰騰　千里の馬。【二九】 不得奔　奔は「ひきゐる」なり、「騎りひきゐる」なり。【三〇】 士卒　官軍の兵卒。【三一】 騎　のる。【三二】 内廐　天子のおうまや、そこには調練を經た名馬がたくはへてある。【三三】 惻悅　うらむ恨、作者が今日よりさかのぼりてうらむなり。【三四】 恐是　恐とはきづかふこと、これも作者がきづかふ。【三五】 病乘黃　病める乘黃、乘黃とは神馬なり、内廐の駿馬にして上句の「騰騰」といへるも同じ、この瘦馬は乘黃ではあるが不幸にもその病めるものであつたであらう、といふなり。【三六】 當時　遙寇のときをさす。【三七】 壓塊　漢の王褒の遷主得賢臣頌にみゆ、一個のつちくれをとほる、壓は「へる」。【三八】 厭　つまづく。【三九】 委棄　うちすてる。【四〇】 汝　瘦馬をさす。【四一】 能周防　非汝能周防は非汝之所能周防　といふに同じ、周防はおちなくふせぐことをいふ、ぜことのできるものでない」とは「運命だといふほかなし」といふこと。【四二】 見人　他人をみる。【四三】 慘慘　もの

（ほほ）等に燒き印を押す、其の文字には年時、牧監の名あり、龍形・三花の印あり、又、「官」の字、「飛」の字、「風」の字、「鳳」の字、「鳳」の字の印あり。この「出」の字の印あり。

のがなしきさま。【四四】 失主　かひぬしをなくする。【四五】 錯莫　落寞といふがごとし、さびしきさま。【四六】 晶光　すきとほりかがやくひかり、蓋し眼光をいふならん。【四七】 天寒　ふゆぞらをいふ。【四八】 遠放　かひて無きゆゑ遠方まではなたれてある。【四九】 不收　收とは人がうまやへいれてくれるをいふ。【五〇】 啄瘡　きりきずのある處をくちばしでつつく。【五一】 且養　しばらく飼養してくれる。【五二】 願終惠　願延年諸白馬賦に願終惠養蔭本枝　号とあるに本く、願は馬之願がふなり、終惠とは始め例養するといふ惠をあたへるならばそれが最終まであたへてくれるをいふ。【五三】 更試　試とは行走の脚力をためしみること。【五四】明年　旱につぎのとしをさす。

【題義】 道傍のやせうまを見て感をのぶ。至德二載房琯相を罷めしがために作るとの說あれども非ならん。けだし乾元元年作者左拾遺の官をやめられ華州の司功參軍に貶せられしにより、自己の境遇を馬に託してうたへるものなるべし。詩中の天寒遠放の語によれば元年冬の作か。

【詩意】 長安の城の東ののはらに瘦せた馬がゐるが之をみると自分はかなしくなる、その馬の骨ぐみはでこぼこ浮きだし、側面からみると土塀が立つてる樣だ。これを繩でつながうとすると動かうとしていよいよからだをよこにする、その樣子では、この馬はやせてはゐるがまだ以前のやうにをどりあがらうとするきもちがあるのだらうか。仔細にみるとこの馬には官でおした燒き印が六箇所ばかりある、人人のいふ所では官軍がみちばたにすてたのださうだ。その皮はひからびてはげちよろけて、泥やきたないかすが雜つてをり、毛のつやはうせてさびしくまつしろい色がつづいてゐる。』　去年官軍は狂奔して賊軍の餘黨を逐ひまはしたが、その士卒どもは千里の駿足にはのりなれぬからのることが

できず、彼等は多くおとなしく訓練されてゐる宮中のおうまやの馬にのつた。自分のいたましくおもふのは、そのときこの痩せ馬もおうまやの駿馬であつたのだが、病氣でもしてをつたのではあるまいか。病氣ででもあつたのでそのころ土くれのうへをとほるときふとしたことでついけつまづいたのですてられた、そんなわけですてられたのなら、そのすてらるることたるやとても汝（痩馬）が防止し得る所ではないのだ。（運命なのだ。）今この馬は人を見てはものがなしさうにしてかなしみうつたへるが如く、主人を失ひてはさびしく眼の光もうせてゐる。このさむぞらに遠くへはなたれて雁を伴侶となし、日がくれてもとりいれられず、烏がきてきりきずの處をつついてゐる。（以下馬に代りてその心をのぶ。）何人かの家で自分（馬）をかりに飼養してくれるものはないか、もしあるならばどうかそのめぐみを最後までつづけてもらひたいものだ。そしたら、自分は明年春のわかぐさののびたときに更に自分の力をためしてみやうとおもふのだ。

義鶻行

陰崖二蒼鷹養子黑柏顚。
白蛇登其巢吞噬恣朝餐。
雄飛遠求食雌者鳴辛酸。
力强不可制黃口無半存。
其父從西歸翻身入長煙。
斯須領健鶻痛憤寄所宣。
斗上捩孤影噭哮來九天。
修鱗脫遠枝巨顙拆老拳。
高空得蹭蹬短草辭蜿蜒。
折尾能一掉飽腸皆已穿。
生雖滅衆雛死亦垂千年。
物情有報復快意貴目前。
茲實鷙鳥最急難心炯然。
功成失所往用舍何其賢。
近經漏水湄此事樵夫傳。
飄蕭覺素髮凜欲衝儒冠。

義鶻行

陰崖の二蒼鷹、子を養ふ黑柏の顚。
白蛇其の巢に登り、呑噬朝餐を恣にす。
雄飛び遠く食を求む、雌者鳴いて辛酸なり。
力强くして制す可らず、黃口半存する無し。
其の父西從り歸る、身を翻へして長煙に入る。
斯須健鶻を領す、痛憤宣ぶる所に寄す。
斗ち上りて孤影を捩し、噭哮して九天より來る。
修鱗遠枝より脫す、巨顙老拳に拆く。
高空に蹭蹬たるを得、短草に蜿蜒たるを辭す。
折尾能く一たび掉ふ、飽腸皆已に穿たる。
生衆雛を滅すと雖も、死も亦千年に垂る。
物情報復有り、快意目前なるを貴ぶ。
茲實に鷙鳥の最なり、急難に心炯然たり。
功成りて往く所を失ふ、用舍何ぞ其れ賢なる。
近ろ漏水の湄を經、此の事樵夫傳ふ。
飄蕭素髮の、凜として儒冠を衝かむと欲するを覺ゆ。

人生許與分。只在顧盼間。　人生許與の分、只だ顧盼の間に在り。
聊爲義鶻行。用激壯士肝。　聊か義鶻行を爲り、用つて壯士の肝を激せしむ。

【字解】【一】陰崖　北むきのがけ。【二】二蒼鷹　二を或は有に作る、有の字自然なるに似たり、二とは雌雄をさす。【三】黑柏　柏の葉色くろきならん、卽ち老柏。【四】顧　いただき。【五】噬　かむ。【六】辛酸　つらい思ひをする。【七】力强　白蛇の力つよし。【八】黃口　こだかのくちばし黃なる者。【九】無半存　子の半數さへも殘存せぬ。【一〇】其父　父とは雌をさす。【一一】斯須　須臾に同じ、しばしのま。【一二】健　力つよきこと。【一三】痛憤　雌鶻のいたましきいきどほり。【一四】寄所宜　所宜とは鶻に向ひてのべ訴ふる所の言辭をいふ、寄とは寄せ託する、憤を辭に託するなり。【一五】斗上　斗、陡、同じ、たちまち、いきなり。上はのぼること。【一六】捩　ねぢる、螺旋狀にまひつつくだる。【一七】孤影　鶻のただひとつの身影。【一八】嗷哮　はげしく鳴く。【一九】九天　八方及中央の天。【二〇】修鱗　修は脩なり、長きこと、長きうろことは蛇の身をいふ。【二一】脫遠枝　脫は脫離、柏の枝にからみついてゐたのを、そこからはなされるなり、遠枝とは稍ちかき枝なり。【二二】亘瓢　大なるひたひ、蛇首をいふ。【二三】拆　さく。【二四】老拳　鶻のかたいこぶし。【二五】高空　たかきそら。【二六】得脫蹠　蹠跖はつかれる貌、それを得とは蛇のよわるをいふ。【二七】短草　地上のみじかきくさ。【二八】辭鋭鋭　鋭鋭はうれる貌、それを辭すとはしかあることを得ざるをいふ。【二九】折尾　なれた尾。【三〇】掉　ふるひうごかす。【三一】飽腸　たかの子にたべあきたはらわた。【三二】穿　穴をあける。【三三】垂千年　垂とは懸を後世までたれのこすをいふ。【三四】物情　事物の實情。【三五】報復　しかへし。【三六】快意　こころよきこと。【三七】貴目前　目のまへ手近にみるほど貴くありがたい。【三八】玆　鶻をさす。【三九】鷙鳥　つよきとり。【四〇】最　いちばん。【四一】急難　危急難難を救ふをいふ。【四二】心炯然　心、公明正大なるをいふ。【四三】功成　功とは蛇を殺せしことをさす。【四四】失所住　ゆくへがわからなくなる。【四五】用舍　行藏の義、用舍行藏は「論語」にみゆ、用ひらるれば行き、舍かるれば藏る、或は進退とみるも可。【四六】潼水　長安の杜陵にあり、皇子陂より西北流して渭水に入る。【四七】渭　ほとり。【四八】飄蕭　風にふかるるさま。【四九】衝冠冠　髮がたちあがつて冠をつきさうとする、儒者のかんむり、自己の冠をいふ。【五〇】素髮　しらが。【五一】凜　ひきしまり、ぞつとするさま。【五二】ゆるしあたふるなり、分は情分、分誼、あひてあひてに應ずる心づくしなり。【五三】許與分　許與は我が意氣を人にかのまをいふ。【五四】激　はげます。【五五】壯士　天下の勇壯なる人たち。【五六】顧盼　ちよつとよこみふりむいてみること、つ

【題義】義理ある鶻のことをよめるうたなり。鶻は「あをだか」の類、「ぬくめどり」といふ猛鳥なり。詩によれば作者の杜陵の住居に近き潼水のほとりにて樵夫よりききたる話にて、鶻が蒼鷹のために白蛇を殺し、こだかをくひしかたきを討ちたることをのべたり。乾元元年長安にての作。

【詩意】北むきのがけに二匹のあをだかがゐて、黑い柏樹のてつぺんで子をそだててゐた。白蛇がきてその巢にのぼり、その子だかを呑んだりかんだりして、かつてに朝の食事をしてしまつた。」時に雄だかは遠く食物を求むるために飛びだしてゐたが、巢ごもりしてゐた雌だかは鳴きつつらいおもひをしてゐた。蛇の力はつよいからこの雌だかの力では制止しきれず、とうとう黃色いくちばしのこだかは半分ものこらずたべられてしまつた。そこへ雄だかは西の方からかへつてきた。(見るとこのありさまなので)身をかはしてまた煙のながくひきはえた天邊へとはひつてゆき、暫くするとつよい鶻をつれてきた。そして自分の抱いて居た憤りのこころをばのべだすことばに託してすつかりはきだした。」それをきくと鶻はいきなり空へとあがり、そのひとつのすがたを螺旋狀に回轉してくだり、

はげしくさけびほえつつ天からおりて來た。この瞬間、蛇の長身は上方の枝からはなされ、蛇の大きなひたひは鶻のかたいこぶしにめちやめちやにさかれ、高い空でぐなぐなのめにあはされ、もはや地上の草でうねりくねつてゐるわけにはゆかなくさせられた。折られた尾はびくつとうごかしはするが、飽滿した腸はすつかり穴をあけられてしまつた。』　この蛇は生きては多くのこだかをくひたやしたが、死んではみじめな手本を千年の後までたれ殘すことになつた。すべて事物に於てはしかへしといふことがある、この蛇が鶻にかたきうちされたことは眼前におこつたことで愉快さはいつそうである。この鶻は猛鳥のうちいちばんで、他の急難の折にそれを救うてやる心がかくもかがやいてをり、仇討ちの功ができあがるとどこへいつたかわからなくなつてしまうた。その進退出處はなんとかしこいことではないか。』　自分(作者)はちかごろ涵水のほとりをとほつたとき、このはなしを樵夫がかたりつたへてくれた。それをきくや自分は、ぞつとして風にそよぐしらがが冠をつきさすがごとくにおもはれた。人生に於て他人に對し意氣相許すといふ情分のおこるのはただちよつとした瞬間にあるものである。世上の人もこの鶻のはなしから義心を起すかもしれぬ。それで自分はいささかこの詩をつくつて天下の壯士の忠義の肝腸を激勵しようとおもふのである。

畫鶻行

高堂見生鶻颯爽動秋骨。
初驚無拘攣何得立突兀。
乃知畫師妙巧刮造化窟。
寫此神俊姿充君眼中物。
烏鵲滿樛枝軒然恐其出。
側腦看青霄寧爲衆禽沒。
長翮如刀劍人寰可超越。
乾坤空崢嶸粉墨且蕭瑟。
緬思雲沙際自有煙霧質。
吾今意何傷顧步獨紆鬱。

高堂生鶻を見る、颯爽として秋骨動く。
初は驚く拘攣無きに、何ぞ立つこと突兀たるを得るやと。
乃ち知る畫師の妙、巧に造化の窟を刮り、
此の神俊の姿を寫して、君が眼中の物に充つるを。
烏鵲樛枝に滿つ、軒然として其の出でむことを恐る。
腦を側けて青霄を看る、寧ぞ衆禽の沒を爲さむや。
長翮刀劍の如し、人寰超越す可し。
乾坤空しく崢嶸たり、粉墨且蕭瑟たり。
緬かに思ふ雲沙の際、自ら煙霧の質有るを。
吾今意何をか傷む、顧步して獨り紆鬱たり。

【字解】【一】高堂　たかいざしき。この畫を見たるばしよ。【二】生鶻　生はいきてゐること、畫とは見なさぬなり。【三】颯爽　威風あたりをはらふさま。【四】動秋骨　秋節に於ける鶻の骨のふしぶしが動いてゐる樣だ。【五】初驚　このふをみた最初、驚は作者がおどろくなり。【六】拘攣　拘束のごとし、攣は「つなぐ」なり、「ひも」にてくくりおくをいふ。【七】立突兀　突兀立に同じ、突兀はそびえたつさま。【八】乃知　よくみてそこで知る。【九】刮　けづりとる。【一〇】造化窟　造化は天然、窟はいはあな、お

くそこをいふ。【一一】 神俊姿　すぐれたすがた。【一二】 君　主人をさす。【一三】 物　もてあそびもの。【一四】 樛枝　下方へまがりたれたる枝。【一五】 軒然　あがる貌。【一六】 其出　其は畫鶻をさす、出とはそとへとびだすこと。【一七】 側脚　あたまをかたむける。【一八】 青霄　あをぞら。【一九】 寧爲　なんぞなさんや、反語。【二〇】 衆禽沒　もろもろのとりのごとく草樹の間に埋沒すること。【二一】 翻　たちばれ。【二二】 人寰　人間世界。【二三】 乾坤　天地。【二四】 空峥嶸　峥嶸はたかくひろきさま、天地の闊大なる、もしその間に飛び得れば峥嶸たるに意義あり、蓋に過ぎずして實に飛ぶ能はず、故に「空しく」といふ。【二五】 紛墨　畫の色彩をいふ、紛はごふん。【二六】 且蒼茫　蒼茫はさびしきさま、且はまあまあの意。【二七】 緬　はるかに。【二八】 雲沙際　雲沙は沙漠地方の雲や沙をいふ。【二九】 煙霧質　絵照が鶴賦に鶴の毛色の煙霧と同じきをのべて、煙交霧凝、若レ無二毛質一といへり、いま鶻に借用す、煙霧質とは煙霧のごとき毛質、眞の鶻の毛をさす。【三〇】 何傷　何をかいたむ。【三一】 顧步　左右をふりかへりみてあゆむ。【三二】 紆鬱　こころのむすぼれるさま。鶻のごとく幽飛する能はざるをかなしむなり。

【題義】 鶻の畫をみて感じたる所をのべた詩である。乾元元年、なほ朝廷にありて志を得ざりしときの作ならんか。

【詩意】 この高いざしきで生きた鶻がをるのを見る、その鶻は意氣颯爽として骨ぶしが動いてゐる。自分はこれを初めてみたとき、ひもでつないでもないのに飛び去りもせず、なんでたかくつつたつてゐるのであるかと驚いたが、よくみるとやつと次のことがわかつた、畫かきがうまくて、巧に天然の奥底をけづりとり、このすぐれた姿をうつしだして君(主人)がながめる品物としたものである、と。」庭前の垂れさがつた木の枝には鳥だの鵲だのがたくさんゐるが、彼等はこの鶻がたかくあがつて外部へとびだしはせぬかときづかうてをる。この鶻は首をかしげて青ぞらをながめてゐる、どうして多くの凡鳥のやうに草樹の間に埋沒してゐるやうなことをしやうぞ。その長いたちばねは刀劍の如くするどい、人間世界ぐらゐはたかくとびこえることができる。ただいかにせん、これは畫鶻で眞鶻ではないから、天地の闊大もこの鶻にとつてはいたづらに峥嶸たるものであり、粉墨の色ばかりさびしく横はつてゐるのである。」それにつけても自分ははるかに思ふに、沙漠の雲沙の地に於ては、煙霧の毛質をそなへた眞の鶻がひとりでに居るはずである。さやうな鶻がのぞましいのである。自分は今、心のなかで何事をいたんでゐるのか。(眞鶻のごとくなり得ざるをいたむのである。)左右をふりかへりつつあゆみ、自分ひとりでふさいでゐるのはどうしたことか。

端午日賜衣

端午の日衣を賜ふ

宮衣亦有名。端午被恩榮。
細葛含風軟。香羅疊雪輕。
自天題處濕。當暑著來清。
意内稱長短。終身荷聖情。

宮衣亦名有り、端午恩榮を被る。
細葛風を含んで軟かに、香羅雪を疊んで輕し。
天よりして題處濕ひ、暑に當つて著來清し。
意内長短に稱ふ、終身聖情を荷ふ。

【字解】 【一】 宮衣　宮女のつくりし衣、即ち下の葛、羅を以て製せしもの。【二】 亦有名　我亦有レ名の義、賜衣者の列内に自己

の姓名も亦これあるをいふ。【四】端午　夏暦にては正月を寅とし、五月は午にあたる、五月午なるため五の日をまた午とす、端は初の義、端午とは五月の初旬の午の日の義なりと。【五】恩榮　天子のごおんによる榮譽。【六】細葛　ほそきくずのいとにてつくりし衣をいふ。【七】含風　氣孔多くして風をいれやすし。【八】軟　やはらか、しなやかなこと。【九】香羅　かんばしきうすぎぬの衣、香とは香をたきこめしならん。【一〇】疊雪　雪とは純白色をたとへていふ、白衣たたみてある為雪をたたむといへるなり。【一一】輕ふわりとしてゐる。【一二】自天　題署自天子」を略し、題の字を下にいだせり、天子お手づから名を題したまへるをいふ。【一三】題處　かきたまうたところ、此句は首句の「有名」を承く。【一四】濕　墨の痕がうるほふ、かきたてなるをいふ。【一五】當暑　あつさのなりに。【一六】著來　つけ來れば の義。【一七】清　さつぱりしてすがすがし。【一八】意內　自己のこころのなかではかつてみる。（一說に天子の意內とす、然れども恐くは天子一一臣下の身の寸法をはかりたまはじ。）【一九】長短　きもののせたけ、そでたけ等の長し短しなり。【二〇】有　になふ、いただいてゐる。【二一】聖情　聖君のおなさけごころ。

【題義】　乾元元年の五月五日に宮中より衣をたまはりしことをのぶ。作者時になほ左拾遺たり。

【詩意】　こんど賜はつた宮中でつくられた衣については、自分ほどのものの姓名まで御下賜者のなかにあつて、端午のおいはひ日にありがたき榮譽を被つた。そのきものは、細い葛の絲を用ひたのは風をふくんでしなやかであり、香をくゆらしたうすぎぬのものは雪色をたたんでふわりとしてゐる。御筆で題されたところは墨のあともまだ乾かず、暑さにあたつて之を身につければいとすがすがしい。はらのなかでつもつてみるにこのきものはまことに自分のからだの寸法によくあうてをる。これをくださつた我が君のおなさけのかたじけなさは自分が一生涯になふ所である。

酬孟雲卿

樂極傷頭白。更長愛燭紅。
相逢難袞袞。告別莫匆匆。
但恐天河落。寧辭酒盞空。
明朝牽世務。揮淚各西東。

孟雲卿に酬ゆ

樂極まりて頭の白きを傷み、更長うして燭の紅なるを愛す。
相逢ふこと袞袞たり難し、別を告ぐる匆匆たること莫れ。
但だ恐る天河の落ちむことを、寧ぞ辭せむ酒盞の空しきを。
明朝世務に牽かれ、淚を揮ひて各〻西東ならむ。

【字解】【一】樂極　樂とは親友共飲のたのしみをいふ。【二】頭白　自己の老いたるをいふ。【三】更長　更は更漏、みづどけいの刻限、長しとは刻の多くたつをいふ。【四】愛　愛惜すること。【五】袞袞　つづく貌。【六】匆匆　せはしきさま。【七】天河　あまのがは。【八】落　落ちてきゆる、あけがたのさま。【九】酒盞空　さかづきのからになること。【一〇】牽世務　人間世界の事務にひかれる。【一一】揮淚　手にて淚をふるひはらふ。【一二】西東　一は西し、一は東して相わかれる。

【題義】　乾元元年六月、華州の司功とせられ長安より去らんとせしとき、友人孟雲卿に返答としておくりし詩。

【詩意】　樂しみのはては身の老いてかしらの白くなつたことをいたみ、夜のふくるままにともし火の光のくれなゐなるををしむ。友だちどうし相逢ふことはひきつづきにくいものであるから、別れを告げることはせはしさうにしてはならぬ。ともにかたりあふ夜はあまのがはが落ちてあけがたになることのみをきづかふのであつて、酒をのみつくしてさかづきがからになることをどうしていなまうぞ。

あしたともならば俗事にひかれて、涙をおしぬぐうてめいめい東西にわかれねばならぬ身の上ではないか。

至德二載、甫自京金光門出、間道歸鳳翔、乾元初、從左拾遺移華州掾、與親故別、因出此門有悲往事。

至德二載、甫、京の金光門より出で、間道より鳳翔に歸す。乾元の初、左拾遺より華州の掾に移され、親故と別る。因て此門を出で、往事を悲しむ有り

此道昔歸順、西郊胡正繁。
至今猶破膽、應有未招魂。
近侍歸京邑、移官豈至尊。
無才日衰老、駐馬望千門。

【字解】【一】京　長安。【二】金光門　長安の外郭の城の西側に三門あり、北なるを開遠門、中なるを金光門、南なるを延平門といふ。金光門を西に出づれば昆明池の方へゆく。【三】間道　ぬけみち。【四】歸　おもむく。【五】移　轉任させられる。【六】華州掾　掾は官屬、華州の司功參軍をいふ、華州は長安の東百八十里にあり。【七】親故　親戚故舊。【八】往事　すぎしむかしのこと。【九】此道　金光門よりでるみち。【一〇】昔　至德二載。【一一】歸順　順に歸すとは官軍につきしことをいふ。【一二】西郊　長安城西ののはら。【一三】胡　賊兵をさす。【一四】繁　諸本煩に作る。【一五】至今　今とは乾元元年六月。【一六】破膽　きもをやぶるとは驚くことの甚しきをいふ。【一七】未招魂　魂は作者自己のたましひ、生き靈をいふ、招かざるの魂とは魂飛びちりて人之をいまだ呼びかへさざるをいふ。楚の宋玉、その師屈原が魂をよびかへすことをのべ「招魂」を作る。【一八】近侍歸京邑　近侍してとは左拾遺の官を以て天子のそばちかくはべるをいふ、京邑とは長安の都をさす、歸とは鳳翔よりもどり來るをいふ。この句は蘇寗を示せるものとみるべし。（此句、仇氏は「杜臆」を引き、「近侍ヨリ京邑ニ歸カシム」とよませ、近侍の地位（左拾遺）より京師の近縣（華州）に赴かしめし義ととき、「侍從して京に還る」ととく說は是に非ずといへり。然れども仇氏の說の如くんばその意は「移官」の二字に盡く、何か苦しんでそれと同意義なる「近侍歸京邑」の五字を更に其前にのぶる要あらんや。故に余は「侍從還京」の說をとる。）【一九】移官　長安から華州へ轉任させる。【二〇】豈至尊　豈出於至尊之意、の義、天子の御本意からでたものではない。事實は作者は房琯を救はんとせしが琯は乾元元年五月に官をおとされ、六月にいたりて自身もいださるるに至りしものにて、琯及作者を肅宗にそしりしものは賀蘭進明なる者なりし。【二一】千門　宮殿の諸門をいふ。

【題義】至德二載に自分は長安の金光門からでて、ぬけみちをとほつて蕭宗皇帝のおはした鳳翔の方へとおもむいた。乾元の初年に自分は左拾遺の官から華州のした役へと轉任させられ、親戚故舊らと別れ、それにつれてまたこの同じ金光門を出たので、まへのことをおもひだしてかなしみ、この詩をつくつた。蓋し乾元元年六月の作。

【詩意】この道は自分がむかし賊軍のなかから脫出して鳳翔の方へ歸順しにいつたときとほつた道だ。あのとき城西野外では賊軍らがいつぱいゐた。あのときのきものやぶれた樣なおどろきは今でもまだつづき、魂が飛び去つたままだよびかへされずにゐるものがあるであらう。自分は鳳翔で左拾

遺の官をたまはり、おそばぢかくおともをしてこの長安へもどつてきたはどだ。せつかく都へきて都からゐなかへ官をうつされるといふことはどうして我が君ごじしんのみこころからでたことであらうや。(そんなことをさせたものが別にゐるのだ。)自分は元來才のないものであるがそれが日日衰へ老いゆくのである、これが別れとおもふとにはかにはたちさりかね、馬の足をとどめてぢつと諸門をながめるのである。

寄高三十五詹事

安穩高詹事。兵戈久索居。
時來知宦達。歲晚莫情疎。
天上多鴻雁。池中足鯉魚。
相看過半百。不寄一行書。

高三十五詹事に寄す

安穩なりや高詹事、兵戈に久しく索居す。
時來らば宦の達せむことを知る、歲晚情疎なること莫れ。
天上に鴻雁多く、池中に鯉魚足れり。
相看て半百を過ぐるに、一行の書を寄せず。

【字解】【一】安穩　おだやかに無事。【二】兵戈　いくさ。【三】索居　散居なり、朋友ちりぢりになつてゐる。「禮記」檀弓にみゆ。【四】時來　よき時節がきたならば。【五】知　作者が識め知る。【六】宦達　仕宦のみちよくとほる、將來についていふ。【七】歲晚　一年及人生の晩事をかねていふ、秋より以後は歲晚といふ。【八】情疎　こころがうとくなる。【九】鴻雁、鯉魚　表面は實物、裏面は「てがみ」のこと、漢の蘇武が雁の足につけたるてがみを天子射て得たりといふはなしあり。また古人はきぬに書信かかきそれを鯉魚の形狀に結びたりといへり。【一〇】相看　たがひにみるみるうちに。【一一】半百　五十歲、これは邁が年齡に就ていふならん、作者は今年四十七歲。【一二】一行書　いちぎやうばかりのみじかいてがみ。

【題義】太子少詹事の官たる高適に寄せたる詩である。高適は至德二載に揚州大都督府長史・淮南節度使となりしが、永王璘敗れて、宦者李輔國しばしば適を天子にあしざまにいふ、因つて太子少詹事を授けらる。詹事は東宮の三寺・十率府の政令を掌る、少詹事は詹事の副官にて正四品上なり。乾元元年の作ならん。

【詩意】高君よ、君は無事でくらしてゐるのか、いくさの騷ぎで久しくはなればなれになつてゐる。君は節度使から少詹事とされ官をおとされたが、自分はもし時節がくれば君がきつと榮達することを知つてをる、歲のくれかかるをりに疎遠にはしてくれたまふな。そらには鴻雁が多くとび、池の中には鯉魚がたくさんをる。(てがみをよこすつではいくらもありさうなものだ。)かれこれしてをるうちに君は五十歲以上になつたではないか、それに一行ぐらゐのてがみさへよこしてはくれぬ。(いつたいどうしたのであるか。)

贈高式顏

昔別是何處。相逢皆老夫。

高式顏に贈る

昔別れしは是何の處なりしぞ、相逢へば皆老夫。

故人還寂寞、削跡共艱虞。
自失論文友、空知賣酒壚。
平生飛動意、見爾不能無。

故人還た寂寞、迹を削られて共に艱虞。
論文の友を失ひしより、空しく知る賣酒の壚。
平生飛動の意、爾を見ては無きこと能はず。

【字解】【一】老夫　老人。【二】故人　式顔をさす。【三】寂寞　さびし、おちぶれてなるままをいふ。【四】削迹　あしあとをこからちけづりてなくせられる、放逐さるるをいふ、此句によるに式顔もまた作者の貶せられしとき貶せられしか。【五】艱虞　なんぎ、しんぱい。【六】論文友　高適をいふ、失友とは仇氏は適が揚州にあるをいふといへるも乾元元年には適揚州にあらざるなり、けだしただ同じく居らぬことをいふ。【七】賣酒壚　晉の王戎、嵇康・阮籍等の死後にむかし彼等と酣飲せし黄公の壚を過ぎて嗟歎せしこと「世說」にみゆ、壚は「へつつい」なり、そのうへに酒具をならぶる處なり、作者壯年時代に高適・李白等と宋・蒙の地に遊び論文酣飲、狩獵馳騁せしこと五古「遣懷」にみゆ、中に憶與高李輩、論交（魯詩年譜引、交作文）入酒壚。の語あり。【八】飛動意　活潑にうごきたしとおもふこころ。往年の英氣勃勃たりしこころもちをさす。【九】爾　式顔をさす。【一〇】無　上の「意」の字をうく、不能無意とつづく。

【題義】高適が姪なる高式顔におくつた詩。作詩の年代に諸說あるも、詩中の「削迹」の語によれば華州にいだされし時の作なるべし。であひし處は仇氏は華州と洛陽との間なるべしといへるもさだかならず。

【詩意】君とむかしどこでお別れをしたのであつたか、今おあひしてみるとおたがひに老人になつてゐる。我が舊知である君もちかごろは景氣がわるくさびしさうであり、貶官放逐のめにあうて、かかる自分とともになんぎしんぱいをしてをられる。君のおぢさんにあたる高適は自分とは文をかたりあふ親友であつたが、彼を失うてからは、自分にはただ嘗て彼といつしよに飲んだ酒屋のありさまだけがわかつてゐる。いま君をみるにあたつては、ひごろからもつてゐる勃然たる意興がおこらぬわけにはゆかぬ。

題鄭縣亭子

鄭縣亭子澗之濱。
戶牖憑高發興新。
雲斷岳蓮臨大路。
天晴宮柳暗長春。
巢邊野雀羣欺燕。
花底山蜂遠趁人。
更欲題詩滿青竹。
晚來幽獨恐傷神。

鄭縣の亭子に題す

鄭縣の亭子澗の濱、
戶牖、高きに憑れば發興新なり。
雲斷えて岳蓮大路に臨み、
天晴れて宮柳長春に暗し。
巢邊には野雀羣がりて燕を欺り、
花底には山蜂遠く人を趁ふ。
更に詩を題して青竹に滿てむと欲するも、
晚來幽獨にして恐らくは神を傷ましめむ。

【字解】【一】鄭縣　華州の城郭にくつつきて置かれたる縣の名。【二】亭子　ちん、小さな休みばしよ。【三】澗　たにの水、鄭縣にある西溪をいふ。【四】濱　ほとり。【五】戶牖　牖はかべのまど、この二字は副詞にみるべし。【六】憑高　たかいところによつてながめる、戶牖からながめるなり。【七】發興　興味をおこす。【八】岳蓮　蓮はかくべのまど、この二字は副詞にみるべし。【六】憑高　たかいところによつてながめる、戶牖からながめるなり。【七】發興　興味をおこす。【八】岳蓮

華山の姿をいふ、華山は華州の東南にあり、蓮は蓮花峰をいふ、山頂に池ありて千葉蓮花を生ずるによりて名くといへり。【九】火路　街道をさす。【一〇】宮柳　長春宮のやなぎ。宮の字を一に官に作る、官柳は官よりうゑたやなぎをいふ。【一一】嗜　葉のしげりてかすめるさまをいふ。【一二】長春　宮の名、陝西同州朝邑縣にあり、黄河をへだてて華州よりは東北にあたる、肉眼ではそのあたりまでは見えざるならんもさやうに感ぜらるるをいふなり。【一三】獃　俗用のときは欺侮の義、「あなどる」ことにて「あざむく」とは異なり。【一四】花底　百花の中央をつきぬけるをいふ、他の詩に「蕚ノ花」とあると同意。【一五】趁　おふ、あとからおひついてくること。【一六】滿青竹　青竹ほほえてゐる竹のみきをいふ。滿はいつぱいにかきつける。【一七】幽琢　しづかにただひとりをる。【一八】傷神　こころをいたましめ、かなしましめる。

【題義】華州の鄭縣にある亭にかきつけたる詩、實はそこにある竹に題せし詩なり。作者華州へ赴任せんとするときの作ならん。

【詩意】鄭縣の「ちん」がたにまの水のほとりにある、その「ちん」の戸やまどから高處によりてながめると新しく興がわきおこる。雲がとだえて華岳の蓮峰が大道にさしかかつてをり、そらははれわたつて河むかひの長春宮のあたりに柳が小暗くみえてゐる。ややちかくでは燕の巣のそばへ野らのすずめどもがやつてきてそれをあなどつてをり、花樹のあひだをとほつてゆく人を山ばちがおなじやうにどこどこまでもとくつついてゆく。(遠景近景ともにおもしろい。)そこで自分はもつと詩をかきつけて「ちん」のそばの青竹の幹にいつぱいになるほどにしやうかとおもふのではあるが、いかにせん、夕かたまけてさびしいひとりみのことであれば、ただこころがいたましめられることをきづかふのである。(だから詩もそんなにたくさんはできまい。)

望岳

西岳峻嶒竦處尊。
諸峰羅立似兒孫。
安得仙人九節杖。
拄到玉女洗頭盆。
車箱入谷無歸路。
箭栝通天有一門。
稍待秋風涼冷後。
高尋白帝問眞源。

岳を望む

西岳峻嶒として竦處すること尊し、
諸峰羅立して兒孫に似たり。
安んぞ仙人の九節の杖を得て、
拄へられて到らん玉女の洗頭盆。
車箱谷に入れば歸路無く、
箭栝天に通ずる一門有り。
稍く秋風の涼冷なる後を待ちて、
高く白帝を尋ねて眞源を問はむ。

【字解】【一】峻嶒　山の高き貌。【二】竦處　竦は聳と通ず、そびゆる、あがる。處は居ること、上聲によむ。【三】羅立　つらなりたつ。立を一に列に作る。【四】安得　希望をいふ。【五】仙人九節杖　九節杖は九つのふしのある竹のつゑ、仙人のつくもの。【六】拄　ささへる。【七】玉女洗頭盆　山頂の玉女祠前に石臼あり、なかの水澄碧にしてつねに增減なし、之を玉女の頭を洗ふ盆と號す。【八】車箱　谷の形狀をいふ、箱は車體なり、(或は谷名とする解あり、)車箱入谷とは車箱のごとき形の谷に入ること。【九】箭栝通天　栝は筈と通ず、箭筈は「やはず」、やのさきをいふ、華山に天井といふ處あり、そこより空なのぞめばわづかに明光をみるといふ、箭筈は蓋し窄狹路の形狀、通天とはそこより高處にかよふをいふ。【一〇】一門　上述のごとき一道をたとへていふ。【一一】白帝　西方の神にて華山を支配す。【一二】眞源　仙道のまことの本源。

【題義】華州に赴任するとき、途にて華山をのぞんで作れる詩なり。華山は支那五岳のうちの西岳にあたる、華州華陰縣の南にあり。

【詩意】西岳である華山はたかくけはしく、そのそびえて居すわつてゐるさまはたふとくみえる。それにくらべると他のもろもろの峰峰はつらなり立つてゐるが華山といふおほおやぢの兒どもか孫たちのやうである。自分はどうかして仙人がもつてゐるといふ九節の竹杖を得て、その杖にからだをささへられつつ頂上の玉女の洗頭盆のあたりまでゆきたいとおもうてゐる。この山はその車箱形をした谷へはひるともどりみちもなく、やはずのやうなせまくほそい天へのかよい路がただ一門あるばかりだ。だんだん秋風がすずしくつめたくなるのをまつて、自分は白帝の鎮座してゐるこの山をたづねて仙道の本源を問ひただしたいとおもふ。

早秋苦熱堆案相仍

早秋熱に苦しむ、堆案相仍る

七月六日苦炎蒸。
對食暫餐還不能。
常愁夜來皆是蝎。
況乃秋後轉多蠅。
束帶發狂欲大叫。
簿書何急來相仍。
南望青松架短壑。
安得赤脚踏層冰。

七月六日炎蒸に苦しむ、
食に對して暫く餐せむとするも還た能はず。
常に愁ふ夜來皆是れ蝎なるを、
況や乃ち秋後轉蠅多きをや。
束帶狂を發して大に叫ばむと欲す、
簿書何ぞ急に來ることと相仍るや。
南望すれば青松短壑に架す、
安んぞ赤脚層冰を踏むことを得む。

【字解】【一】夜來　よるからかけて、來は以來の義、一に夜中に作る。【二】皆是蝎　蝎は人をさす蟲の名、或は自足ノ蝎に作る。【三】束帶　衣冠をつけ帶をしめる、官の礼服をつけること。【四】發狂　こころが狂ひだす。【五】簿書　官文書をいふ。【六】來相仍　相仍來に同じ、ひきりなしにくること。【七】南望　南は、華山の山脈のつづきの山ある方位なり。【八】架　よこにわたす、枝がかぶさるさま。【九】短壑　せのひくき邱壑、壑は「たに」なれば短の字おちつきなし、一に絶に作るといへば字誤ならん

【題義】はつ秋のとき炎熱にこまつてゐるところへ、つくゑのうへに山とつまれる官文書がひきりなしにくる、そのことをのぶ。乾元元年の秋、華州にての作。作者は六月に華州にいだされしに、この詩に七月六日とあれば蓋し赴任後まもなくつくりしものならん。

【詩意】七月の六日、むしあつくて苦しくてしかたがない。食事にむかうてちよつとたべやうかとおもふがとてもたべられぬ。いつも夜分になると自分をおそうてくるやつは蝎ばかりなので心配してゐるが、ましてそのうへ秋になつてからはいよいよ蠅が多くなつた。窮屈な官服で身をかためてゐると氣ごころもくるひだして大聲でもださうかとおもふ。かかるときにどうして急に書類がひきりなしにやつてくるのだらうか。南をながめると、きつたてのたにのうへに青い松が横にはえてゐる、どう

したならばあの山の奥へはひりこんですあしであつい氷をふむことができやうか、できればさうしてみたい。

觀安西兵過赴關中待命　二首

安西の兵の過ぐるを觀る、關中に赴きて命を待つなり　二首

四鎮富精銳。摧鋒皆絶倫。　四鎮精銳富めり、鋒を摧くこと皆絶倫なり。
還聞獻士卒。足以靜風塵。　還た聞く士卒を獻ずと、以て風塵を靜かならしむるに足る。
老馬夜知道。蒼鷹饑著人。　老馬夜道を知る、蒼鷹饑ゑて人に著く。
臨危經久戰。用急始如神。　危に臨みて久戰を經たり、急なるに用ふれば始めて神の如くならむ。

【字解】【一】安西　安西都護府をいふ、元和元年に安西節度は鎮西とあらためられしに、ここに安西といへるは舊稱にしたがへるなり。【二】過　鄜州をすぐるなり、東より來て西に向ふなり。【三】關中　長安附近をいふ、東は函谷關、西は隴西關を以て界とし、その以内の地を關中といふ。【四】待命　天子のおほせをまつ、軍の行動についての指揮の命令をまつなり。【五】四鎮　龜茲・敦沙・疏勒・焉耆の四鎮、みな安西都護府の統ぶる所なり。四字一に西に作る、西なれば卽ち鎮西をさす。【六】精銳　くはしくするどき兵卒。【七】摧鋒　敵軍のほこさきをうちくだく。【八】獻　天子にたてまつる。【九】靜風塵　ほこりをしづめるとは賊をおびはらふをいふ。【一〇】老馬　「韓非子」に齊の桓公が孤竹國を伐ち、還るとき道を失ひたるに、管仲は老馬之智可レ用也といひ老馬を放ちてそのあとよりしたがひたりといふ。主將の職になれしことここの老馬の道を知るがごとくなるをいふ。【一一】蒼鷹　蒼容

蒼が故事、已に見ゆ。蒼は鷹のごとく饑うれば人に附き、飽けば高く飛びさる、士卒勇悍にして鷹の饑ゑて人につき用を爲すごとくなるをいふ。【一二】臨危　あやふきときに際して。【一三】用急　急の字は上句の危の字に接す「急なるに用ふ」とは國家危急の時に於て其力を用ふればの義。（鄧長蕃の說に「用フルコト急ナレバ」とよませ、用兵の法が急速なればの義とせり。）【一四】如神　兵の效を奏する人力以上のものあるをいふ、如を一に知に作る。

【題義】安西都護府に屬する兵が華州を過ぐるのを觀て作れる詩。その兵はこれから關中へゆきて將來の行動について天子の仰せを待つものである。乾元元年六月、李嗣業、懷州（今の河南懷慶府河内縣治）の刺史となり、鎮西北庭行營節度使に充てられ、八月、郭子儀等と同じく步騎二十萬に將として安慶緒を討つ。これは李嗣業の兵が懷州から長安へ赴く道すがら華州を經しものにて八月討伐にでかけざる以前のことなり。

【詩意】四鎮（或は西鎮）には精銳の兵がたくさんをつて、かれらが敵鋒をくだくことはたぐひをこえてをる。きけばその四鎮はこのたび天子に兵卒を獻じて御用をつとめるさうだが、彼等ならば十分世のちりほこりをしづかにすることができる。彼等將士は其の智は老馬が夜にも道を知つてをるごとく、其の意氣は鷹が饑ゑて人についてゐるやうなものだ。天下の危きにあたつて、彼等はながながのいくさの經驗をもつてをる、之を急の場合に用ふるときには始めて彼等の奏する效は不可思議なるものがあるでおらう。

〔二〕

奇兵不在衆。萬馬救中原。
談笑無河北。心肝奉至尊。
孤雲隨殺氣。飛鳥避轅門。
竟日留歡樂。城池未覺喧。

【字解】【一】奇兵　晉の安帝のとき、沈田子が曰く、兵貴び用ひ奇、不二必在レ衆と、首句其意をとる。【二】萬馬　多くの兵馬。【三】中原　黄河南北の地方。【四】談笑　將士が談笑するなり。【五】無河北　無は無視すること、河北は河北道をさす、河北道は孟・侯・魏・博・相・衛・貝・澶等の二十九州を領す、時に賊將安慶緒は相・衛に據れり。【六】心肝　こころ。【七】奉　ささげたてまつる。【八】至尊　天子(肅宗)。【九】隨殺氣　殺氣が雲にしたがひ下よりたかくのぼる。【一〇】避轅門　轅は兵車のかぢ棒、車をつみ、その棒をむかひあはせに門形をつくる、轅門は軍門、避くとはその威風をさけてあたりをとほらぬなり。【一一】竟日　終日。【一二】留　鄭州に逗留する。【一三】城池　華州のしろ、ほり。

【詩意】兵法は奇策を用ふるのが貴いのであつて、人數のたくさんあるといふことにあるものではない。この安西の兵は萬馬を以て中原の地方を救はうとしてゐるのだ。わらひばなしのうちにもはや河北の賊境など眼中に無しとするかの如く、その心はひとすぢに我が君へとささげてゐるのだ。天に一片の雲がうかべば殺氣はその雲までたかくのぼり、飛ぶ鳥も威風をはばかつて軍門のあたりをよけてとほる。かかる軍隊で紀律も正しいから終日ここにのこつて歡樂しつつあるけれども、ここの城ではちつともやかましさをおぼえぬのである。

【餘論】「草堂詩箋」は此詩を乾元二年秋七月作者が官を棄てて秦州に居りし以後の作とせり。之によれば兵は西よりして東にむかひしことになり、兵の過ぎた場所は秦州となる。

九日藍田崔氏莊　九日、藍田の崔氏が莊

老去悲秋强自寬。老い去つて悲秋に强ひて自ら寬うす、
興來今日盡君歡。興來つて今日君が歡を盡くす。
羞將短髮還吹帽。羞らくは短髮を將て還帽を吹かるる「を、」
笑倩傍人爲正冠。笑ふ傍人を倩うて爲めに冠を正すこと「を。」
藍水遠從千澗落。藍水遠く千澗より落ち、
玉山高並兩峰寒。玉山高く並びて兩峰寒し。
明年此會知誰健。明年此の會知ら(ず)誰か健なる、
醉把茱萸仔細看。醉うて茱萸を把りて仔細に看る。

【字解】【一】悲秋　ものがなしき秋の節、悲レ秋とよむも可ならん。【二】自寬　自己の悲懷をくつろげ、なぐさむる。【三】盡君歡　他人が我をよろこばさうとしてもその八分を受け二分をのこすが君子の禮とせらる、ここは先方の歡待を十分にうけつくすをいふ。君は主人崔氏。【四】短髮　作者の老いてみじかくなりしかみのけ。【五】還　また、【六】吹帽　晉の孟嘉、桓温が參軍となり、九日に龍山に遊びしとき、たまたま風きたりて

孟嘉が帽を吹き落す、嘉おちつきてひろひてまたかぶりしといふ、杜詩には風をいはずしてただちに「吹」といふこと往往あり。【七】備　やとふ。【八】餘人　そばのひと。【九】爲　我がために。【一〇】正冠　冠は卽ち上句の帽なり、正とはまがらぬ樣になほすこと。【一一】藍水　藍田にある川の名。【一二】千澗　多くのたにま。【一三】玉山　藍田にある山の名、卽ち藍田山。【一四】兩峰　余は玉山に屬する二つの峯かとおもふ、(舊解は兩峰を玉山と別物とす、而してその兩峰をば或は華山及び秦山なりとし、或は華山の東北なる雲臺山の兩峰なりとなす、別物とするときは玉山高竝ば「玉山と高く竝びて」とよむべし)。【一五】知誰健　知の下に疑問詞があるときは「知」は「不知」の義となる、卽ち不ㇾ知誰健の意、古來「知る」とよますと雖も其義をなさず。【一六】把　とる。【一七】茱萸　ぐみ、九日に「ぐみ」を佩び菊酒をのめば長壽なりとせらる。(沈約禮は茱萸を酒の名とす。)【一八】仔細　くはしく。【一九】看　蓋し茱萸の枝をみつめるなり。古來多くこの義にとけり。(沈約禮は茱萸をみることの無意味なるをいひ藍水と玉山とを看ることとす、卽ち「酒を把つて山水をみる」ととく、但、茱萸をみるとする決して無意味には非ず、上句に「誰健」とありて主賓の健康を意としての語なれば長壽のしるしたる茱萸を仔細にみるは知つて意深し。)

【題義】陰曆九月九日重陽の菊の節句の日に藍田縣の崔氏が別莊に於て作れる詩。藍田は長安の南にある縣の名、華州より八十里ばかりへだたる、乾元元年華州司功たりしときの作。

【詩意】自分はだんだん年老いて悲しき秋にあたつて無理にむねのうちをくつろげんとし、今日は興のわくままに十分に君がささげてくれる歡情をうけつくした。はづかしいことには老いの短いかみのけながらにまた昔の孟嘉あつかひにして風が帽子を吹きおとすし、わきの人にたのんでその帽子のかぶりぐあひをきちんとなほしてもらふなどは自分ながらをかしい。莊外をながめると、多くのたにまの水をあつめて遠くそこから藍水が落ちてくるし、玉山はその二つのみねが高くならんで寒色をたたへてゐる。今日は主賓ともにかくおもしろくすごすが、さて明年のこの會には、はたしてだれがかはりなくたつしやでゐるであらうか、それをおもうて自分は醉ひながらぐみの枝を手にしてくはしくながめいるのである。

崔氏東山草堂

崔氏が東山の草堂

愛汝玉山草堂靜。
高秋爽氣相鮮新。
有時自發鐘磬響。
落日更見漁樵人。
盤剝白鴉谷口栗。
飯煮青泥坊底芹。
何爲西莊王給事。
柴門空閉鎖松筠。

愛す汝が玉山草堂の靜かなるを、
高秋の爽氣相鮮新。
時有つてか自ら發す鐘磬の響、
落日更に見る漁樵の人。
盤には剝ぐ白鴉谷口の栗、
飯には煮る青泥坊底の芹。
何爲ぞ西莊の王給事、
柴門空しく閉ぢて松筠に鎖す。

【字解】【一】玉山　已にみゆ。【二】高秋　天たかき秋。【三】爽氣　さわやかな氣。【四】相鮮新　鮮新は新鮮なり、あたらしくあざやか、相とは蓋し山色に關していふ、山色の翠と秋氣の澄碧とがたがひにその新鮮みきそふをいふ。【五】發　おこる。【六】鐘磬響　かれ、磬石のおと、これは附近に寺あるなるべし。【七】漁樵人　魚をとる人、たきぎしばをとる人。【八】盤　大きなさら。【九】剝　はぐ、皮をむくこと。【一〇】白鴉谷　縣の東南二十里にある谷の名、栗によろしき地なりと。【一一】青泥坊　坊は防と通ず、「つつみ」をいふ、青泥城は縣南七里にありといへば防はその城の水をたくはふるつつみなり。【一二】

芹　沈德潛の説に芹は十二文の韻字なれば尊の字の誤なるべしといへり、芹は「せり」、尊は「じゆんさい」。【二】西莊　崔氏草堂の西にある別莊。【一】王給事　王維がこと。王維は宋之問が藍田の別墅を得て住せり。卽ち輞川莊なり。嘉宗長安に還るや維は太子中允となり、また給事中となれり、このとき維は長安にありて莊に在らざるなり。【三】柴門　王維が莊の柴でつくりし門。【六】鎖松筠　筠は竹の膚の青色をいふも竹そのものの義として用ふ、松筠に鎖すとは松竹の林の中にとざすをいふ。尾二句につきては作者が王維に早く仕をやめてかへるべきことを諷せしなりとの說あれども余は之を取らず、ただたまたま維の不在を見て之を思ふ情なのべしものとみる。

【題義】前詩の崔氏と同じく藍田の崔氏なり、東山は藍田縣の東南にある藍田山、卽ち玉山なり、草堂はかやぶきの堂なり。此の堂は前詩の別莊とは異なるものなり。此の詩は崔氏が東山の草堂にて作る。前詩と同時期の作。

【詩意】自分は深く愛す、君のこの玉山の草堂は閒靜であつて、秋の爽かな氣と山の色とがたがひに新鮮をきそうてをる樣であることを。また時としては近い寺でもならすのか鐘や磬のおとがひとりでにおこつてくるし、日の落ちかかるときそのうへ漁夫樵人らがかへりゆくのをみることができる。また食物についてみると、大きな皿には白鵝谷のほとりでとれた栗が皮をむいて盛りだされ、ご飯にませては青泥坊でとれたせり（或はじゆんさい）が煮られる。ここへ西どなりの王維でも居るといつそういいのだが、どうしたためか彼の別莊はいたづらに柴門が閉ぢられて松竹林中にかぎをおろしてある。

遣興　三首

我今日夜憂諸弟各異方。
不知死與生。何況道路長。
避寇一分散。飢寒永相望。
豈無柴門歸。欲出畏虎狼。
仰看雲中雁。禽鳥亦有行。

興を遣る　三首

我今日夜憂ふ、諸弟各〻方を異にす。
死と生とを知らず、何ぞ況や道路の長きをや。
寇を避けて一たび分散し、飢寒永く相望む。
豈柴門の歸るべき無からむや、出でむと欲して虎狼を畏る。
仰いで雲中の雁を看る、禽鳥にも亦行有り。

【字解】【一】諸弟　年したのいとこ等までをふくむ。【二】異方　方位をべつべつにする。【三】避寇　寇とは賊軍をさす。【四】柴門歸　柴門之可歸者をいふ、洛陽の家をさす。【五】虎狼　盜賊をいふ。【六】行　行列、雁の行列は兄弟長幼の順位をあらはす。

【題義】さびしき感興をはらひのけるために作つた詩である。洛陽の兄弟、故宅、舊交等をおもふことをのべたり。乾元元年官をやめて後の作。

【詩意】自分はいまひるとなく夜となくしんぱいしてゐる、なぜかといへば、弟どもがそれぞれ別の方向の地にをる。その死も生もわからぬうへに、彼等とのあひだをへだててゐる道路は長い。賊軍をさけたときひとたびちりぢりになつてから、飢寒の間にながく彼等の居る方をながめてゐるばかりで

ある。自分はかへるべき柴門の家がないわけではないが、でかけやうとしては虎狼の様な盗賊をおそれて、でることができぬ。そらをあふいで雲まの雁をみると、とりでさへ一定の行列がある。（しかるに我我は別離してをるために列をなすことができぬ。）（この詩は兄弟をおもふことをのぶ。）

〔一一〕

蓬生非無根。漂蕩隨高風。
天寒落萬里。不復歸本叢。
客子念故宅。三年門巷空。
悵望但烽火。戎車滿關東。
生涯能幾何。常在羈旅中。

【字解】【一】蓬　よもぎぐさ。【二】漂蕩　ただよひうごく。【三】高風　そらたかく吹く風。【四】天寒　冬のそらをいふ。【五】落　蓬がおつる。【六】萬里　遠地をいふ。【七】本叢　もと生じたくさむら、故郷をたとへていふ。【八】客子　たびびと、作者自己をさす。【九】故宅　洛陽のもとのやしき。【一〇】三年　前詩の避寇を虫ば元載とすれば三年にて乾元元年が三年となる。【一一】門巷空　故宅の門巷にだれもゐぬ。【一二】戎車　兵車。【一三】關東　函谷關の東、洛陽、河北方面をいふ。【一四】羈旅　たび、羈は寄なり。

【詩意】よもぎの草が草むらに生えるには根が無いわけではないが空たかく吹く風のまにまにただよはされ、冬のさむそらに萬里の遠方の地へ吹き落され、ふたたびもとの草むらにもどることがない。（自分の身のうへはちやうどそんなものだ。）たびびととしての自分は故郷の宅のことをおもふが、いまで三年の間、家のあたりの小路にだれもをらぬのだ。うらみつつふるさとの方をながめるとただ危急を報ずるのろしびばかり見え、いくさぐるまが關東に充滿してゐる。自分の生涯はどれほどの年月あるといふのか、あまりおほくもないのに、いつもたびのうちにくらしてゐるのである。（此詩は故宅をおもふことをのぶ。）

〔一二〕

昔在洛陽時。親友相追攀。
送客東郊道。遨遊宿南山。
煙塵阻長河。樹羽成皐間。
回首載酒地。豈無一日還。
丈夫貴壯健。慘戚非朱顏。

【字解】【一】追攀　おひすがる、互にはなさぬやうにする。【二】東郊　洛陽の東の郊外。【三】遨遊　遨は「たのしむ」。【四】南山　洛陽の南の山、卽ち龍門の伊闕山。【五】煙塵　兵馬のちり。【六】阻　へだつ、あひだをじやますること。【七】長河　黄

何をさす、卽ち洛陽近くあるもの。【八】樹羽　樹は立てること、羽は羽をつけた旗、軍に用ふるもの。【九】成皐　關の名、河南の汜水縣の東南二里にあり。【一〇】載酒地　載酒は揚雄が故事、載酒の地とは友だちどうし酒をのせてゆききせしところ。【一一】一日還　可レ還之一日をいふ。【一二】慘淡　かなしくいたむすがたをいふ。【一三】朱顏　少壯時の血色あかきかほばせ。

【詩意】自分がむかし洛陽にゐたときは親しい友だちと互にすがりついてはなれなかつた。あるときは遠方へゆく客を東郊の道で送つたり、或時はあそびたのしんで南方の山にとまつたりもした。ところが今は兵馬の塵がじやまをして黃河をへだて、羽をつけた軍旗が成皐關のあたりにいつぱいになつてをる。むかし友だちと酒をのせてゆききしたところをふりかへつてみると、そこへ還ることのできる日がないでもない、あるひはあるだらう。ただうらむのは、丈夫たるものは壯健なのを貴ぶのに、自分はかなしさうなさまをしてゐて、そのかほはもはやむかしのあからがほではないといふことだ。

獨立

空外一鷙鳥。河間雙白鷗。
飄颻搏擊便。容易往來遊。
草露亦多濕。蛛絲仍未收。
天機近人事。獨立萬端憂。

獨立

空外の一鷙鳥、河間の雙白鷗。
飄颻搏擊便なり、容易ならむや往來して遊ぶこと。
草露亦濕ひ多し、蛛絲仍未だ收めず。
天機人事に近し、獨立して萬端憂ふ。

【字解】【一】空外　空は天をいふ。【二】鷙鳥　つよいとり、「たか」の類。【三】鷗　かもめ。【四】飄颻　風のただよふさま。【五】搏擊便　搏も「うつ」なり、狐兒食鳥のごとき獲物をうちとる、便は便利。【六】容易　仇氏は「容易ならんや」と反語によみたり。【七】蛛絲　くものいと。【八】收　かたづけること、「くも」が絲であみをはるは餌をとるためなり。【九】萬端　端は緒なり、萬緒とはさまざまにといふこと。【一〇】近人事　近とは近似するをいふ、人事とは人事についての道理をいふ。

【題義】獨り立ちて偶然見とめた景物について感をのぶ。或は李白・鄭虔のごときものが禍の網にふれんとしてをることを諷したものであらうかといへり。ただ他人のことについてか、自己のことについてかは明かならず。乾元元年華州にての作ならんといふ。

【詩意】天外にとぶ一つのたけき鳥。河の波まにういてゐる一對の白いかもめ。たけき鳥は風の吹くに乘じて獲物をうちとるに便利がよいが、そんな鳥がねらつてゐるのでは、かもめはどうしてたやすく往つたり來たりしてあそぶことができやうぞ。また夕方ほどすぎて草のうへの露もしめりが多くなつてきたころだのに、くも蟲はやつぱり網の絲をはつてかたづけやうともせず、なにかをそれでひつかけんとしてゐる。この鳥と蟲とが他物を害せんとしてゐるさま。このなかにふくまれてゐる天然の微妙なはたらきは、人事上の道理とも似たことである。之をおもうて、自分はひとり立ちながらさまざまにしんぱいしつつあるのだ。

至日遣興奉寄北省舊閣老兩院故人　二首

至日興を遣り、北省の舊閣老・兩院の故人に寄せ奉る　二首

去歳茲晨捧御牀。
五更三點入鵷行。
欲知趨走傷心地。
正想氤氲滿眼香。
無路從容陪語笑。
有時顚倒著衣裳。
何人却憶窮愁日。
日日愁隨一線長。

去歳茲の晨御牀を捧ず、
五更三點鵷行に入る。
知らむことを欲す傷心の地に趨走し、
正に氤氲たる滿眼の香を想ふことを。
從容として語笑に陪するに路無し、
時有つてか顚倒して衣裳を著く。
何人か却て憶はむ窮愁の日、
日日愁は一線に隨つて長きことを。

【字解】【一】至日　冬至の日。【二】遣興　前に見ゆる如く、憂興を排遣するなり。【三】北省　唐のとき門下省・中書省をさして北省といふ。【四】閣老　兩省の官、たがひに敬稱するとき之を閣老といふ。【五】兩院　兩省の院をさす。院は「つめしよ」をいふ、拾遺・補闕の官のつめしよをさす。【六】故人　舊知の人人、卽ち作者の同僚。【七】去歳　至德二載。【八】茲晨　去年の冬至のあした。【九】捧　ささぐ、ここは心にて尊敬するをいふ。【一〇】御牀　天子の御椅子。【一一】五更　漏刻にて夜を五分し一更より五更までとす、五更はよあけのとき。【一二】三點　銅板の鼎を三つうつ、刻をしらせるなり。【一三】鵷行　鵷は「おほとり」、行は行列、官員の列をたとへいふ。【一四】欲知　諸君が知ることをのぞむ。【一五】趨走　作者が華州の上官の前へでて奔走すること。【一六】傷心地　華州に居るは作者の好まぬ所なり、因つて之を心を傷ましむる地といふ。【一七】正想　ちやうどそのとき想像する、作者が想像するなり。【一八】氤氳　香煙のもやもやたつさま。【一九】滿眼香　眼中いつぱいの香煙、これは長安の宮中にてのさま。【二〇】無路　路とは方途、方法といはんがごとし。【二一】從容　ゆつたり。【二二】陪　あとにしたがふ。【二三】語笑　在京の閣老故人の語笑。【二四】有時　此二字未だ正解を得ず、蓋しこれは冬至についていふものなれども冬至以外のときをもこめていふによりかくいへるか。有時とは時としての義。【二五】顚倒著衣裳　「詩經」に東方未明、顚倒衣裳とみゆ、あけがた公より召さるるによりいそぎて衣裳をつくるため裳を衣に、衣を裳とたがへてきるをいふ、此句は作者曉を發して華州の役所へ出かけることをいふ。【二六】却憶　先方より こちらをおもひだす。【二七】窮愁日　日とは時に同じ、窮愁は困窮し且愁ふること、戰國趙の虞卿が故事、ここは作者のさま。【二八】隨一線長　一線に二義あり、一は魏晉間の習俗にて宮中にて紅き線を以て日影を量るに冬至以後は日影が一線の長さだけながくなるといふ、一線の長さ（尺寸）については記載を見ず。二は唐の宮中にては女工が以て日の長短をはかるに、冬至からはいつもにくらべて一線分だけ多くしごとができるといふ。同じ一線なれども前者は空間的、後者は時間的のはかりかたなり、後說よろしからんといふ。

【題義】冬至の日にむねのおもひをやるため門下・中書兩省の舊官や兩省の院にゐる知りあひの人人に寄せた詩。蓋し乾元元年十一月華州にての作。

【詩意】自分は去年の冬至のあさげには御所へまかりでて御牀をあふぎたてまつり、五更三點のあさはやく諸官員の行列のなかへはひりこんだ。ことしは華州にをるのである、自分はかかるゐなかのかなしいところで上官の前で奔走しつつちやうどいまは長安の宮殿で諸員の眼中香煙がもやもや立ちのぼつてゐるのだなと想像してゐる、このことを諸君から知つてもらひたくおもふ。自分は上官からよばれるので時として（けふもさうだが）大急ぎにあわてて衣と裳とをあべこべに著けてでかけた

りするが、もはやゆったりとして諸君にしたがつてともに笑語するといふみちはない。自分はいま窮愁の境遇に在つて、その愁たるや冬至以後の太陽の時間が婦女の一線ぶんの仕事の長さだけながくなつてゆくとおなじ樣に長くなつてゆくといふことをだれがおもうてくれるであらうか。

〔一〕

憶昨逍遙供奉班。
去年今日侍龍顏。
麒麟不動爐煙上。
孔雀徐開扇影還。
玉几由來天北極。
朱衣只在殿中間。
孤城此日腸堪斷。
愁對寒雲雪滿山。

〔一〕

憶ふ昨逍遙たり供奉の班、
去年今日龍顏に侍す。
麒麟動かず爐煙上り、
孔雀徐に開きて扇影還る。
玉几は由來天の北極、
朱衣は只在り殿の中間。
孤城此の日腸斷ゆるに堪へたり、
愁へて寒雲に對すれば雪山に滿つ。

【字解】〔一〕昨　前時をさす、ぼんやりいふ。〔二〕逍遙　ゆったりぶらつく。〔三〕供奉班　近侍の列位。拾遺の官は供奉・諫諍をつかさどる。〔四〕去年今日　至德二載の冬至日。〔五〕龍顏　天子のおかほ。〔六〕麒麟　きりん形、たけ九尺、金めつきの香爐。〔七〕不動　すわりのよきさま。〔八〕爐煙　香爐のけむり。〔九〕上　のぼる。〔一〇〕孔雀　孔雀の羽をしつてつくれる團扇をいふ、唐の大朝會のをりにはこのうちは百五十六本を左右に分ち、天子初めて御座に升りたまへば左右より扇を合はせ、升りおはりたまへばまた扇を左右に開く。〔一一〕徐開　左右から合はせた扇をしづかにはなす。〔一二〕扇影還　還は「めぐる」、左右にうごくさまをいふ。〔一三〕玉几　天子のおよりになる玉の脇息。〔一四〕天北極　天子の位は天上星宿界にては北極星の座に比す、因つてかくいふ。〔一五〕朱衣　御史大夫の從官のきるきものなり、このものは朝會のをり、かけごゑして百官を班位に就かしめる。（之を作者の眼とみる說あるも今取らず。）〔一六〕只在　只今徒在の意、此二字は上句の「由來」とともに想像を加へてのべし語なり。〔一七〕殿中間　ごてんのなかほど。〔一八〕孤城　孤立した城、華州のしろをさす。〔一九〕寒雲　冬ぞらの雲。〔二〇〕山　長安の方位にあたりてみゆる諸山。

【詩意】おもひだしてみる、前年自分はゆったりと供奉の列にあつて、去年のけふは龍顏にはんべつてゐた。そのときは宮中で麒麟の香爐がぢつとすわつてそれから香の煙がたちのぼり、しづしづと孔雀の團扇が左右にひらかれてそれぞれの位置へとつき天顏があらはれた。ところがことしはそこへだたつて、御座の脇息はもとより天の北極の位にあつてかはらぬが、百官に著席をうながす朱衣の屬官のすがたはただ長安のごてんのまんなかに在るのでここではみられぬ。かかるしだいでこの華州の孤城ではけふは自分の腸が十分ちぎれさうであり、愁へながらに冬ぞらの雲にうちむかへば遠山には雪がいつぱいかぶさつてみえる。

路逢襄陽楊少府入城。戲呈楊四員外綰〔原注〕甫赴華州日。許寄員外茯苓。

路にて襄陽の楊少府が城に入るに逢ひ、戲れに楊四員外綰に呈す〔原注〕甫、華州

に赴く日、員外に茯苓を寄することを許す

寄語楊員外。山寒少茯苓。
歸來稍暄暖。當爲斲青冥。
龍蛇窟。翻動。鳥獸形。
兼將老藤杖。扶汝醉初醒。

【字解】【一】路　華州より洛陽へゆく路。【二】襄陽楊少府　襄陽の人にて華州の尉官なるべし、名は詳ならず、少府は尉の敬稱なり。【三】入城　城は華州の城。【四】楊四員外綰　楊綰、字は公權、華陰の人、肅宗の位に即くや、蜀中より鳳翔の行在に赴き起居舍人・知制誥に除せられ、司勳員外郎・職方郎中を歷たり。司勳員外郎ゆゑ員外といふ。綰、時に華州にありしなるべし。【五】寄語　このことばをおまへにいうてやる。【六】楊員外　綰。【七】山寒　山は華州の山、けだし華山をいふ。この「山寒」以下結句まで全部ことづての語なり。【八】茯苓　千年の松の樹の下に生ずといはるる藥草なり、「まつほど」といふ。【九】歸來　今は洛陽へでかける路なるゆゑ華州へもどり來つたときといふなり。【一〇】暄　あたたか。【一一】當爲　當の字は尾句までかかる。爲とは「汝が爲めに」の義。【一二】斲　刀を地にさし草根をきるをいふ。【一三】青冥（松樹の色をいふとの解あるも取らず、）山の高地の空氣の色をいふものとみるべし。【一四】翻動　ひつくりかへす。【一五】龍蛇窟　龍蛇のすむやうな深いいはや、茯苓の在るところをいふ。【一六】鳥獸形　陶隱居の「本草」に茯苓は皮黑くして皺あり、內は堅く白く、形、鳥獸魚蟲の如き者良し、とみゆ。【一七】老藤杖　老いたる藤づるの杖、これも華州の產物。【一八】扶　たすく、からだをささへまもせる。【一九】醉初醒　醉ひをたすけさせるをいふ、押韻のために醒むることまでをいへり、綰は酒好きの人とみえたり、結語は戲れの意を帶びたり。

【題義】洛陽へゆく路で楊少府が華州城へ入りこまうとするのにであうた。そこでたはむれに楊綰にこの詩をおくつた。自分は華州へ赴任したときに綰に茯苓といふ藥草をやるといふ約束をしておいたのだ。此詩は乾元元年冬の暮、作者が華州からでかけて洛陽へゆかうとしたとき作つたもので、華州よりは東方で楊少府とであひ、それに楊綰へのことづてをたのんだのである。

【詩意】自分は楊綰に對することづてをする。いま華州の山は冬の寒さで茯苓はすくない。だから自分がまた華州へもどつてだんだんあたたかになつたなら、高山の青冥なるところへいつて、地面をきれものでつきさし、龍蛇のゐる樣ないはやをひつくりかへし、ほりあてた鳥獸の形した茯苓は、それを封じてそのうはがきをし、またそのうへに約束はしてゐないがふるい藤づるでこしらへた杖をもそへて、おまへの醉ひざめのよろめきをたすけさせることにしようとおもつてゐる、と。

冬末以事之東都。湖城東遇孟雲卿。復歸劉顥

宅宿。宴飲散。因爲醉歌

冬末、事を以て東都に之かむとし、湖城の東にて孟雲卿に遇ひ、復び劉顥が宅に歸りて宿す。宴飲散ず、因つて醉歌を爲くる

疾風吹塵暗河縣。疾風塵を吹いて河縣に暗し、

【字解】【一】冬末　乾元元年の

行子隔手不相見。
湖城城東一開眼。
駐馬偶識雲卿面。
向非劉顒爲地主。
懶回鞭轡成高宴。
劉侯歡我攜客來。
置酒張燈促華饌。
且將欵曲終今夕。
休語艱難尙酣戰。
照室紅爐簇曙花。
榮窗素月垂秋練。
天開地裂長安陌。
寒盡春生洛陽殿。
豈知驅車復同軌。
可惜刻漏隨更箭。
人生會合不可常。
庭樹雞鳴淚如霰。

行子手を隔てて相見ず。
湖城の城東一たび眼を開く、
馬を駐めて偶ま識る雲卿が面。
向きに劉顒が地主たるに非んば、
鞭轡を回らして高宴を成すに懶し。
劉侯我が客を攜へて來れるを歡び、
酒を置き燈を張り華饌を促がす。
且つ欵曲を將て今夕を終へむ、
語るを休めよ艱難尙酣戰すと。
室を照す紅爐曙花を簇らし、
窗に榮（熒か）なる素月秋練を垂る。
天開け地裂く長安の陌、
寒盡き春生ず洛陽の殿。
豈に知らむや車を驅る復た同軌、
惜む可し刻漏更箭に隨ふ。
人生會合常にす可らず、
庭樹雞鳴き淚霰の如し。

冬のくれ。【二】之　ゆく。東都　洛陽。【三】湖城　縣の名、河南陝州閿鄉縣の東、その地に鼎湖ありて太古黃帝が鼎を鑄たるところなりといひつたふ。【四】孟雲卿　前に見ゆ。【五】復歸　この語によれば作者は劉顒の宅より出發していままたかへり來りしなり。【六】劉顒　蓋し縣令ならん。【七】河縣　黃河に沿うた縣、卽ち湖城縣をいふ。【八】行子　たび人、みちゆくもの。【九】隔手　あまりの風塵ゆゑ手を以て目を遮るをいふ。【一〇】不相見　お互にみえぬ。【一一】雲卿　孟雲卿。【一二】向　さきに、一たび已にそこにやどりしことをさかのぼりていふ。【一三】地主　土地の主人役。【一四】懶　ものうし、氣がすすまぬ。【一五】回　ひきめぐらす。【一六】鞭轡　むち、たづな。【一七】高宴　さかんな宴會。【一八】客　孟雲卿。【一九】促　家のものにうながして用意させる。【二〇】華饌　立派なごちそう。【二一】欵曲　まめやかな心のそこ。【二二】艱難　世事のなやみ。【二三】榮窗　諸本みな榮とあれど余は熒の誤に非るかと疑ふ、榮は「めぐる」なり、熒は「あきらか」なり。【二四】素月　しろき月。【二五】垂秋練　秋のねりぎぬは白し、以て月光の白きをたとふ。【二六】天開地裂　京房の易占の語なりといふ、曰く天開陽不足、地裂陰有餘、皆兵起、下害上之象と。これは前年長安の賊に陷りしことをさす。【二七】陌　市街の道をいふ。【二八】寒盡春生　實際の氣節をいひ、衆れて亂極まりて治まらんとし、洛陽の回復されし意をふくみていふ。【二九】驅車復同軌　雲卿と共に同じ車路をとほり來りしをよろこぶなり、（天下一統、同文同軌の意とする說は之を取らず）。【三〇】刻漏　みづどけい。【三一】更箭　時間を示す「や」。【三二】淚如霰　別離せざる可らざるを悲しむなり、霰を一に綫（いとすぢ）に作る。

【題義】冬のくれある用向きで洛陽の方へゆかうとしたところが、湖城の東で孟雲卿にであうた。それでまた劉顒の宅へもどつてとまつた。その夜、宴會がすんでからこの醉中の歌をつくつた。

【詩意】とく吹く風がほこりをふきつけて河ぞひの縣がまつくらで、みちゆく人たちも手で目をおさへるとどちらもあひてがめにみえぬ。自分は湖城の東でちよつと眼をあけて、馬をとめてみたらふと

孟雲卿のかほをみとめた。それですぐ雲卿を劉顕が宅へひつぱつてきた。若しこの土地の主人に劉顕がなつてゐなかつたとしたならば自分も鞭やたづなをひきめぐらしてあとへもどつてさかんな宴會をするなどといふきもちになれなかつたであらう。」　劉君が自分がおきやく(雲卿)をつれてきたのをよろこんで酒を設けともし火をつり、りつばなごちそうを急がせてこしらへさせてくれた。自分たちはうちくつろいで心おきなうこんばんをかたりあかすべきであつて、世事なんぎでまださかんに官賊たたかひをつづけてゐるなどのはなしはせぬがよい。へやぢう爐の火がかんかんあかく照つてあけぼの花がむらがつた樣にみえるし、まどにかがやく白色の月光は秋のねりぎぬをたれたかとおもはれるほどだ。」　さきに長安のまちのみちは「天開き地裂くる」といふひどいめにあうたが、いまや洛陽の宮殿では寒がつきて春が生せんとしてゐる。このとき意外にも自分は孟雲卿と同じみちを車馬を驅つてきてうれしいのだが、いかにせん惜しいことには水どけいの箭がすすむにつれて刻限がうつるのである。人生において會合はいつもできるわけのものではない、それに庭の樹ではにはとりが鳴きだした、別れねばならぬ。自分は悲しくて涙があられのごとくはふりおつるのである。

閿鄉姜七少府設鱠戲贈長歌

閿鄉の姜七少府鱠を設く、戲れに長歌を贈る

姜侯設鱠當嚴冬。
昨日今日皆天風。
河凍味魚不易得。
鑿冰恐侵河伯宮。
饔人受魚鮫人手。
洗魚磨刀魚眼紅。
無聲細下飛碎雪。
有骨已剝觜春葱。
落砧何曾白紙濕。
放筯未覺金盤空。
偏勸腹腴愧年少。
軟炊香飯緣老翁。
新歡便飽姜侯德。

姜侯鱠を設く嚴冬に當る、
昨日今日皆天風ふく。
河凍つて味魚得易からず、
冰を鑿たば恐くは河伯の宮を侵さむ。
饔人魚を受く鮫人の手、
魚を洗ひ刀を磨けば魚眼紅なり。
聲無くして細かに下りて碎雪飛ぶ、
骨有るは已に剝し觜(嘴)は春葱。
砧に落つる何ぞ曾て白紙濕はむ、
筯を放にするも未だ覺えず金盤の空しきを。
偏へに腹腴を勸めらるる年少に愧づ、
軟に香飯を炊ぐは老翁に緣る。
新歡便ち飽く姜侯の德、

【字解】【一】閿鄉　今河南省陝州閿鄉縣なり、潼關より東、函谷關より西にあたる。字體もと鬨に作りしが後漢のとき閿に改むといふ。【二】姜七少府　姜は姓、少府は縣尉の敬稱。【三】鱠　魚肉のいきづくり。【四】姜侯　姜君。【五】嚴冬　寒さのきびしきふゆ。【六】天風　そら、風ふく。【七】河凍　黃河の水こほる。【八】味魚　一に鮛魚に作る、鮛は「イカナ」の類。【九】鑿冰　こほりにあなをあける。【一〇】河伯宮　河の神のすみか。【一一】饔人　料理する人。【一二】鮫人　南海にすむもの、ここは魚を捕へるものをいふ。【一三】魚眼紅　生けるがごとくなるをいふ。【一四】細

清觴異味情屢極。
東歸貪路自覺難。
欲別上馬身無力。
可憐爲人好心事。
於我見子眞顏色。
不恨我衰子貴時。
悵望且爲今相憶。

清觴異味情屢極。極まる。
東歸路を貪る自ら難きを覺ゆ、
別れむと欲して馬に上れば身力無し。
憐む可し人と爲り好心事、
我に於て見る子が眞顏色。
恨まず我が衰へて子が貴き時、
悵望するは且今の相憶の爲めなり。

下　こまかにきざみて下方へおろす。【一五】 碎雪　こまかくされた白魚肉の形容。【一六】 劃　きりくだく。【一七】 韮春葱　此語諸家解一ならず、胡夏客は韮を韮とす、韮は肉ある骨なれば之によれば韮春葱とよむべし、骨つきの肉は春の「ねぎ」のごとくきりきざむをいふ、また「心解」は韮を韮とかは上の「細下」の「下」のごとし、きりておとす、碎は砧と同じ、魚を料理する石のだい。【一九】 何曾白紙湯　きり肉は水にて洗はぬゆゑ紙にのせても紙がしめらぬ。【二〇】 放筯　放の字、仇氏は箸を「おく」（放停の義）とみたるも、浦氏に從ひ「ほしいままにする」義とみるべし、筯は箸に同じ、「はし」。【二一】 未覺空　これはからになるまでむさぼり食ふ意にもみられ、分量多きゆゑいくらたべてもからになるのがわからぬ意ともみられる。いま「餘りある」意とみる。【二二】 金盤　うつくしい大皿（落碡何曾白紙湯、放筯未覺金盤空、この二句はもと偏勸腹腴四平少、飲炊香飯雜老翁の次ぎにありしを、仇氏は「杜臆」に從ひてここにうつしたり。）【二三】 腹腴　魚の腹邊の肉のあぶらこき處、この肉は珍客に供すといふ。【二四】 愧年少　作者老人として貴ばるるをはづるなり。【二五】 飲炊　やはらかにたく。【二六】 香飯　ごまのめし。【二七】 老翁　としより、作者自身。【二八】 新歡　姜少府とは初對面なるゆゑ新といふ。【二九】 飽德　「既醉」の詩にみえたる語。【三〇】 清觴　すんだ酒のさかづき。【三一】 異味　かばつたおちばひ、鮪をさす。【三二】 情屢極　情は姜の情、屢とは酒といひ魚といひ色色の點に於てたびたびといふこと、極とは至極をつくすこと。【三三】 東歸　洛陽へかへる。【三四】 貪路　さきをいそぐ、一目中になるべく多くの路をゆかんとの慾心をだす。【三五】 無力　意がすすまぬゆゑからだにも力なし。【三六】 於我　我に對する關係に於て。【三七】 可憐　姜。【三八】 眞顏色　まことのかほつき、心。【三九】 我衰子貴時　時の字かろし、後日についていふ、貴は顯貴の地位にのぼること。【四〇】 悵望　うらめしくながめる。【四一】 且爲　且は「いささか」、「まあ」、爲は去聲によむ「ため」なり。【四二】 今相憶　今ただちに君をおもふ、この末段が般にあたる。

【題義】 閿鄉縣の尉官をしてゐる羌某が自分のために魚のいきづくりをこしらへてごちそうをしてくれたので、たはむれにこの長いうたを作つておくつた。乾元元年冬、華州を離れて洛陽に赴かんとするとき途中の作。

【詩意】 姜君はこの嚴寒の冬にあたつて魚の生きづくりをこしらへてくれるといふのだが、きのふもけふもいづれも風が吹いてゐる。氷にあなをあけるのでは黃河の神のすまひを侵すおそれがあるし、河のこほつたときには鮒魚を得やうとしてもなかなか得られぬ。」（それに生きづくりをこしらへたのだ。）れふしの手から料理人が魚をうけとる。魚をあらひ刀をといで、きりにかかるとうをはあかいまなこをしてゐる。料理人の庖刀はおともたてず魚肉をきりおろすと雪のこながとぶ。骨のあるところはすつかりきりくだいてしまひ、骨つきの肉は春の葱のやうに白くほそくこしらへる。それを石のま

ないたのうへへおとしても、しいてある白紙をもすこしもしめらさぬ。いくら箸をふりまはしてむさぼりたべても之を盛つた金盤はからにはならぬ。自分をば算客あつかひをして、腹のあぶら肉のところをしきりとすすめてくれるが、これは自分がわかい人人にはづる所である。またこのおやぢのためだとてごまのご飯をやはらかにたいてくれるのである。」　あらたにうちとけたなかだのに、はや自分は姜君の徳に滿腹した。清觴といひ異味といひ君は一再ならず自分のために情のありたけをつくしてくれた。自分は旅程を貪つて洛陽の方へかへるのだが、君のなさけをおもふとそれもむつかしい。別れやうとして馬にはのぼるが氣がぬけてからだに力がない。まことにいぢらしい、君の人がらは氣だてがよい。君のまことのかほつきは自分に對する關係に於てそれがうかがはれる。自分は將來君が榮達をし、自分が老衰する時節がくるなど遠いさきのことは恨みはしないが、ただ今卽坐の君をおもうて忘れられぬところからうらめしくながめやるのである。

戲贈閿鄉秦少府短歌

戲れに閿鄉の秦少府に贈る、短歌

去年行宮當太白。　去年行宮太白に當る、
朝回君是同舍客。　朝より回れば君是れ同舍の客。

【字解】【一】去年　至德二載。【二】行宮　鳳翔のあんぐう。【三】當太白　太白は山の名、已に見ゆ、當とは、山のみゆる地にあたるをいふ。【四】朝回　行宮の參朝からもどる。【五】君　秦をさす。【六】同舍客　宿舍を共にしてゐるもの。

同心不減骨肉親。　同心減せず骨肉の親、
毎語見許文章伯。　毎語許さる文章の伯と。
今日時清兩京道。　今日時清し兩京の道、
相逢苦覺人情好。　相逢苦だ覺ゆ人情の好きを。
昨夜邀歡樂更無。　昨夜邀歡樂み更に無し、
多才依舊能潦倒。　多才舊に依つて能く潦倒す。

【七】同心　なかのいいこと。【八】骨肉親　ちつづきのものごとくしたしきもの。【九】毎語　秦がことばをだすたびに。【一〇】文章伯　伯は長、杜甫をほむることば。【一一】今日　乾元元年のいま。【一二】時清　時節が平和になる。【一三】兩京　長安、洛陽。【一四】苦覺　はなはだしくしか感ずる。【一五】人情好　人のこころがしんせつになる。【一六】邀歡　秦が自分をむかへて歡待してくれた。【一七】樂更無　それほどのたのしみは別にはない、樂しみの極點であつた。【一八】多才　秦をさす。【一九】依舊　もとどほりに。【二〇】能潦倒　ありながらここの尉官ぐらゐで滿足してゐてくれたればこそ自分は十分たのしいめをしたのである、とて他人のおちぶれてゐるのをよろこぶが如くいひたるところが「戲れ」なり。末の二句他の諸解あれどもみな取らず。

【題義】閿鄉の尉官秦某におくつたみじかいうた。前詩と同時の作。唐制にて縣の尉官は一人なるに同地に姜・秦の二尉あるは疑ふべし。

【詩意】去年はちやうど太白山のみゆる處に我が天子の行宮があつた。あのとき朝廷からさがると君は自分と宿舍を同じくしてくらしてゐた。兩人のあひだにへだてた心がなかつたことはちすぢの親戚

かなんどにもまけぬぐらゐであつて、君は口ぐせの様に自分を文壇の霸長として許してくれた。」ことしのけふは時節が平和に東西両京の道も風塵が清らかになり、一般人とであうてみても非常に親切心もでてきたやうにおもふ。ことにゆふべは君に招待されてうちとけばなしをしたがあんな楽しみはほかには無い、これといふも君の多才でありながらいつものとほりおちぶれることを平氣でこんなわなかの縣に居てくれるからだとおもふ。

李鄠縣丈人胡馬行

李鄠縣丈人が胡馬の行

丈人駿馬名胡騮。
前年避賊過金牛。
迴鞭却走見天子。
朝飲漢水暮靈州。
自矜胡騮奇絶代。
乘出千人萬人愛。
一聞說盡急難才。
轉益愁向駑駘輩。
頭上銳耳批秋竹。
脚下高蹄削寒玉。
始知神龍別有種。
不比俗馬空多肉。
洛陽大道時再清。
累日喜得俱東行。
鳳臆龍髻未易識。
側身注目長風生。

【字解】【一】李鄠縣　鄠縣の縣令李某、鄠縣は西安府に屬す。【二】丈人　尊長みさすことば、前にみゆ。【三】胡馬　蓋し西域に產せるうまならん。【四】胡騮　騮はくりげうま。【五】前年　天寶十五載。【六】避賊　賊は祿山の兵。【七】過金牛　金牛は縣の名、四川省保寧府昭化縣東南、金牛を過ぐとは玄宗の蜀に奔るに從つて其地を過るをいふ。【八】迴鞭　初め南に向ひしを北へとめぐらす。【九】却走　あとへしりぞいてはしる。【一〇】天子　肅宗。【一一】飲　馬に水飼ふ。【一二】漢水　嶓冢山より出で、金牛縣の東二十八里にあり。【一三】靈州　甘肅省寧夏府靈州の西南、肅宗が靈武(靈州西北)にて卽位せられしゆゑそこへひきかへす。【一四】矜　ほこる。【一五】絶代　絶世と同じ、世間になし。【一六】一聞　一たび丈人の言をきく。【一七】說盡　丈人がときつくす。【一八】急難才　のりての急難を救ふのはたらきあり、漢水靈州往來のことをさす。【一九】轉益　いよいよますます。【一〇】愁向　作者が愁ふるなり。【一一】駑駘　にぶきうま。【一二】頭上　丈人の馬につきていふ。【一三】批秋竹　耳の尖りたる形容なり、批は「うつ」、秋の竹をはすかひにそぎきりたるがごとし。【一四】高蹄　ひづめあつし。【一五】削寒玉　ひづめの堅き形容なり、玉をけづりたる如し。【一六】神龍別有種　駿馬は龍の精氣をうけてうまるとかんがへらる。よりて龍の種といふ、丈人の馬をさす。【一七】俗馬　凡俗の馬。【一八】多肉　馬は筋骨たくましきをよしとす、肉多きはあしきうまなり。【一九】時再清　時世がふたたび平和になつた。【二〇】累日　まいにちつづいて。【二一】俱東行　仇氏は作者が丈人と同行すととく。(浦氏はこの馬とともに東行す、卽ち李丈人よりこの

馬をかりてそれにのりてゆくことをかくいへるものとなせり、今從はず。【三】鳳臆　鳳凰の様なむね。【三】龍馨　龍のひれのやうなたてがみ。【三】側身　我が身をかたむける。【三】注目　馬にめをつけてみる。【三六】長風　とほくまで吹くかぜ。

【題義】鄠縣の縣令李某の外國産の馬のことをよめるうた。乾元元年冬洛陽へ赴くときの作。

【詩意】李丈人の駿馬は胡地の産にかかる栗毛馬だといはれてゐる。丈人は前年この馬にのつて賊兵をさけて玄宗皇帝のあとをおうて金牛縣のあたりまでゆきすぎた。それから鞭をめぐらしあともどりしてまた肅宗皇帝におめみえをした。卽ちこの馬には、朝には漢水に於て水飼ひ、暮には靈州にみづかうたのだ。」丈人はほこりていふ、この馬は非凡世に絶えたもので、之にのつてでかけると千人も萬人もがみながこれを愛する、と。自分はこの馬が人の急難を救ふ才能があることを十分に說かれるのを丈人の口からきくと、いよいよおぞうまなどに向ふことをうれはしく感ずるのである。」丈人の馬はその頭の上のするどい耳は秋の竹をそいだごとく、脚の下部のたかくあがつたあついひづめは寒玉を削つたやうだ。これをみてはじめて神龍は別にその種があるもので、とてもいたづらに肉の多い凡俗の馬などとくらべものにならぬことがわかつた。」いまや洛陽の大道も平和の時節がふたたびきたので、自分はこの旅行中いくにちもいくにちも丈人と同行し得ることをよろこぶ。丈人の乘つてをるこの馬が果して名馬の相にかなうた鳳臆龍馨をそなへたものかどうかはしりにくいが、身をかたむけて目をつけてみると馬のゆくところ遠く遠く吹く風のおこることはつきりわかる。

觀兵

北庭送壯士。貔虎數尤多。
精銳舊無敵。邊隅今若何。
妖氛擁白馬。元帥待琱戈。
莫守鄴城下。斬鯨遼海波。

兵を觀る

北庭壯士を送る、貔虎數尤も多し。
精銳舊敵無し、邊隅今若何。
妖氛白馬を擁す、元帥琱戈を待つ。
守る莫れ鄴城の下、鯨を斬れ遼海の波。

【字解】【一】北庭　北庭節度をいふ。【二】送　おくりこせしたいふ。【三】貔虎　壯士のつよきものをたとへいふ、貔は虎のたぐひ、猛獸なり。【四】精銳　精錬されすること。【五】邊隅　かたよりたる地方、范陽あたりをさす。（舊說鄴城とす、凡そ敵境に接したる地を邊といふと。）【六】妖氛　兵氣をいふ、わるい氣。【七】擁白馬　白馬は蘇の報將侯景が故事、既にみゆ、ここは史思明等の賊將をさす、史思明は時に魏州（直隸大名府元城縣東）を陷る。【八】元帥　郭子儀をさす、郭子儀はさきに副元帥となりて洛陽を回復せり、今、元帥を以て子儀に授けられんことなのぞむなり。【九】待琱戈　琱戈はほりものをしたほこ、天子より元勳に賜はるものなり。【一〇】鄴城　河南彰德府安陽縣治、卽ち唐の相州なり。【一一】鯨　賊軍のかしら、史思明が譬をさす。【一二】遼海　遼東の海、これは渤海灣にありて史思明が根據地たる范陽と遠からず、故にいふ。

【題義】乾元元年の冬、洛陽にありて北庭の李嗣業の兵の來りしを觀しことをよめり。この年九月に朔方節度使郭子儀、淮西の魯炅、鎭西北庭の李嗣業等七節度に命じ、步騎二十萬に將として、賊將安慶緒を討たしめ、李光弼・王思禮之を助く。之を九節度の軍と號す。十一月、九節度の軍、鄴城を

圍む。明年に至り、正月李嗣業軍中に卒し、三月、史思明鄴を救ふ。官軍大敗す。此篇は前の「觀安西兵過」詩と併せ看るべし。

【詩意】北庭節度の方からこちら（洛陽）へ壯士を送つてよこした。この軍には貔虎のやうなつよい兵の數がいちばん多いのである。彼等の精鋭なことはもとから敵するものがないのであるが、今邊隅の場所である范陽あたりの樣子はどうであらうか。妖氣は叛將の白馬をつつんでゐる、副元帥は元帥として弭弓をさづけられかけてをる。官軍たるものは鄴城の下ばかりにへばりついてゐてはならぬ。直に進んで賊の巢穴をついて遼海の波に鯨を斬りすてる樣にせねばならぬ。

憶弟　二首（原注）時歸在河南陸渾莊

喪亂聞吾弟。饑寒傍濟州。
人稀書不到。兵在見何由。
憶昨狂催走。無時病去憂。
卽今千種恨。惟共水東流。

【字解】【一】喪亂　人の死すると、世のみだるると。【二】傍　そふ。【三】濟州　山東省濟寧州。【四】書　弟よりのてがみ。【五】兵在　兵卒の依然として存すること。【六】見　弟と面會すること。【七】狂催走　作者が狂せんばかりに自己の走ることをうながす、賊を避けんがためなり。【八】病去憂　憂とは自分が弟を思うてうれふるなり、病は作者の病氣。【九】恨　作者のうらみ。【十】東流　濟州の方位は東にあり。

【題義】濟州にありし弟をおもうて作る。作者は乾元元年の冬、華州より洛陽に赴く、時に賊將安慶緒洛陽を棄てて走りし故に洛陽にかへるを得たり。題注の陸渾莊については疑あり、陸渾山（河南嵩縣の東北四十里にあり）に在る別莊をいふか、或は首陽山にある宋之問の別莊の別名か。第二首によれば乾元二年の春、河南にての作なり。

【詩意】いま天下喪亂のあひだにて聞くに、吾が弟は饑寒にせまられて濟州のあたりにゐるさうだが、往來する人もまれで手がみもこず、どこにも依然として兵卒がゐるのでは何によつて弟を見ることができやう。おもふに前年自分は賊を避けんがため狂ふが如く自己の逃走をうながし、病身ながらにおまへを思ふの憂をのぞき得る時とては無かつた。現在離れてゐるとさまざまの恨の念がわき、その念だけがただ水とともにおまへの居る東の方へむかつてながれるのである。

〔二〕

且喜河南定。不問鄴城圍。
百戰今誰在。三年望汝歸。

且喜ぶ河南の定まれるを、問はず鄴城の圍み、
百戰今誰か在る、三年汝が歸るを望む。

故園花自發。春日鳥還飛。　故園花自ら發く、春日鳥還た飛ぶ。
斷絶人煙久。東西消息稀。　斷絶人煙久し、東西消息稀なり。

【字解】【一】河南定　定は平定、洛陽の賊軍の手より回復されしことをさす。【二】不問　問題とせぬをいふ、眞に問題とせざるに非ず、喜びによりてしばらく意を用ひざるをいふ。【三】鄭城圍　乾元元年十一月九節度が之をかこみしこと。前の「觀兵」にみゆ。【四】三年　至德二載以後をいふ。【五】故園　ふるさと、洛陽をさす。【六】人煙　民家炊事のけむり。【七】東西　東は弟、西は自己。【八】消息　たより。

【詩意】自分は故郷へたちかへつてまづまづこの河南地方が平定されたのをよろこんで、鄭城の圍みのことなんぞは措いてとはぬ。たびたびのいくさで今だれが生きのこつてゐるか。三年のあひだおまへがもどつてくるのを望んでゐる。しかし、このふるさとには花もひとりでにひらき、春の日に鳥もまた飛ぶのに、已に久しく人家の炊煙はとだえ、東西ともにたよりがめつたにない。

得舍弟消息

亂後誰歸得。他鄉勝故鄉。
直爲心厄苦。久念與存亡。
汝書猶在壁。汝妾已辭房。

舍弟の消息を得たり

亂後誰か歸り得む、他鄉故鄉に勝れり。
直に心の厄苦することを爲す、久しく念ふ與に存亡せむ―
―ことを。
汝が書猶壁に在り、汝が妾已に房を辭す。
舊犬知愁恨。垂頭傍我牀。　舊犬愁恨を知り、頭を垂れて我が牀に傍ふ。

【字解】【一】歸　河南の方へかへる。【二】他鄉　濟州をさす。【三】故鄉　河南。【四】直　「ひとすぢに」の意。【五】心　作者自身のこころ。【六】厄苦　こまりくるしむこと。【七】與存亡　弟と生死を同じくする、第三句は第四句の結果なり、韓愈「送李愿歸盤谷序」に「其人之視軒冕以來、猶塵埃之視泰山、其樂有如此者、將終吾世而不復出焉爾、嗚呼、其人可與言乎、吾將從之而未能也、悲夫」。【八】汝　弟をさす。【九】書　書籍。【一〇】壁　壁間をいふ。【一一】汝妾　弟の侍女。【一二】辭房　房は「へや」、主人歸らぬためひまをとりて去る、この房は河南の莊の房なり。【一三】舊犬　もとからかはれてゐる「いぬ」。【一四】愁恨　作者のうれひ、うらみ。【一五】傍　そばによる。【一六】牀　ねだい。

【題義】弟のてがみを得てつくる。前の「憶弟」と近き時期の作ならん。

【詩意】天下のみだれてからのちはだれが故郷へかへることができやうか。故郷というたとてあれはてて他鄉の方がそこよりもまさつてゐるぐらゐである。自分はながらくおまへといつしよに生死したいとおもうてゐるのでそれが自分をしてかく心をくるしませるめにあはせてをるのである。いまここ（河南の莊）ではおまへの讀みのこした書籍はやはり壁の間にそのままのこつてゐるが、おまへの妾はもはやひまをとつて部屋からさつてしまうた。今昔のことにおもひふけつて自分がかなしみうらんでをると、前からゐる犬もそのこころもちをさとつてか、頭をたれて自分のねだいのそばへよりそうてゐる。（後半の四句は消息に對する返事となる）

【餘論】此の詩前半の四句、弟の消息の意とみられざるに非ず。ただ舊解は皆作者の意をのぶるものと

するが故に暫く之に従つてとけり。仇氏は汝書猶在壁、汝妾已辭房につきて、辭房卽書中之語、下句因レ上、といひ、「書」を「てがみ」とみ、汝妾已辭房は、てがみの内容とせり、其說首肯し難し。故に従はず。

不歸

河間猶戰伐。汝骨在空城。
從弟人皆有。終身恨不平。
數金憐俊邁。總角愛聰明。
面上三年土。春風草又生。

歸らず

河間猶戰伐す、汝が骨空城に在り。
從弟人皆有り、終身恨み平かならず。
數金俊邁を憐み、總角聰明を愛す。
面上三年の土、春風草又生ず。

【字解】【一】河間　直隸河間府。【二】空城　人の居らぬさびしきしろ、河間府城をさす。【三】終身　しやうがい。【四】恨　作者のいだくうらみ、從弟をもたなくなりしことをうらむなり。【五】數金　奠の時の童謠に河間郗女工數錢とあり、その縁にて數金をいふ、數金とは金錢をかぞへること、いとこの幼時數を知りしことをおもひうかべていへり。【六】俊邁　すぐれたること。【七】總角　つのがみ、童形をいふ。【八】面上　仇氏は「墳土の上」なりととく、墓の表面とみしなり、之に從はば結の二句は面上三年土、春風草又生とし、ここより河間の方を想像してのべしこととなる。ただ墓を想像していふ要なきに似たり。今取らず、面は作者の顏面なり。【九】三年土　土は塵土（ちりほこり）なり、三年の間、風塵に奔走して顏面にほこりを帶ぶるをいふ。【一〇】草又生　時令をいふ、洛陽にいま春が來たといふなり。

【題義】作者の從弟の死してかへらざるものをいためる詩なり。詩中に「三年土」とあり、蓋し天寶十四載に安祿山の軍河北の諸郡を陷れ、作者の從弟は十五載に死せしものならん。十五載より乾元二年までにて三年となる。詩は乾元二年春洛陽に在りての作。

【詩意】いまでも河間地方では戰伐がつづいてゐる、おまへの骨はそのさびしい城に横はつてゐるのだ。人はみなだれも從弟をもつてをるが自分はもたなくなつた。しやうがいこの恨みは平靜なることはできぬ。おまへはちひさいときよく鏡かんぢやうなどして、自分はそのほかのこどもよりすぐれてゐることをあはれんだ。つのがみを結ふころには自分はさらにおまへの聰明なことを愛した。（それも昔のこととすぎ去つた。）自分はその後東西に奔走して三年の間、面上に塵土をあびてゐるがいまやこの地に春風が吹きて草がまた生えるころとなつた。（このとき特におまへの今昔をおもふ。）

贈衛八處士

人生不相見。動如參與商。
今夕復何夕。共此燈燭光。
少壯能幾時。鬢髮各已蒼。
訪舊半爲鬼。驚呼熱中腸。

衛八處士に贈る

人生相見ず、動もすれば參と商との如し。
今夕復何の夕ぞ、此の燈燭の光を共にす。
少壯能く幾時ぞ、鬢髮各〻已に蒼たり。
舊を訪へば半鬼と爲る、驚呼して中腸熱す。

焉知二十載。重上君子堂。
昔別君未婚。男女忽成行。
怡然敬父執。問我來何方。
問答未及已。驅兒羅酒漿。
夜雨剪春韭。新炊間黃粱。
主稱會面難。一舉累十觴。
十觴亦不醉。感子故意長。
明日隔山岳。世事兩茫茫。

【字解】【一】參商　二星の名、めつたにめぐりあはぬほしなりといふ。【二】蒼蒼　びんのけ、かみのけ。【三】蒼　ごましほ。【四】舊　舊は舊知の友。【五】鬼　死者。【六】君子　衛をさす。【七】君　衛。【八】男女　衛のこどもら、男の字或は兒に作る。【九】行　行列、多くあること。【一〇】怡然　よろこぶ貌。【一一】父執　「禮記」曲禮上にみゆ、同志の友を執といふ、けだし、執志同じきをいふならん。【一二】何方　方は方位。【一三】問答　こどもらとの問答。【一四】驅兒　兒を驅るといへば、父たる衛がなさしめることになる、この二字或は兒女に作る。【一五】羅　羅列。【一六】酒漿　漿はのみもの。【一七】剪　きりとる。【一八】春韭　春の「にら」。【一九】新炊　あらたにかしぐ、あたらしくごはんをたく。【一〇】間　雜ふるなり。【二一】黃粱　よきあは。【二二】主　主人舊某。【二三】稱　口にていふ。【二四】一舉　一たび手をあげ、うごかして。【二五】累　つづけさまにのむ。【二六】十觴　さかづき十杯。【二七】醉　作者がよふ。【二八】子　衛をさす。【二九】故意長　從前どほりの親切心がいままでつづいてゐる。【三〇】山岳　いづれの山か詳ならず、彼我兩地の中間にあるもの。【三一】世事　世上の人事。【三二】兩　君と我と兩方ともにの意。【三三】茫茫　世事當なくはかり知るべからざるさまをいふ。

【題義】處士たる衛某におくれる詩。處士とは仕へず隱遁しをる者をいふ。衛某に關しては其の人、其の地、共に明かならず、乾元二年春作者華州にありしとき其の家を訪ひしならんといふ。

【詩意】人生に於てはおたがひ面會せぬことがあつて、ともすると參商の星のやうにめつたにめぐりあはぬものだ。しかるにこんばんはどういふいいばんなのか君といつしよにこのともしびのひかりにてらされることができる。』　人間のわかいときはどれほどもないもので、おたがひ鬢や髮はすでにごましほになつてしまつた。舊友のだれかれはどうしたとたづねてみると半分はあの世の人になつてをる。これをきいては驚きさけんで腸のおくも熱せざるを得ぬ。自分にとつてはおもひもよらぬことである、二十年めにふたたび君が家のおざしきへあがることにならうとは。昔し別れたときには君は未だ結婚してゐなかつた。いまみれば男女のお子さんがにはかに行列をしてゐるではないか。さうしてお子さんがたのしげにおとうさんの友だちである自分を尊敬してくれ、自分に「どちらからおいでになつたか」などたづねてくれる。』　この問答がすむかすまぬうちに君は子どもらにさしづして酒やのみものを席前へならべさせる。それから夜の雨ふりのなか春の「にら」をきりとり、あたらしくごは

んをたいて、米麥のほかに黄粱をませてくれる。主人たる君は、「おたがひの面會はなかなか容易ではないぞ」といふ。それで自分は一いきに十盃ぐらゐつづけさまにのむ。その十盃をのみはするが自分は醉はぬ。ただただ君の親切心がまへにかはらずいまにつづいてゐることをふかく感ずるのである。この親切な君とかたりあふのも今夜だけで、あすにもなつて別れをしておたがひに山をへだてる樣になればそれからさきは兩方とも世事の前途あてどもないことになつてしまふのである。(それをおもふと醉ひがまはらぬのである。)

洗兵行　行、舊作馬。〔原注〕收京後作。

洗兵行

中興諸將收山東。
捷書夜報清晝同。
河廣傳聞一葦過。
胡危命在破竹中。
祗殘鄴城不日得。
獨任朔方無限功。

京師皆騎汗血馬。
回紇餧肉葡萄宮。
已喜皇威清海岱。
常思仙仗過崆峒。
三年笛裡關山月。
萬國兵前草木風。
成王功大心轉小。
郭相謀深古來少。
司徒清鑒懸明鏡。
尚書氣與秋天杳。
二三豪傑爲時出。
整頓乾坤濟時了。
東走無復憶鱸魚。

【字解】〔一〕中興諸將　郭子儀等をいふ。乾元元年十月郭子儀は杏園より黄河を渡り、東して獲嘉に至り、安太清を破る。太清衞州に走る、子儀之を圍みて捷を告ぐ。魯炅は陽武より濟り、李光弼・崔光遠は酸棗より濟り、李嗣業と皆子儀に衞州に會す。安慶緒鄴中の衆七萬を以て來り救ふ。子儀また大に之を破り、慶緒が弟慶和を獲て之を殺す。遂に衞州を拔く。衞州は今河南衞輝府の汲縣

清なり。〔三〕收山東　收とは回收せしこと、山東とは太行山の東、河北の地をさす。〔三〕捷書　帛に文字をかき竿にかかげ、かちいくさをしらすもの。〔四〕清晝同　晝も夜とおなじやうにかちのしらせがくる。〔五〕河廣　河は黄河。〔六〕一葦　「詩經」衞風河廣に誰謂二河廣一。一葦杭レ之とみゆ。一葦は、「ひとたばのあし」をいふ、黄河の水の廣きも一束の葦をうかべいかだのごとくしてわたれるといふなり、一葦過とは一葦杭のごとく容易にわたるをいふ。〔七〕胡危　賊軍の形勢のあやふきこと。〔八〕命　運命。〔九〕破竹中　晉書杜預傳に今兵威已振、譬如レ破レ竹、數節之後、迎レ刃而解、とみゆ、竹をわるときは一節われば他のふしはたやすくからからとわれて

京師皆騎る汗血の馬、
回紇の餧肉を餧す葡萄宮。
已に喜ぶ皇威の海岱を清うするを、
常に思ふ仙仗の崆峒に過りしを。
三年笛裡の關山月、
萬國兵前草木の風。
成王功大にして心轉小なり、
郭相謀深うして古來少なり。
司徒の清鑒明鏡を懸く、
尚書の氣は秋天と杳なり。
二三の豪傑時の爲めに出で、
乾坤を整頓して時を濟ひ了る。
東走復た鱸魚を憶ふ無く、

南飛覺有安巢鳥。
青春復隨冠冕入。
紫禁正耐煙花繞。
鶴駕通宵鳳輦備。
雞鳴問寢龍樓曉。
攀龍附鳳勢莫當。
天下盡化爲侯王。
汝等豈知蒙帝力。
時來不得誇身强。
關中既留蕭丞相。
幕下復用張子房。
張公一生江海客。
身長九尺鬚眉蒼。

南飛巢に安んずるの鳥有るを覺ゆ。
青春復た冠冕に隨うて入る、
紫禁正に煙花の繞るに耐へたり。
鶴駕通宵鳳輦備はり、
雞鳴寢を問ふ龍樓の曉。
攀龍附鳳勢當る莫し、
天下盡く化して侯王と爲る。
汝等豈に知らむや帝力を蒙るを、
時來るも身の强に誇ることを得ず。
關中既に留む蕭丞相、
幕下復た用ふ張子房。
張公一生江海の客、
身の長九尺鬚眉蒼たり。

ゆく、もろくわれんとする勢のなかにあるをいふ。【一〇】 殘殘 ただあまずをいふ。【一一】 都城 即ち相州なり、相州は武德元年に置かれ、天寶元年には鄴郡と改め、乾元二年に都城とす、即ち河南省彰德府安陽縣治なり。賊安慶緒破れて鄴に走れるを以て郭子儀、許叔冀・董秦・王思禮等と之を圍む。【一二】 不日 多くの日かずをまたず。【一三】 得 官軍の手に得ること。 【一四】 朔方 朔方節度使郭子儀をいふ、朔方軍は始は靈州に鎭せしがのち邠州に鎭す。【一五】 無限功 大功。【一六】 京師 長安、京は大、師は衆、大にして人多き故京師といふ。【一七】 皆騎 回紇の兵がみなのるをいふ。【一八】 汗血馬 血の汗をだす名馬。【一九】 回紇 西北夷種の名、唐の官軍の援

徵起適遇風雲會。
扶顚始知籌策良。
青袍白馬更何有。
後漢今周喜再昌。
寸地尺天皆入貢。
奇祥異瑞爭來送。
不知何國致白環。
復道諸山得銀甕。
隱士休歌紫芝曲。
詞人解撰清河頌。
田家望望惜雨乾。
布穀處處催春種。
淇上健兒歸莫嬾。

徵され起つて適〻遇ふ風雲の會、
顚を扶けて始めて知る籌策の良きを。
青袍白馬更に何か有らむ、
後漢今周再び昌なるを喜ぶ。
寸地尺天皆入貢す、
奇祥異瑞爭うて來り送る。
知らず何の國か白環を致す、
復た道ふ諸山銀甕を得たりと。
隱士歌ふを休めよ紫芝の曲、
詞人撰することを解す清河の頌。
田家望望雨の乾くを惜む、
布穀處處春種を催がす。
淇上の健兒は歸るに嬾なること莫れ、

助に來りしなり。【二〇】 餘肉 唐より彼等を愛ふをいふ、餘はくらはしむること、漢書張耳傳に如二以肉餧虎一とみゆ。【二一】 翻鞠宮 漢の上林苑にありし宮の名、唐の御苑内の宮にかり用ふ、事實は乾元元年八月、回紇、其の臣骨啜特勒及び帝德なつかはし、驍騎三千をもつて安慶緒を討つを助けしむ。天子、朔方左武鋒使僕固懷恩をして、之を領せしむといふことあり。【二二】 皇威 天子のご威光。【二三】 清海岱 海は渤海、岱は泰山、海岱にて山東省より直隸北部をかけていふ、安祿山等の軍の根據地なり、清とは風塵をきよめ、亂を鎭定すること。【二四】 常思 いつもおもふ、作者がおもふなり。【二五】 仙仗過崆峒 肅宗の靈武に往來せられしことをさす、仙

(九四)城南思婦愁多夢。
(九七)安得壯士挽(九九)(一〇〇)天河。
(一〇一)(一〇二)淨洗甲兵長不用。

城南の思婦は愁へて夢多し。
安んぞ壯士天河を挽きて、
淨く甲兵を洗うて長く用ひざるを「得む。」

は從軍の意をうたへる笛の曲の名、笛曲中に之を吹き奏すとは戰のつづきしことをさす。【一八】 萬國　天下の諸地をさす。【一九】 兵前　官軍討伐の前面。【二〇】 草木風　草木の風になびきふすごとく服從せんとするをいふ、「三年」の句は「仙仗」の句を承け、「萬國」の句は「皇威」の句を承けていふ。「中興諸將」より「萬國兵前」まで河北の捷報をきき官軍の必勝の望みあることをいへり。【二一】 成王　肅宗の子、廣平王叡なり、叡、はじめ楚王となり、乾元元年二月成王に封ぜられ、四月皇太子となる、叡は兩京を收復するに大功あり、故に之に言及す。【二二】 心轉小　小心とは細慎な注意をすること、きもだまの小さきことと誤會すべからず。【二三】 郭相　中書令（卽ち宰相）郭子儀をいふ、官軍の總指揮官なり。【二四】 司徒　李光弼なり、時に檢校司徒を加へらる。【二五】 淸聖人物をみぬく力あるをいふ。【二六】 懸明鏡　かがみにたとふ。【二七】 倚書　王思禮をいふ、時に兵部尙書に遷る、安慶緒を討つときに肅宗は河東の李光弼、澤潞の王思禮の二節度使をして、都下の兵をひきゐて之を助けしめたり。【二八】 氣與秋天杳　氣は人の氣象をいふ、その氣象は、秋の澄みわたりたる氣が天とともにたかくはるかなるに似たり、思禮の意氣の爽なるさまをいふ。【二九】 二三豪傑　上に列擧せし人人をさす、萬人に德するものを豪といふと。【三〇】 時　その時世。【三一】 登頓乾坤　天地のかたむきみだれたるを正しくととのへなほす。【三二】 濟時　時代をなんぎからすくふ。【三三】 東走（一句）　晉の張翰、世の亂れしを見、秋風の起るにあたり、故鄕なる吳の蓴羹、鱸魚を思ふとて官を辭してかへれり、今は世が治まりしゆゑさやうの人物無しといふなり、東走とは吳は東南なれば東といふ。【三四】 南飛（一句）　古詩に越鳥巢二南枝一とみゆ、越（今の浙江省）は南の國なればその國の鳥はもし北方へゆけば木に巢をかまへるにも南の枝をえらびてすくふと、これは人民もこの越の鳥の如くわがすむ

仗は天子の道路行列にたてるもの、崆峒は山の名、甘肅省平涼府固原州の西百里にあり。【二七】 三年　至德元載より今乾元二年の初までをいふ。【二七】 笛裏關山月　「關山月」

べき居處におちついてゐるをいふ、南飛といふも南へとんでゆくにあらず、南枝にとどまることなり。【三五】 青春（一句）　青春はるのこと、冠冕は高位の官のかぶりもの、之をかぶる人人をさす、入とは春もこれらの人人について都にはひりたりといふなり。【三六】 紫禁　天子の居は天の紫微宮にかたどる、因つて宮中を紫禁といふ。【三七】 煙花繞　はるの煙霞や花がとりかこむ、春色のたけなはなるをいふ。【三八】 鶴駕通宵風蓋備、鸞鳴問寢龍樓曉　古來鶴解にて定說なき句なり、今浦氏の說に從ふ。鶴駕とは太子の駕をいふ、周の靈王の太子晉、白鶴に乘じて仙となり去る。因つて太子の駕を鶴駕といふ、太子傅の駕をさす。通宵とは「よどほし」のことなるも傅がよる肅宗の安否をとふことをいふ。風蓋は天子ののりたまふおてぐるま、上に鳳鳥をのす、肅宗の乘する所のものをいふ。備とはその用意をととのふるをいふ。鸞鳴問寢とは肅宗と傅と、父子相隱つて玄宗の安否を南內（興慶宮）に問ふをいふ、「禮記」文王世子に文王が太子たりしときその親の安否をたづねしことをのべて、鸞初鳴、至二於寢門外一問二內豎之御者一曰、今日安否何如、といへり。問寢とは寢門にいたりて問ふをいふ。龍樓曉は肅宗子としての禮を玄宗につくすこと漢の成帝に似たるをいふ。成帝太子たりしとき元帝急に之を召せしに龍樓門より出でて敢て違道（天子の過るみち）をよこぎらざりしといふ。龍樓は門の名にしてその上に銅龍あるにより名づくと。肅宗の卽位の制に、復二宗廟於函雒一迎二上皇（玄宗）於二巴蜀一、導二鑾輿一而反レ正、朝二寢門一以問レ安、晨省畢矣、とみえ、作者その語を活用すといへり。「成王」の句より「鸞鳴」の句までは將相其の人を得て王業の興らんとするをいふ。【三九】 攀龍附鳳　「漢書」の傳贊に、攀レ龍附レ鳳、並乘二天衢一雲起龍騰、化爲二侯王一、とみゆ、龍鳳は帝王をさす、そのうろこ、つばさにつがまりくつついて英雄豪傑が高き地位にのぼるをいふ。【三〇】 勢莫當　その英雄らの權勢さかんにして他のものは之に對當することができぬ。【三一】 化爲侯王　出典は上にみゆ、人物がみな功によつて侯とか王とかの貴爵をもらふ。【三二】 汝等　侯王をさす。【三三】 豈知　知らぬ、といふは知らぬまに被つてゐるをいふ。【三四】 蒙帝力　天子のおかげをかうむる。【三五】 時來　時運の到來すること。【三六】 身强　强くして武功をたてしことをいふ。【三七】 關中　函谷關の中をいふ、長安地方をさす、此句及び次の句、漢の事を以て唐の事をいふ。【三八】 蕭丞相　漢の高祖の臣蕭何、唐の杜鴻漸をさす、肅宗卽位の初に於て鴻漸は糧食器械等の事に力をつくす、肅宗喜びて靈武（肅宗卽位の地）吾之關中、卿乃吾蕭何也といへり。（或は蕭華または房琯をいふとの說あり。）【三九】 幕下　帷幄のもと、

はかりごとをめぐらす場所をいふ。【六〇】張子房　漢の三傑の一人張良、これは唐の張鎬をさす、至德二載の五月に房琯相を罷め、鎬之に代る、南京を回敬せるはみな鎬が相たりし時にあり。【六一】張公　張鎬、ただし字面としては上句張子房の張の字をうく。【六二】江海客　心を江湖にほしいままにする人、蓋し志氣濶大にして吏傑の智氣なき人なるをいふ。【六三】鎮　ほほひげ。【六四】徵起　天子よりめされてたちあがる、鎬は布衣より左拾遺に任ぜられ、玄宗の蜀に奔りしとき之に從ひ、玄宗の使者として鳳翔の肅宗の行宮にいたり、のち諫議大夫となりまた房琯に代り宰相となる、杜甫は房琯事件のとき鎬に救はれたるなり。【六五】適　たまたま。【六六】風雲會　雲が風にただよへるとき卽ち亂世にであふ、會は機會。【六七】扶顏　家屋のくつがへらんとするを手をそへてささへる、國家の顚覆をふせぐをいふ。【六八】藉草　ばかりごとのよきこと。【六九】青袍白馬　梁の侯景が故事。大同中に童謠あり曰く、青絲白馬蕃陽來、と、景、蕃陽の敗に錦を求む。朝廷給するに青布を以てす。景、ことごとく用ひて袍となし、彩色青きを尙ぶ。景白馬に乘り青絲を轡となし、以て童謠の語に應ぜんとす。青袍白馬は侯景が叛きしときのいでたちなり。今借りて賊將史思明・安慶緒等をさす。【七〇】更何有　意とするに足らざるをいふ。【七一】後漢今周　後漢は光武帝の中興をさす、今周は今日に於て周の宣王再起せしをいふ、並に肅宗をたとへていふ。【七二】再昌　ふたたびさかんなり。「攀龍」の句より「後漢」の句までは、功臣恩寵をたのむべからず、宰相其人を得て、唐朝の復興の兆あるを喜ぶをいふ。【七三】寸地尺天　いかにわづかの領土までも。【七四】入貢　中央朝廷の方へ來りて貢をたてまつる。【七五】奇絳異瑞　めづらしくかはつためでたきしるしのもの、下句にいふ白環銀甕等をさす。【七六】來慶　中央へおくりこす。【七七】致白環　「竹書紀年」に帝舜の九年に西王母來朝し、白環玉玦を獻ずとの記載あり、白環は白玉の「わ」なり、致とはこちらへよこすこと。【七八】道　いふ、世間でいふなり。【七九】銀甕　ぎんのもたひ、みか、「瑞應圖」といふ緯書に、王者、宴不及醉、刑罰中則銀甕出焉、といへり。【八〇】隱士　よすてびと。【八一】休歌　歌ふをやめよとはかくれず世にいでよといふなり。【八二】紫芝曲　商山の四皓のつくれる紫芝の歌をさす。【八三】詞人　文學者。【八四】解鞭　つくることを心得てゐる。【八五】清河頌　南朝、宋の元嘉中に何水澌水ともに清めり、時に鮑照「河清頌」をつくる。河水のすむは太平の象とせらる。【八六】田家　農家。【八七】望望　くびをのばしてながめる。【八八】雨乾　ひでりにて雨なきこと、乾元二年春には旱あり。【八九】布穀　鳩の一種、戴勝なりと。【九〇】催　うながす、「ほと」のなくは節をしらせてたねまきをさせるなり。【九一】春種　はるたねまきすること。【九二】洪上健兒　洪は水の名、衛州(衞輝府汲縣)にあり、相州(彰德)の南鄙の地、洪上とは洪水のほとり、健兒は武卒なり、洪上の健兒とは鄴城を圍むためにでむいてゐる官軍の兵卒をさす。【九三】飧莫纖　ぶしやうせずと早くかへれ。纖は「ものうし」、ただし早く功をなしとげたうへはやくかへれとの意。【九四】憑多夢　夢はなつとについてのゆめ。【九五】安得　希望のことば。【九六】壯士　兵卒。【九七】提　ひく。【一〇〇】天河　あまのがは、そのかはみづをいふ、かは水にて兵を洗ふことはなけれども、雨が兵をあらふといふことあり、「說苑」に周の武王が殷の紂王を伐ちしに大雨ふりたり、散宜生が曰く、此は妖にあらざるか、武王曰く、しからず、これ天、兵を洗ふなりと、天河といふは作者想像をもちひてかくいへり。【一〇一】淨　きよく。【一〇二】洗甲兵　よろひ、武器をあらふ、洗兵のことば上にみゆ。「寸地尺天」以下の末段はいよいよ太平の來るみこみあるをいひ、早く軍をやむるにいたらんことをねがふことをいへり。

【題義】この詩の結句に淨洗二甲兵一長不レ用とある「洗兵」の二字をとりて題とす、諸本「洗兵馬」に作る、仇氏「杜臆」に從ひて「洗兵行」とす。天の河の水で武器をあらひ去り、永久に用ひぬ樣にしたいといふ意味をのべたるうたなり。九節度の官軍が相州(卽ち鄴城)に敗れたるは乾元二年三月三日壬申にあり、此詩はしきりに官軍の捷報を得て未だ敗れざりしときに成りしものなれば、けだし同年二月中の作なるべし。浦氏は洛陽にての作とす。

【詩意】わが唐の中興の諸將らは山東河北の土地を賊の手から回收して、そのかちをしらせるかきものが夜中にくるが晝もまた同じやうにやつてくる。きくところによると官軍は黃河の廣い水も一束の藁をうかべてわたる樣にたやすくすぎてしまひ、賊軍は危くなつてその運命は破竹の勢に乘せられ

んとしてゐるほどせまつてゐる。ただのこつてゐるのは鄭城であるがそれも日かずのたたぬうちに吾が手に得られるであらうし、すべて官軍のこの形勢をきめることは朔方節度たる郭子儀のはかられざる功にまかしてあるのである。みやこでも回紇の兵が援助にきて彼等はみな汗血の馬にのり葡萄宮ともいふべき御苑の宮域で養はれつつある。一方にはもはやわが天子の御威光が渤海岱山の遠方までを鎮定するに至つたことを喜ぶとともに、他方には我が君がかつて崆峒山のあたりまで御通過になつたことはわすれられぬことである。およそ三箇年といふものは笛中に關山月の曲をふいていくさになやんだが、いまやあらゆる地方が官軍の討伐の前面には草木の風になびく樣に服從せんとするほどになつてきた。」いま要路にゐる人人を見るに、わが成王はうちたてられた功が大なるとともにその心はいよいよちひさく用意ぶかくせられ、宰相郭氏は謀のふかいことむかしからめつたにみぬほどであり、司徒李光弼は鑒識あかるくあだかも鏡をかけたるがごとく、兵部の王尚書の氣象は秋のそらとともにはるかにすみわたつてをる。これらの豪傑は時代を救はんがために出てきて天地のみだれたのをととのへて時代をすくひをはつたのである。だから張翰の樣に東に走つて鱸魚がこひしいなどいつて朝廷からにげだすものもなく、越の鳥が南枝にとんでおちついてその巣にとまつてゐる樣に人人は安堵してをる。都の回復とともに文武百官がりつぱな冠をつけてはひりこんだにつれて春げしきもそれといつしよに入りきたつて、宮城のうちはちやうど煙霞や百花がぐるりととりかこむにふさはしくみえる。皇太子（成王）はよもすがら鶴駕にて天子の御安否をおたづねになり、それとともに天子もまた鳳輦をおそなへになつて、御父子つれだつて、とりのなくあかつきには御隱居の君（玄宗）の御安否を寢門の外（南内興慶宮の）におとひになるべく龍樓門にも比すべき御門からおでましになる。」

この時にあたつて龍鳳の勢にしたがうて榮達したものの權勢は之に當るものはないほどえらいものであり、天下ぢうがほとんど猫も杓子もみんな侯とか王とかいふ身分のものとはやがはりした。汝等はよもや氣がつくまいがすべて天子の御恩德のおかげをかうむつてゐるのである、好運がきたからとてわが身の强かつたためこんにちの位置を得たなどとほこつてはならぬのであるぞ。關内では已に蕭何に比すべき杜鴻漸をのこしおかれ、帷幄の謀臣としては張良に比すべき張鎬をお用ひになつてゐる。張公はその一生は江海の豪傑で、身のたけは九尺もありほほひげや眉毛は蒼然としてゐる。この人がおめしによつて風雲のとびたつ亂世のをりにであひ、國家のまさに顚覆せんとするのをたすけ起したので、はじめていかにこの人のはかりごとがよかつたかが知らるることになつた。もはや侯景の樣な青袍白馬の叛將があつてもそんなものはなんでもないものである。後漢光武の世、周の宣王の世が今日ふたたびさかんになるに至つたことはよろこばしいことである。」一寸一尺のいかに僅かの領土までもみな朝廷へ入貢するし、めづらしくかはつためでたいしるしのものはあちからもこちからも爭うておくつてくる。どこの國かはしらぬが白玉の環を獻じてよこしたさうだし、また世人のいふと

ころによるといろいろの山山で銀の「みか」がでたさうだ。隱遁者も四皓のやうに山の中で紫芝の曲などうたふことはやめてしまへ。文學者は鮑照ならずとも淸河の頌をつくることをこころえてゐる。ちかごろはひでりで農家ではうらめしさうに雨のすくないのを惜しんでゐる。「まめまはし」鳩はくうくうないて處處で種まきをさいそくしてゐる。都の城南のるすばんの妻はしんばいして夜な夜な夫を夢みることが多い、洪水の方へ征伐にでかけてゐる兵卒どもはどうぞ早く賊を平げてすばやく歸つてほしい。自分はできるなら、壯士をやとうてあまのがはらの水をひつぱつてきて、さつぱりとよろひや武器を洗ひ去つて永久に用ひぬ樣にしたいものだとねがふのである。

昭和三年七月十二日　印刷
昭和三年七月十五日　發行

續國譯漢文大成　文學部　第四帙　【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區淡路町二丁目十四番地

右代表者　鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五）三八三番
振替東京一八五七二番

309
6.5

終